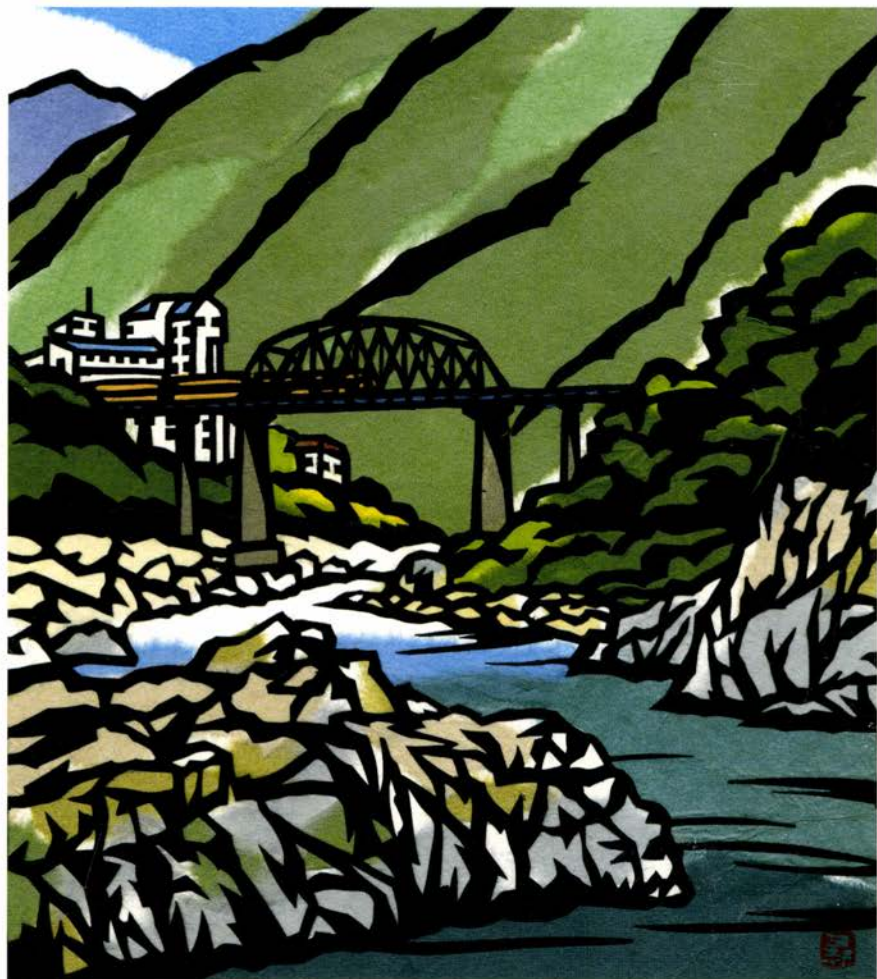


川柳塔

平成二十一年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九八五号



白川協加盟

No. 985

同人特集：父を語る

六月号

六月本社句会開催日

六月九日（火）午後五時半

例月の七日ではありませんのでご注意下さい

予告 第十五回川柳塔まつり

八十五周年記念大会

とき 十月十二日（祝）
ところ アウイーナ大阪

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 六〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二〇〇〇円

②半頁 九〇〇〇円 ③一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十三日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号室

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

弘法大師のことば

河内 天笑

高野山の麓、紀ノ川沿いに弘法大師のご神体を祀った寺があります。通称「学文路のお大師さん」と呼んでいますが、ここで頂く御神水は万病に効き目が灼か（あらたか）ということで各地からお参りに通う人が多く、特に弘法大師の御命日（二十一日）は相当混雑します。

「信じる者は救われる」という言葉がありますが、七人兄弟で上から三番目の姉（当時二十一歳、筆者小学三年）は無類に信心深く左腕の神経痛を「お大師さんに治して貰うんや」と私を従え、お神水を頂いたり噴霧器でお加持して貰ったりしによく通ったものです。「弟のアタマ良うなるように」と頭の天辺から、ひたいがほとほとになる程浴びせて貰った事もあります。

私が成人した後に、河内長野に嫁いだ姉を車にのせて学文路大師に参った、ある日のお説法に私は大いに打たれました。

説法というよりお話を聞かせてくれるという感じで、しかも高い所からでなく同じ畳の上に立ってさらさらと流れるように聞かせてくれたのです。

「親孝行してますか」「一同「……」とか、へらへら笑

ったりすると「ほらほらしてへんやろ、それでもよろしい。ここへ来る人はその内みんな親孝行する人や。親孝行したい時には親は居ず」て言うやろ、ところがどっこい親が死んでからでも孝行は出来ますんや。お墓まいりするんや。なんぼ大きな墓建てても一年にいつべんやそこらではあきまへんでえ。盆正月とお彼岸、それに親の祥月命日など、ざんげでもええし報告でもええし、ご先祖さんにまつとうに生きてる姿見せに行きますねん。霊界ではこうして参ってもろた仏はどんな位が高うなつて行くんです。

生きてる時に出来なんでも、墓参りしつかりすれば先祖を喜ばせたり、光らす事が出来ますんや。温泉に行く暇があつたら墓参りしなはれ。」この日の導師のことばは忘れず、今も事ある毎に墓参りを実行しています。

つい先日五月三日、市制百二十周年を期して堺市から第一回文化功績者として烏澁がましくもロイヤルホテルで表彰されましたがその日、孫六人と息子や娘夫婦など総勢十二人でにぎにぎしく寺地町のお墓へ報告に参りました。孫達に墓参りする姿を何回か見せておくのもいい事だと思つたからです。

昭和三十六年に学文路大師にお参りした際、導師のおしえを実行しているという報告をお伝えした所、喜ばれ「生死にかかわる事故や大病を霊界から常に守ってくれているでしょう」とつけ加えて下さいました。現在は二代目の導師に代わっています。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

私の句

割引の時はシニアの顔になる

堀 正和

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大歩危」

■巻頭言 弘法大師のことば

川柳書以外の路郎の著作

河内 天笑 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

榎 原 道 夫 …… (2)

川柳塔の川柳讃歌 (54)

河内 天笑 選 …… (4)

自選集

木津 川 計 …… (47)

温故知新

大正11年 …… (48)

水煙抄

小島 蘭 幸 選 …… (51)

麻生路郎句抄

大正11年 …… (52)

愛染帖

大正12年 …… (71)

檸檬抄「ゼ ロ」

新家 完 司 選 …… (72)

■特集 父を語る

高瀬 霜 石 ・ 木 本 朱 夏 共 選 …… (76)

川柳書以外の路郎の著作

榎 原 道 夫

東野大八「麻生路郎物語」の冒頭に、「路郎が著述業として本格的な文筆活動を開始したのは大正十一年の三十五歳(満34歳―筆者注)である」とあり、「童謡の森」について当時の状況を踏まえて詳述しているが、他の、川柳書以外の著作には触れていない。そこで、インターネットで全国の図書館の蔵書を検索し、古書販売目録を調べてみたところ、予想外に川柳書以外の著作もたくさんあることが分かった。路郎が、著述業に携わったきっかけの一つとして、「商業の大日本」主幹(大正8年)や「大正日日新聞」経済部主任(同9年)を務めた「麻生路郎物語」参照)ことによる、マスコミ界との繋がりが挙げられるだろう。以下、現在のところ確認出来た川柳書以外の路郎の著作を挙げる。書名の上の算用数字は通し番号。

大正11年…1「現代模範 美的候文」2「現代模範 女子美的候文」3「童謡の森」

大正12年…4「これは面白い 世界歴史の話」5「新譯イソップの話」6「新譯アラビヤンナイト」

大正13年…7「これは面白い 日本歴史の話」

都倉求芽・水野黒兎・森田明子・江見見清・山口光久・鴨谷瑠美子
古今堂蕉子・酒井一壺・清川玲子・岡本久峰・富田蘭水・富田美義
堂上泰女・米澤俣子・飛永ふりこ・播本充子・木本朱夏・加川靖鬼
誹風柳多留 一 篇研究 46

一路集

「いつも」

山本玉恵選

(92)

「レンズ」

加藤茶人選

(92)

初歩教室

「細い」

玉置当代選

(93)

秀句鑑賞

「涙」

鈴木公弘

(94)

追悼

「水煙抄」

西口いわゑ

(96)

五月本社句会

「水煙抄」

白根ふみ

(98)

各地柳壇

「水煙抄」

市丸晴翠

(99)

柳界展望

「水煙抄」

市丸晴翠

(100)

六月各地句会案内

「水煙抄」

市丸晴翠

(101)

編集後記

「水煙抄」

市丸晴翠

(102)

ひとこと／大内朝子

「水煙抄」

市丸晴翠

(103)

希久子・朱夏・尚士

「水煙抄」

市丸晴翠

(104)

座右の句

「水煙抄」

市丸晴翠

(105)

魂で咲き魂で散るさくら

「水煙抄」

市丸晴翠

(106)

私の句

「水煙抄」

市丸晴翠

(107)

不甲斐ない己を裁き未来期す

「水煙抄」

市丸晴翠

(108)

福岡末吉

「水煙抄」

市丸晴翠

(109)

薫風

「水煙抄」

市丸晴翠

(110)



上の巻」8『これは面白い 日本歴史の語下の巻』9『これは面白い 世界偉人の話』10『受験必携 メンタルテスト』11『英語独習会話の近道』12『ロビンソン漂流記讀』昭和3年：13『世界の昔ばなし』14『雄辨自在 五分間演説と挨拶』昭和6年：15『産業界の先駆 宇喜多翁』昭和7年：16『卓上五分間式辭と演説 昭和版』17『成功美談 未来の大統領』昭和11年：18『式辭と演説挨拶の仕方』一覽すると、児童向けの教養書の多いが目につく。大正時代は、『赤い鳥』『金の船』などの児童雑誌が創刊され、教育も見直され、私立の小学校もたくさん開校した時代であった。10は、当時、中等学校の受験に学科試験だけではなくて、心理テストも実施されるようになったため、その受験対策として出版されたもの。15は、高野登山鉄道取締役や帝國交通協會理事長を務めた宇喜多秀穂の伝記を路郎が編纂したもの。以上18冊。その内、2・8・12は、筆者未見。調べた範囲内では、全国の図書館には収蔵されていない。まだ、これ以外にも著作があると思う。古書店などでお見かけになったら、川柳塔本社事務所まで御一報ください。来年の10月に発行する『麻生路郎読本』（仮題）に梗概を掲載する予定である。



河内天笑選

高石市 浅野房子

川柳塔へ投句してでもしがみ付く
何十年なるかひとりの晩ごはん

久し振りにおいしいかぼちゃ食べました

予定など立てぬ出たとこ勝負です

三時間ドラマ疲れただけのこと

ミサイルに心乱され桜散る

大阪市 谷口 義

遊んではいけない働いてもいけない

変だなあと思っっていたら日曜日

気を遣いすぎて気を遣わせている

新聞を畳み大きな欠伸する

聞いていた通りの人がやって来る

取り返したくない事は忘れよう

西宮市 西口 いわゑ

うきうきを押さえ切れない好い通知

祝日も国旗揚げない民となり

侍がいました勝ってくれました

洒落たエプロン只それだけで弾んでる

男対女不可思議なるいくさ

今以っておとぎ噺の中にいる

羽曳野市 三好 専平

勉強をしときます声消えにけり

ほとけさん盗まれるとは気がつかず

満開の桜の下へ車椅子

ハローワークなどと英語でごまかされ

多喜二まで脚光浴びる逆もどり

監督になつて観ているトラファン

枚方市 海老池

出不精へ気合を入れる春の風

蜜蜂減のニュースを寒く聞く花粉

隣との格差の匂う夕餉どき

お別れの美学と思う花吹雪

キタミナミ私なりの飲み屋地図

棚田から夕日担いで帰る父

洋

豊中市 坂上高栄

血のような夕陽が明日の空を染め
太平楽ひねもすゆらり字が書けぬ

千秋楽私の胸も千秋楽

勝負の綾が少し分かつてきたか虎

雲はとれ雨も止みタイガースの試合

タイガース一点二点じゃ笑えない

堺市 村上玄也

二度までも我が身襲つてきた癌奴

自覚症状ないまま病んでいた臓器

淡々とオペの手続進められ

神に祈り医師を信じて受けるオペ

二回目は慣れたようでも恐いオペ

手術後の痛さ思うと身が竦む

大阪市 池上清治

優先席でうとうとのギャルちゃんと降り

文楽の三味弾く侘びに魅せられる

マジシャンの危険な芸は見たくない

海賊が日本の税を食い出した

手料理は長寿を招く僕の芸

一芸もない凡人に甘んじる

大阪市 平嶋美智子

真赤な陽心奪って沈み行き

お日さんに起こしてもらう心地よさ

恙無く記する事なく日が暮れる

優越感嫁にもたせて恙無し

番犬も古い泥棒に尻尾ふる

大人には思い及ばぬ子の遊び

大阪府 米澤俣子

思いやり傘は斜めに譲り合い

休耕の仕返し手には負えぬ草

言いたいこともここで止めとくのが礼儀

ときめきが欲しくて春のいろまとう

花やごう燃えたい命ある限り

青空のとんび見ている籠の鳥

鳥取市 武田帆雀

責任を取らないで済む独裁者

天下り族で固めた相撲界

英才教育を受けてない案山子

鉛筆が落ちない大工さんの耳

顔パスで飲む常連の指定席

一徹を張って庵の古茶釜

高知市 小川てるみ

幸せの種をせつせと蒔き直す

じつくりとわたくし色に染めて古希

シンブルに生きて変わらぬ家庭ゴミ

ご機嫌が斜めツンツン酔の匂い

独りではないと悟ってよく笑う

即答の癖が墓穴を掘っている

豊中市 藤井則彦

長調の歌が明るくする日本

アンコールになるととうとうとから目覚め

フォアグラを食べるときだけおちよほ口

上司より下手に見せとく隠し芸

速読がまだ止められぬ定年後

地獄だけはごめんと俄かボランテニア

枚方市 寺川弘一

ネイルアートで料理ができるはずがない

食事抜いてもサプリメントは欠かさない

アドリブで愛するなんて言わないで

手ぶらで来いとしつこいほどに言ってくる

貧乏な家にも福の神は来る

酒止めて人生観を変えました

弘前市 櫻庭順風

白髪に譲ってくれた温い席

新聞に載せぬ安心して死ねる

講堂の冷えが正座の脚を這う

就中十二指腸のしたたかさ

走るなど人工弁が叫んでる

よたよたと歩く姿は明日の我

鳥取市 倉益一瑤

ちちははが側に居そうなハーモニカ

ひらひらとさくらセクシーではないか

マドンナのピアノ遥かはるかなり

サプリメント ポパイになったのはおんな

渋滞の脳です名前出て来ない

自己紹介たっぷり化粧しておこう

出雲市 小白金房子

満堂の灯りに座る春彼岸

布草履縁起を担ぐ喜寿の春

観覧車母子の夢がまわり出す

あちこちで自然の恵み春を摘む

白菜の開花いっぱい陽に踊る

子牛の目頼すり寄せる家族愛

松江市 津川紫晃

季節風黄砂と花粉配ってる

うぐいすが負けじと歌の練習中

結論はひと言で足るイエスノー

口下手な男が抱いている勇氣

見回すと世代交代花ざかり

響き合う心着信音が鳴る

大阪市 井丸昌紀

魂のこもった酒だ直に酔う

詰め込まれ吐き出されあ朝の駅

性格は正反対の名コンビ

生え際の進み具合が気に掛かる

ジェット機ものろのろとゆく春霞

神戸から奈良に着くとは反則だ

堺市 奥 時 雄

チャイナ製退けると売り場成り立たず

バグの顔気の毒と見るブルドッグ

嘘つけぬ人で胃薬放せない

整形を済ませ留学から帰る

失恋の過去を美人は語らない

狼狼の気配を妻は見逃がさず

鳥取市 福 西 茶 子

即答の癖で貧乏くじばかり

百選の水も美人にしてくれぬ

仏さま不細工ですが庭の花

四畳半ふたつ互いの小宇宙

奉りすぎたか妻が威張りだす

尾骺骨痛くなるほどコタツ守り

豊中市 松 尾 美智代

花吹雪日本列島かけ巡る

娘の引越し私に出来る料理番

いつかいると溜めていた物みな捨てる

重宝してる無料通話の家族便

お互いに離れてわかる思いやり

本当に大切な物目に見えぬ

池田市 栗 田 久 子

菓づくりのつばめに軒をこころよく

幻の麦畑からあげ雲雀

山裾に立てば幼き日に戻る

水田のまだ残る地に住んでいる
里山の朝カッコウの声を聴く
友と逢う日の装いに見栄をはる

米子市 木 村 富美子

かくし味そつと沈める母の愛

氣を配る娘のそばであたたかい

商いの才を集めて街おこし

挑戦をしたいと老いの血が騒ぐ

卒業を祝うヘソクリ貯めている

破壊され汚され天が地が騒ぐ

大阪市 板 東 倫 子

桜さくらサクラに酔うた信貴の山

伝統の医療薬草はりやいと

国会の乱は抜き打ちだまし討ち

発想を逆転させて生き直す

孤独死と聞く裏窓に西陽差す

いきものよ生きる元氣と死ぬ勇氣

藤井寺市 鈴 木 いさお

混濁の世を細々と生きてゆく

しゃれこうべ元は美人と言われても

極まって只貧乏を笑うだけ

糺さねばよかった君のふたごころ

血統書付きが雑種にひと目惚れ

首くるくるまでの覚悟はない浮氣

檀原市 居谷 真理子

寒行のような花見をして帰る
茶と最中私の中に棲む母と
欠伸かみころした涙とは知らず
悲しみの極みで声の無表情
通夜の酒時計カチリと明日になる
春耕の鋤に蚯蚓は真つ二つ

寝屋川市 富山 ルイ子

朝早く誘い合つて花曇
連れだつて心はなやぐ花衣
花冷えに一枚羽織る車椅子
花筏春の陽を浴び鯉が群れ
杖ついで歩きましたと花便り
天国もかくやと思う花吹雪

犬山市 関本 かつ子

並の子が並で暮せる世を願い
順序よく話せば何でもなし話
先客の猫も見上げる雨やどり
人は上犬は下見るさくら道
少々の業を背負つて生きる道
被害者に納得いかぬ無期の刑

大阪狭山市 矢野 梓

しばらくはみんな忘れて花に酔い
スピーチの訛が宴和ませる
お腹まだ空いてないのにもうお昼

賞味期限切れてあわてて賞味する
失敗と気が付くまでに時間要り
あちこちのスイッチまめに切つてエコ

犬山市 金子 美千代

無理やりに納得させる夫の死
習い事出来る年金ありがとう
花粉症デビューマスクの春おほろ
富士山が見えて車内が賑やかに
満開の桜に負けぬほの色
持ち帰る重さ忘れて潮干狩

和歌山市 木本 朱夏

環状線くるくる桜見て飽かず
誰も見えないと欠伸する桜
ギザギザのハートを埋めさくら咲く
バンソウコウ剥がすと桜散つていた
旅人はまだ去りかねて山桜
潮時を想う桜の虚脱感

大洲市 中居 善信

どんな顔して会えばいいのか初対面
地のままで会うことにする初対面
向こう意気だけで出世をしなはった
墓掃除跡継ぎの子がいけない墓
刺のある言葉の好きなのも素顔
いきいきと今老春が燃えている

堺市 山本半銭

晩酌を付き合い弾む凡夫婦
言い度くて言い度くて飲む酒もあり

夕焼けへ真すぐ進む影引いて

愛敬で済まぬうっかり繰り返し

果実酒のびんを並べて下戸楽し

サイクリング広い芒野通り抜け

米子市 政岡 日枝子

来年も会おうと花に言つてある

るんるんの四月桜も後を押す

何もかも捨てて身軽な下り坂

保険金受け取り人は妻ばかり

大正ロマンしつとり聞かす声が出る

ぬくい背の人の後ろでバスを待つ

吹田市 山本 希久子

花の章でしめくりたい余生

仏縁をたどると花の寺に着く

百歳の骨があまりにも軽い

私の天気予報は雨ばかり

行きずりの善意に会つた旅の雨

旅人としてコンビニの灯を探す

大阪市 小谷 集一

合格をしたら神とは縁が切れ

輝いていないと過去の人になる

ブランドの服にローンがぶら下がり

ピンチとはチャンスがきつと来る予告
なるようになってきたから今日がある
人生がゼロで終れば丸儲け

京都市 高島 啓子

しだれざくらは連綿体で咲いている

若みどりもう結婚をすると言う

食べすぎる今年最初の豆ごはん

御香典拝辞で悪くなる景気

熟年の花は肥料がきいている

人脈の中でもたつくやじろ兵衛

堺市 志田 千代

いくばくの花枯らしたか植木鉢

賛成をしてくれた方忘れない

楽しませ楽しんでる隠し芸

空気に入れないから放置自転車に

カロリーの高い珍珠が大好きだ

プロポーズの言葉を妻が覚えてる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

お日柄もよろしく直にきた花粉

満開のあとのやさしい花吹雪

雑草を抜いた匂いは日本晴れ

いちどきに賑やかになる水いらす

うとうととする人仏さんみたい

ツーカーの友とのランチ安らぎも

大不況神も仏も横を向き

美しい日本世直し待つ庶民

四月早や夏日歳時記役立たず

大学の式へ親馬鹿揃い踏み

夢かない余生の脳の怠け癖

好奇心燃やして脳を磨かねば

思うのは自由で夢をふくらます

今日開く蓄につこり笑い出す

毒舌が君の個性になつてゐる

良心に駄目とブレーキ掛けられる

女だと判るやうにと紅をつけ

火遊びもせねば大人になれません

葉桜に染まり癒した五月病

まとまった話に水をさす本音

念を押す癖もいやです倦怠期

緊張を乗せて電車も新学期

通風もメタボもあるが好きな酒

座禅でもしたいが正座できぬ膝

松山市

古手川

光

お花見へストレス溜めてゐるさくら

見てくれぬ所でさくら咲き誇り

寄らば大樹通用しなくなりそうだ

高槻市 乙倉 武史

ブルトレもスロライフもさようなら
ひと言で始まる長い立話
戦争は死の商人がいる限り

鳥取市 鈴木 公弘

辞任して半年経てば忘れられ

図書館の司書も眠そう春うらら

マルクスも親鸞様も嘘つかぬ

生きるとは逆転がある砂時計

少しずつ海自が外を向きたがる

まだ未完プール歩いてゐるメタボ

鳥取市 近藤 佳子

母偲ぶよすがに写経しています

ご先祖もお花見してる花吹雪

花は吉野憧れつづけまだ行けず

さくら道一年生の靴が鳴る

あるがままを受け入れながら八十路ゆく

病院でばったり出合う古い友

西宮市 山本 義子

白いばら棘に磨きをかけてゐる

美人だと自信ある人なお磨き

能入門 足にみがきをかけてゐる

かんらんから二枚の舌を磨いてる

ほんものを磨いてますか腹話術

血統書礼儀正しいとは書かぬ

熊本市 永田 俊子

花を浴び花を踏みゆくありがたさ

春宵一刻油断してたら杖をつき

せめてもの残りの貢汚すまい

さもししい心に万両を実らせる

永らえて健康法など聞き流す

熊本市 岩切 康子

今何処よここにお迎え乞うケイタイ

三ヶ月毎に会う報楽しんで

見抜かれた遠慮へ二度も誘ひ電

桜見は一寸だけして賑やかに

遠い人思い出させるちぎれ雲

熊本市 高野 宵草

健康を一手に握るごと葉

役所前ポストへ手紙役所宛

騙された方が馬鹿だと自虐する

若い氣を足の運びがたしなめる

妻病んで家事もしんどいものだなあ

唐津市 市丸 晴翠

わけありの野菜旨みは五つ星

もう八十まだ八十と畑を打つ

世紀超え厚味を増した広辞苑

雑草の根が刃こぼれの鎌笑う

雑草に負けない孫の破れ靴

唐津市 樋口 輝夫

吹き溜まり再起を賭けた青テント

しがらみを断とうと決めた花鉢

還暦が娘に返る里帰り

薄い紙中身は重い請求書

土煙あげてアウトになる男

唐津市 山口 高明

御開祖は親鸞ですか訊いて見る

ソコ退けソコ退けイージス艦のお通りだ

橋立へ淑女あらわれ裾まくる

止まり木に理由ある女が待ち合せ

鍋茶碗要らぬ夕餉よ老い独り

唐津市 坂本 蜂朗

靖国の杜に花びら軽く舞う

命かけ戦わされた赤い紙

線香の煙静かに有難う

首根っ子押える妻の細い腕

居酒屋で傷舐めあっている背広

唐津市 井上 勝視

軍国の洗脳いまだ溶けきらず

童謡が施設でうけるハーモニカ

無邪気でも子は知っている夫婦仲

銭ゲバは古今を問わず生きている

スッピンも裏の顔まで覗かせぬ

シドニー 坂 上のり子

弘前市 須 郷 井 蛙

どっち向いてもうさん臭いのは政治
未来への予測いよいよ立て難し
待ち人が来れずむくれているケーキ
茶にはこり浮いてた家にまた呼ばれ
見定めて直角に飛ぶ塀の猫

弘前市 高 瀬 霜 石

善の芽も悪の芽も出る少年期
大金が入るとロクなことがない
他人さまの失敗ほんとためになる
芸術の域に達した塩加減
空腹の時だけ頭よくまわる

弘前市 福 士 慕 情

ガラス越し僕を見ているのは金魚
轍からコホンと父の軽い咳
また一つ灯りが消えたネオン街
スギ花粉おれの目玉を狙い撃つ
傷ついた白鳥一羽だけのこる

弘前市 相 馬 銀 波

妥協ぐせ棄てろと成果主義が説く
可能性薬一本も捨て切れぬ
途中下車男プライドいずこやら
落書きの傘にふたりの名が残り
春の傘ドラマくるくる引き立てる

齢毎に仕事が増えるイエスマン
一坪の庭にも見える几帳面
深呼吸今日の空気を入れ替える
湯上りのビールで宇宙船に乗る
老人の力で動く町の自治

弘前市 高 橋 岳 水

子に遺す父たる者のあばら骨
ものの芽に生命漲る春の野辺
山に棲む山の掟にしばらく
断崖に生えて孤高を保つ松
白旗は振らぬ頑固を押し通す

弘前市 岡 本 花 匠

不器用に一緒に生きた足の裏
贅になれついぞ見かけぬ藁半紙
なにもかも任す悟りの大手術
くるみ剥く実の髪見ればおとこまえ
勘所掴めぬままで終る石

弘前市 今 愁 女

若田さん未知の世界に身を削る
宇宙三か月骨粗鬆になりなさんな
入社式うさぎと亀のスタート点
新入社員麻疹のように五月病
犬に服自己満足の散歩道

黒石市 相馬 一花

居酒屋のママは菩薩のように映え

百万本のバラを市民の目に贈る

お化粧で大人に化ける未成年

打つ前に一度力を抜く業師

楽しみはまた逢う日までとつておく

黒石市 佐藤 古拙

親と子が行き交う渡し舟がない

塾がよい小さくなったかごめの輪

口下手でくどけぬままに傘たたむ

ハローワーク傘貼りもない素浪人

雪の精たつぷり吸つて落のとう

平川市 小寺 花峯

後悔の微熱が夜に傾斜する

片言の愛が通じているさざえ

後期高齢オレンジマークやたら増え

三寒四温湯豆腐恋し喉仏

反抗の言葉は足で戸を閉める

青森県 松山 芳生

春間近芽吹く力を溜めている

ますますの幸せ風船ふくらます

雪だるまだれも遊んでくれません

やがて咲くつばみを風が抱いている

ほどほどの甘さ加減を風に問う

さいたま市 星野 育子

油断して春の嵐に足疎む

パリコレもユニクロも春風に舞う

よくぞ女にとケーキのバイキング

元気の源はよく遊びよく眠る

サーブ権妻が握つて離さない

日高市 根岸 方子

たんぽぽも洋種ばかりが幅きかせ

皆の衆詩人にさせる花吹雪

青臭い意見も今はなつかしい

速達が闘争心と呼び起こす

誕生日夢に日付を添えました

八王子市 播本 充子

春うらら甲斐も信濃も花の海

江戸っ子の端くれらしい臍曲り

おばさんの一つ覚えの多数決

にこにこ八十路の法螺を聴いている

主治医から何も言われてない未来

東京都 岸野 あやめ

お陽さまと仲良し梅の実がたわわ

カーテンが聴いたお客の裏おもて

趣味持てば多少防げる認知症

ですよねえ だけで世間は渡れない

宝籤あてた話はまだ聞かぬ

東京都 清原悦子

陽の匂い欲しい布団へ雨続き
消しゴムで消して学んだ誤字脱字
地球儀を回せばひとつ大きな輪
楽しいと思える日まで汗を積む
資格欄書いて虚しい不況風

横浜市 菊地政勝

差し上げる本へ押花忍ばせる
酸欠の街にオレオレ跋扈する
リストラを優しく包む家族愛
難聴へ墓のセールス声を上げ
どたばたを世界に晒す危機管理

横浜市 小野句多留

市民権選定眼の猜疑心
よけるよりティッシュ配りが先に避け
老春を話そう会を立ち上げる
胃の中を複雑にする葉夥多
西暦と平成交差脳の呆け

川崎市 三浦きぬ

仏壇は引越すたびに小さくなり
耳朶かゆい良いことなんかないものを
遺言状など無用です身の軽さ
彼岸ですお元気ですか亡夫さま
お目出度い私あの世を信じてる

静岡県 蘭田 猿杏

いつときの保管のために持つ財布
墓参り石を相手に話する
国のためメタボ検診受けに行く
マイ箸で外食に行くエコ気分
品のない泳ぎの金魚高く売れ

大山市 吉田幸子

ねずみ追う気もなく猫の大欠伸
通学のマイカー祖父に譲り受け
苦悩さえトライに変える趣味の道
ツーカーといかなくなつた老いの耳
おしゃべりな風がよぎつた胸さわぎ

愛知県 早川 遡行

ブルジョアの手にもさもし給付金
一晩でパツと散らそう給付金
給付金やつぱり酒に化けちゃつた
給付金妻には妻の使い道
税金を払わなくても給付金

富山市 島 ひかる

川柳のご縁で走るペンの先
忙しい人へは電話よりメール
本当の顔を知つてる洗面器
機上から見るあの山もこの山も
日本の過去とよく似た北の国

京都府 榎本宏子

明日の日記楽しいことを書くつもり

朝刊に不況が踊る全ページ

空家にも去年と同じ花が咲く

晴天にガラス磨きをせかされる

淡いことないはず源氏物語

京都府 三宅満子

一人も良し心ゆくまで花愛でる

通り抜け花の色気を一人占め

よくもまあ見に来るもんだ京の春

妻入院ゴミ分別も板につく

悪い記事載って覚える議員の名

京都府 坪井孝一

貫いた端役人生これで良し

建て前と本音がいつも擦れ違う

年毎に日記の行が瘦せてゆく

コーヒー挽く鄙びた店のモダンジャズ

おーいはーい素直な返事何かある

京都府 西村益子

片手間に作ったおかず取合いに

満月を見つめ一人で話する

今さらと思うがジャコを食べてます

反骨の父の遺影がいつも笑む

町内会右も左も知恵袋

岡岡市 井上森生

同期会昔の顔と顔で逢う

言ってみるYES WE CANいい響き

テポドンがやつと守りに気付かせた

ピカピカのかばんに託す佳い未来

目指すのはオーラを放つ川柳よ

長岡京市 山田葉子

ぎりぎりの合格点で駆け抜ける

ブランドのバッグを肩に武装する

ギアチェンジどこまでついて行けるやら

残された方が幕切れかみしめる

変化球恋の行方をみつめてる

大阪府 榎本日の出

チャイム鳴る笑顔作って迎えるよう

認知症一番辛いのはだあれ

親子でも水に流せぬ言葉あり

百円傘忘れたように置いて出る

若い気でいても鏡が許さない

大阪府 岡本久峰

一流はどこへ行ったか処方箋

ロボットにいずれはするがオシメ替え

オシメ替え思っただけでぞっとする

希わくはコロリと参りたい卒寿

マスコミがやたらに不況かき立てる

大阪市 熊代菜月

風ばかり読んで自分を見失う
泣き虫の涙を風が吹きとばす
もと他人今は夫婦で同居人
風むきを読んで皆の輪に入る
友送る送葬曲は艶歌です

大阪市 小泉ひさ乃

好きな事すればせつせとエネルギー
長引いた風邪が治つて花粉症
寒さ耐え春を伝えるヒヤシンス
くすくすと洩れる会話が気にかかり
生まれ変われば良妻になるつもり

大阪市 奥村五月

楽さすと言つて苦勞の五十年
隣からカニの土産にどうしよう
週三日休みの父に興味が無い
廃校に寂しく咲いて散る桜
お相撲に無いが丸投社は得意

大阪市 森田明子

くもの糸ほどの徳なら積んでいる
安上がりの妻というのは褒め言葉
古里の家がだんだん遠くなる
私をだます優しい眉を描く
不況より人材のない不幸せ

大阪市 伏見雅明

笑い声飛び交う祖父の三回忌
渋滞に彼女とふたり別世界
花びらに彼の気持ちを聞いてみる
手土産を持たず出かける黄泉の国
父さんに内緒と母が足してくれ

大阪市 小糸昭子

口も手も母が勝つのがあたりまえ
引きこもり外へ出るのは医者通い
老人が多くて介護支援待ち
春風が誘いに来ても家の中
携帯を持たぬ夫で揉め知らず

大阪市 川原章久

金も苦も忘れ花見の酒に酔う
大吉が出てから後の下り坂
諦めて返納米寿免許証
美しい絵です飯食う老夫婦
妻認知同じ話に耐えている

大阪市 鶴田遠野

子が継がぬ店ののれんを今日も出す
魂を実印に入れ生きている
相性が良いと限らぬ赤い糸
降る火の粉浴びて相合傘の中
あこがれへ恋の偏差値違いすぎ

大阪市 松尾 柳右子

堤防のウォーク水鳥今日も居る
物干しで青空を見る深呼吸
堤防のウォーク小鳥も嬉しそう
友の句も元氣安堵の昼下り
オルゴール昔を今に巻き戻す

大阪市 岩崎 公誠

三次会勘定書きをつき回す
生意気な新米が来て座が白け
淋しさに嘘を重ねて胃が軋む
旅プランあれこれ立ててみなやめる
嘘塗って男と女生きている

大阪市 江島谷 勝弘

飾らないあんたが好きと女房言う
大学は出ていませんが字は読める
定年を迎えた妻に頭下げ
これからの梅雨と暑さを想いやる
ATM丸ごと吊し盗みよる

大阪市 近藤 正

私でも裁判員でいいですか
府知事さんでつかいビルにけつまずき
北さままテレビに映る自衛隊
消費税上げる魂胆透けて見え
ミッチーブーム早や五十年経ちますか

大阪市 福岡 末吉

日々の糧亡母の家計簿つつましく
新職場上司は娘の同級生
宿題は自分でやれと解けぬ父
リズムカル陽気な妻の迷い箸
いみじくも己を信じ道拓く

大阪市 西川 更紗

春の風囀話を撒き散らし
知らん間に貧乏ゆすり子に移り
くさめするたんびに脈が踊ります
大皿に盛る路の臺晴れ舞台
散歩道春の光に満ちあふれ

大阪市 榎本 舞夢

街中が華やいで来る春の風
雪どけを待つて一氣に春うらら
念ずれば偶然会えた好きな人
あびるほどお酒をのんで暴れたい
一合の酒でたのしくなる夫婦

大阪市 津村 志華子

リハビリを待っている間に肩が凝り
五分ほどの診察を待つ小半日
ブライドはまだ一寸だけ持っている
三猿の教えなかなか守れない
やんわりと諭してくれる友がいる

大阪市 川端 一步

いい人が辞めた余震がまだ続く
人間を秤に掛ける悪い癖
千号の歴史が積んだ高い峰
極楽はこの世と思う花の下
疑いを知らない人についた嘘

大阪市 中村 叡子

日本人こんなに野球好きな国
甚六でただマイベース愚図でない
千円が無沙汰の母に詫びの旅
矢張り変冬のオーバー着る四月
無意識にいない亡夫に話してる

大阪市 澤田 定子

制服で他人行儀なご挨拶
腹立ちも日にち薬でうすれゆく
アスファルトの隅でタンポポ春告げる
入学式学徒以上の親の数
松園展覧あし見とれ日本髪

大阪市 田浦 實

おしんの心忘れた頃に不況来る
やさしい夕日西方浄土感じます
天国があると思えば安堵する
円卓は自然と上下消して行く
春の宵心和ますノクターン

大阪市 神夏磯 典子

雨の日のビラはのんきに濡れている
だんだんと大切になるお父さん
いろいろな笑顔鏡と相談す
写経してたつぷり心遊ばせる
誕生日周りの方が嬉しそう

大阪市 坂 裕之

切り取った景色の中に一人居る
咲き誇る花に散る日は見えてない
振り向かず歩いて坂を上りきる
母さんの大きな丸に護られる
いい話持つて行ったら構えられ

大阪市 升成 好

蝶蝶が原っぱに春縫いつける
深緑を抜けるとウツが消えていた
ビルが建つ何の跡地かもう忘れ
正直に吠えて番犬叱られる
甘えるな勝利の女神などいない

大阪市 原田 すみ子

開花予報さくくも気合入れている
何時だって今が花だと思ひ込み
桜ばな大和ごころに響くなり
わたしたち葉と頁そんな仲
犬は昼寝 夫婦それぞれ頁繰る

大阪市 川久保 睦子

大阪市 伊藤 博仁

菜の花へ目立ちたがりやの蝶二匹
知らんぷりいい人それとも変な人

日溜りのほど良い話ご用心

生きているうちは自分の色でいる

気がついてくれる人いて感謝です

大阪市 大川 桃花

トレナーの気合でジャンプするイルカ

金で得た権力金と共に去り

愛情はたつぷり込めた手抜き鍋

疲れると端折って進むバスガイド

腹決めて待つと案外吉が出る

大阪市 古今堂 蕉子

水彩画と油絵だった私達

空腹のへ口へ口病にすぐかかる

おばあちゃんこれも知らんの言われてる

砂山の上に自民と民主党

ありがとう笑顔添えたら満点だ

大阪市 津 守 なぎさ

空席を探す弱気を見透かされ

さりげない優しさにじむ友と旅

食欲はなかったはずのバイキング

広い海漫画もどきの海賊船

司馬遼にはまり用事がはかどらぬ

目刺しで耐ほる酔い家で寝れる幸

コート着た犬を見送る雨宿り

花冷えに毛布にこたつ縁切れず

元氣かい妻の位牌に声掛ける

気動車の音心地よい下り坂

和泉市 西岡 洛醉

朝の雨僕が出番の足を止め

嘘ひとつ残した今日の淋しさよ

一日をピエロに成った日の焦り

不況風こんな我が家に吹き込んで

一輪の花を愛でてるやさしさよ

茨木市 藤井 正雄

うとうとの生徒へチヨークストライク

ほめ言葉乗った話に落とし穴

喜んで留守番を買う昼の酒

切れ者だなんて家では何もせず

男同士婿が熱燗持つてくる

交野市 山川 日出子

お花見が増えてきました車イス

いつまでも奮ゆめ見る姥桜

ふきのとう探し求めて泉佐野

舞の海相撲解説横綱だ

青い目が横文字で書く般若経

交野市 森 本 弘 風

ウソなんかついたこと無い四月馬鹿

薬にも毒にもならぬ四月馬鹿

晴耕雨読耕す地ない四月馬鹿

フランスでコンコルド飛ぶ四月馬鹿

夏が来たプール開きも四月馬鹿

河内長野市 植 村 喜 代

野球など知らぬ私も熱が入り

イチローさん安心させてくれました

八十という日がやって来た誕生日

槍を指して歩いた頃は花だった

上がった下がった上がる浮き世

河内長野市 山 岡 富 美 子

逆転の発想茶髪から貰う

ヘルメット転がつている派遣切れ

びかぴかにされて気恥ずかしい林檎

弱り目に薔薇の赤さが突き刺さる

シーソーゲームいつまで続く砂時計

河内長野市 村 上 直 樹

自分史の指それぞれにある懺悔

ジャンギヤバン気取り斜めに黒ソフト

溜り場で錆びたところのリフレッシュ

顔のない計報が届く隣組

祈りつつこの一票で国の明日

河内長野市 黒 岩 靖 博

値下げでも財布を閉める大不況

若作りするから目立つ薄い髪

ステッキはまだ持たなくて大丈夫

冬だけはハワイ暮しにあこがれる

ストレスを陽気な妻に癒される

河内長野市 坂 上 淳 司

一万ボルトの瞳に出会う春四月

アラ還の新人歌手が光浴び

茶髪から黒髪になる新学期

不似合いなハローワークに居る茶髪

茶髪など産んでませんと墓の石

河内長野市 井 上 喜 醉

芽を吹くと恐いものなし猫柳

晩酌を薬にしているタフな父

甘党の仲間で楽しい午後のお茶

みかん咲く潮風も良し初夏の丘

優勝へ奇跡の扉開け虎

河内長野市 水 谷 正 子

花見服いろいろ迷いまだ女

帯解いてズボンを穿いて仮面脱ぐ

夜桜の好きな父母懐かしむ

使い捨てマスクを私二度三度

サムライが男を上げて巣に戻り

岸和田市 土橋房枝

長雨のあとの太陽つかいきる
堪える心希薄になった現代っ子
金くい虫我が家にも居て成長期
ささやかな夢が叶った花芽吹く
打ち水で客待つ路地の縄のれん

岸和田市 井伊東吉

満開の桜が暗さ吹き飛ばす
春野菜しつかり食べてリフレッシュ
バス時刻変わり戸惑う春四月
不況時に新しい知恵生まれでる
隙間つき中小企業生き延びる

岸和田市 森本ふみよ

上層の階に暮らして土恋し
新しい戸口ピンポン絶え間なし
通帳が悲鳴上げてる浪費癖
桜餅二つと決めて胃が軽い
給付金いつになったら御対面

岸和田市 岩佐ダン吉

ばらばらの話をつなぐ母の耳
汗の章今日も自分史書きつなぐ
トラブルの数だけ君と深くなる
歩行器の母が今でも笛を吹く
高い空妻が何とかなると言う

岸和田市 林力子

一族へ厨の母は愛刻む
意志固め嫁ぐ娘へお立ち酒
不況風志とはうらはらに
全快の祝に届くグルメ便
閃めきの一句に今日の幸貰う

岸和田市 原さよ子

階段の手すりに頼る夫の足
試歩の杖外出先は理髪店
養生で行く温泉を羨まれ
意気込んで洗濯すれば午後の雨
特売場体面などはつい忘れ

岸和田市 堤 梢代

じいさんに言われたくないばあさんと
息んでる誓の声が聞えそう
せつかくの美貌も見えぬデカマスク
波風を立てずに暮す老い二人
浴槽の鏡くもつて丁度よい

岸和田市 雪本珠子

幸せがひよんな所から現れる
老婆と言葉でキャッチボールする
虎の子も不況の風に持ち去られ
別れたが風が伝言持つて来る
明け透けに物言うけれど憎めない

岸和田市 米 富 淳 風

春の庭われもわれもと新芽吹き

姉妹会未来の私見る思い

アナログ派書きますわよと友が文

冷蔵庫切り抜きレシビ掲示板

居直ってやがて突き刺す自己嫌悪

堺市 荻 野 像 山

疑うこと知らない馬は走るのみ

頑なに酒も薬もちゃんと飲み

金あるが使う能なく持て余し

孫思う母のしゃばり断れず

もうわたしに出版くれない披露宴

堺市 西 村 り つ え

真っかつか燃えているのに無視をされ

浪費癖底が見えても浪費癖

居心地へなかなか飛ばぬ脛かじり

八起きめは君にもらった力水

ひっそりと種火抱きつつ乳房老ゆ

堺市 大久保 のん子

ポーズ取るだけで仕事になる美人

心根の匂いやさしい母だった

私の指先にいた青い鳥

さりげない言葉に毒が盛ってある

底意あるつくり笑いは絵にならぬ

堺市 柿 花 和 夫

ミサイルを威光で飛ばす独裁者

板前の意地を支えている足駄

美女ひとり垂れ目の犬と暮らして

マイナスからの出発だから迷わない

駅裏に雑魚を取り込む定置網

堺市 齋 藤 さくら

一日だけ贅沢出来る給付金

さくら誉めました手入れも聞きました

店員の笑顔に御飯美味くなり

焦っても足の速さは変わらない

ストレスに皿割る店が出来ている

堺市 源 田 八千代

同窓会出世頭が彼奴とは

合服の出番ないまま来た夏日

姉さん振る幼稚園の年長組

北のテレビに昔の日本見えてくる

捲し立てるテレビ画面に耳塞ぐ

堺市 矢 倉 五 月

無駄な色除くと見えて来るテーマ

天と地に手引きをされて生かされて

強面のリーダーも泣く花粉症

追いつくも越しも越さずびつたりと来るうしろ

シャトルには積んでもらえぬ砂時計

堺市 近藤 豊子

花のした毛布もこもこ乳母車
花よりも寝顔みてます乳母車
早起きのこどものころの齒磨き粉
水道の音へこぼしたハミガキ粉
ハツカかな あの手ハミガキの残り香は

四條畷市 吉岡 修

喜んで踊れる笛を吹いてくれ
ありがたや毒には毒とまた飲める
嬉しい日なのに太陽はや沈む
薬を食べおいしい乳をくれる牛
長びけばテロふと恐いこの不況

吹田市 瀬戸 まさよ

両陛下誠実という宝あり
仏壇の花買い換えて願ひ事
お隣の街は無料のパスがある
案内板ハングル英語日本語
お若いと言われ一層若づくり

吹田市 須磨 活恵

雑草がわわつとはしゃぐ雨上り
逸早く季節を告げる春の雑草
雑草の花にも雄蕊雌蕊あり
雑草のもろさ根つ子のしたたかさ
雑草で一生終えるそれもよし

吹田市 大谷 篤子

水割の音と浮世の外にいる
おそ霜も春風に触れ笑い出す
故郷の稲穂が匂う絵本買う
祖父と孫精魂かけたプラモデル
入学の孫の姿がまぶしすぎ

吹田市 太田 昭

折檻は爛の冷めないうちに
大腸を縮めて元氣取り戻す
焼き芋を懷にして道いそぐ
明日生きるための目覚まし掛けておく
米を研ぐ妻のリズムは衰えぬ

吹田市 野下 之男

人様のいやがる事をしたい国
ベランダで花見が出来る我が天下
花びらが静かに廊下駆けている
月毎に紙面で会える知らぬ人
神様も持て余してる棚の簞

吹田市 木下 敏子

万華鏡みたいな夢を見ていよう
ありがとうあなたの影に礼を言う
子の入社晴れてるだけで嬉しい日
誘われて今日もうきうき踏むベダル
チューリップ真直ぐ咲いて入社式

吹田市 穴 吹 尚 士

花嫁が顔上げられぬ美辞麗句
お休みの人の噂に花が咲く
さりげない言葉の陰に散る火花
花道の雑巾掛けで職終える
花捧げ母のドラマに幕を引く

高槻市 安 田 忠 子

無責任に口出しをする他人さま
少年の他人行儀なご挨拶
華やかに日本一の通り抜け
イチローが最後に打ってほつとする
大物はやはり見せ場を作り出す

高槻市 左右田 泰 雄

高速の値下げで近くなる田舎
盃をコップに替えて上機嫌
点と線結べば明日が見えて来る
したたかな手練手管にまるめられ
犬の背をなでると返事する尻っぱ

高槻市 佐 甲 昭 二

ひらめきが浮いてきそうで長湯する
あいまいな返事が誤解膨らまず
几帳面な人に会う日の服を選ぶ
道草をして退屈を食べている
恩返したつぷりたまり墓参り

高槻市 生 田 義 一

春風に声もさわやか万歩計
モンゴルに明け渡すのか国技館
ヨーイだけドンが鳴らない総選挙
侍の快拳國中酔いしびれ
クラス会仇名飛び交う懐かしさ

高槻市 杉 本 義 昭

草に寝て桜と雲と会話する
廃校の庭に桜が咲き誇る
窓際になつてから知る世の広さ
無農薬野菜を貰う散歩道
ふるさとの潮の匂いのする手紙

高槻市 執 行 稻 子

梯子酒誘つておいて先に酔い
久々の友耳鳴りの事ばかり
首つたけのマドンナあわれ恍惚に
ケセラセラと慰める医師憎めない
自惚れと解っているが直せない

高槻市 峯 村 勲 弘

ハーモニカ吹けば青春甦る
過疎の村のびのび生きる牛や馬
年金でそっと補う子のローン
触れられてちよつぴり疼く過去がある
花粉にも役割がある種の保存

高槻市 指宿 千枝子

七十の元氣喜劇がお好きです
カーテンを吊り替え春の風になる
黄なりユック目印にして旅に出る
この旅は出石のそばとコウノトリ
なんだ坂こんな坂知恵振り絞る

高槻市 富田 美義

迷うのは止そう逝く先おなじとこ
家にかてお酒は有ると妻の酌
古希に入る浮いた話も無いままに
手術台持ち帰るもの命だけ
正念場重ね余生の駅に着く

高槻市 井上 照子

ゆとりから焦りに変わる時間表
十七回忌 夫雲の峰みてますか
兄米寿ビールを干して虚勢張る
お花見に浮かれた昔ふと思う
友見舞う自分も明日は医者に行く

豊中市 安藤 寿美子

生きてます今年の花も見られます
午前二時FM聞いている独り
何してもさすがと言わす人がいる
街歩く外反拇指でO脚に
切磋琢磨しすぎすり切れちゃった人

豊中市 江見 見清

サクラサク揭示ズームにしてメール
花びらが疎水の面で花となり
早春賦をひとりハミングアングランテ
頑固さにボケを磨いて立ち向かう
ヒット曲は子の成長の年譜です

豊中市 水野 黒兎

さくら咲き日本列島浮き上がる
花冷えの街ぶたまんの湯気匂う
退院の友の笑顔にさくら咲く
さくらさくら尚またさくら吉野山
歳月の速い足どりさくら散る

富田林市 大橋 鐘造

不景気で賽銭箱が欠伸する
ど忘れを武器にまあるく生きている
人間の方が上手な猿芝居
二の足を踏んで狙った的外す
外面を信じて足を掬われる

富田林市 中井 アキ

逢うて来た眉はまあるくなっている
試験より運の強さを祈る春
日記にも書けない痼いつ消える
幾たびも地図覗き込む旅かばん
嬉しい事に手も口もまだ動いている

富田林市 片岡 智恵子

寝屋川市 太田 とし子

千円の高速度路大移動

不況風花見の財布花曇り

割って足してやっぱり回る風ぐるま

この前は飛べた歩幅を踏みはずす

猫とカラスごみ置き場では仲がよい

富田林市 井上 じろう

深いしわ三男四女育て上げ

深酒の時代は遠く友も逝く

花筏春の名残の月二つ

ピカソの絵下手やんかーと小学生

五月晴れ行くあてもなし写経する

寝屋川市 森 茜

孫のくれし湯呑茶碗よあったかに

朗読会堂々アラカン アラセブン

人前に立つ陶酔と戦慄と

力あり余って簪をとり外す

さよならをしてから思ひだした癖

寝屋川市 籠 島 恵 子

日本の春に乾杯してしまふ

思いつき桜ふぶきにむかえられ

春の宴月が夕日を見おくつて

また夢を追うか去年の春帽子

旅みやげ三温糖の舌ざわり

限りある余生たのしむ桜の下
妖艶な藤になぞらえ紅を引く
花菖蒲あじさい咲いた雨の寺
喉しめて鵜飼の手柄ほめてやり
宇宙船月の世界で月ダンゴ

寝屋川市 平松 かすみ

誕生日花も見頃で恙無し

穴のあるハテナ竹輪か蓮根か

日々に夫のハテナが多くなり

楽しいな花いっぱいクレヨン画

珍しい日本タンポポ見つけた

寝屋川市 森 田 麗

綻んだ蕾に止まる万歩計

爛漫の花になびいて春帽子

顔ぶれが揃いましたね花日和

太陽にウインクしている春の花

気散じなお人に見えた初対面

羽曳野市 酒井 一 壺

今日もまた夢あるニュース待ちぼうけ

殺伐なニュースに馴れてくる怖さ

ゴールインして地獄だと気付く

浮き沈み重ねて着いた岸に住み

海岸で無力な自分思い知る

羽曳野市 徳山みつこ

若田さん地球の癌が見えますか
某月某日天からロケットのかから
もう見たくないワ太郎も一郎も
ひたひたと歳月刻むドレッサー
低反撥わたし怒っておりますの

羽曳野市 吉村久仁雄

妻の謎解かず神秘の箱に入れ
閻魔から住めば都と論される
鈍行で帰ると過去が待ち構え
新緑でみそぐと罪の色が褪せ
飴一つなめるとあとは鞭ばかり

羽曳野市 永田章司

景氣対策揺り籠の子も背負わされ
内緒だと耳打ちされたあちこちで
伝承の民話に生きる人の情
負け犬の遠吠え誰も聞いてない
北鮮に日本帝国ダブってる

羽曳野市 吉川寿美

何ごととも無かった病棟午前二時
何はともあれコンニチさまに掌を合わす
大事な話病夫にリンゴ剥きながら
思い出に躓き整理捗らぬ
此の世には神も仏も居てはった

羽曳野市 安芸田泰子

歳時記に背いた花が咲くハウス
狼藉の落花を詫びる両隣
家背負うことに疲れた蝸牛
子離れの膝がベットを甘やかす
初孫の百面相へ家族の輪

東大阪市 北村賢子

あたりまえの明日を夢見ているベツド
爛漫と誇るさくらも散ればゴミ
まごころを弄んだらいかんぜよ
温めてもこころ感じぬお弁当
衿正し咳ばらいしてノックする

東大阪市 米田水昇

不況でも明日に希望をつなぎたい
車椅子姉妹で押して春の園
亡夫との伊豆の思い出椿咲く
美少年イケメンとなり風靡する
テロねらう高層ビルは建てないで

東大阪市 佐々木満作

告白をためらう内に人の嫁
ああ悲し蕾のままで散る命
気品ある花は清楚に咲き誇る
清水の夜桜月も頬染める
綻びが大きくなって手遅れに

東大阪市 久米 奈良子

朝夕に馴れぬ入れ歯をもて余し

配達に杖つく姿いたわられ

ヘルパーのマスク気づかう春の冷え

エプロンをつけて回復ほめられる

満月をラジオで聞いて手を合わせ

枚方市 安達 忠央

やあと来た上客なのに名が出ない

司会者が笑わせ上手座が楽し

浜名湖のうなぎとたれを買いにより

心地よい講義へ舟を漕ぎはじめ

突き放し遠くから僕見てる父

枚方市 丹後屋 肇

軽装のハイカー襲う戻り寒

病妻に買うゆるキャラのぬいぐるみ

ゴーグルのライダー落花蹴散らかす

葛藤の揚句自然に身を任かす

一陣の風に疎水の花筏

枚方市 小林 わこ

天国の景色はきつと万華鏡

憧れの街へいくつの途中下車

花の香で春の景色をかき集め

子をあやすピエロになっている夫婦

あつさりと大事な帽子脱ぎ捨てる

枚方市 二宮 山久

病床の一番風呂のここちよさ

入院も慣れて川柳ひねってる

買い物がじょうずになったこの不況

ボランティア始めて歌もうまくなり

四月一日妻を嫌いと言つてみる

枚方市 伊達 郁夫

花吹雪地蔵も踊り出す気配

録音のテープで叫ぶ焼き芋屋

ストレスがないな目玉が良く動く

株券が枯れ葉のように見えて冬

信じてた酒に最後は殺される

枚方市 森本 節子

仏像盗難国宝焼失痛わしや

桜見に淀川堤へ七千歩

花の下六十八体地藏さま

うち上げに何着て行こう気もそぞろ

荷をほどく朝掘りの筍の白さ

藤井寺市 若松 雅枝

不況でも桜も咲くし鳥も鳴く

ウォーキング足にやさしい靴を買う

一呼吸おいてあつさりと告白

元の位置へ戻って探す忘れ物

良い腕だわたし美人に写ってる

藤井寺市 高田 美代子

相傘にわたしの名前書いてある

ほんとはネまんざらでなしキミのこと

夕陽ってこんなに綺麗だったんだ

日がな雨あしたの事をふと思い

体温をたしかめながら生きている

藤井寺市 太田 扶美代

春野全開心の隅の大掃除

あの頃の無茶が祟った両の膝

花片が浮くのを待っているコップ

大はしゃぎしたけど何も変わらない

いい景色父から母へお酌する

箕面市 広島 巴子

アイスティー喉カラカラで待っている

観光地人花ゴミが競い合い

行楽ヘラッシュ洪滞覚悟する

鷺も父は大らかホーホケキヨ

鷺も母は忙しくホケキヨケキヨ

守口市 井上 桂作

やがて無に消える命も定めなら

諸行無常知らずに悩むこともあり

生かされた命なりせばなおさらに

郵政は理念まげずに最後まで

制度改革抵抗排し進むのみ

八尾市 宮崎 シマ子

わからない明日へたらふく食べておく

難しいことは知らない甘い母

老いぬれば聞き流すのもお手のもの

街路樹は桜が消えて花水木

喧嘩してすつきりとした蟬り

八尾市 笹倉 ひろし

エコ発電ソーラーパネルが屋根覆う

同じ品ブランド変えて道の駅

愛らしい笑くぼの夢はクラブママ

老いの身に残るローンとホーム行き

姉ちゃんのお古ぶかぶか年少者

八尾市 吉村 一風

思いやりだけは忘れず介護する

細く強く生きよ年金言うている

太陽に笑顔もらってペダル踏む

控えめに居れば床しい人にされ

ゆっくりと回り道して世間見る

八尾市 生嶋 ますみ

掘りたての竹の子ジャンケンで貰う

可愛がられるばあちゃんに憧れる

ひよろひよろと玉ねぎ芽吹く野菜かご

生きている限り明るく暮らしたい

友の愚痴聞いて幸せだと思ふ

八尾市 村上 ミツ子

大阪府 初山 隆盛

判定結果来るうつとものわすれ
運動機能衰えも指摘され

不況にも負けず今年もさくら咲く
さわやかに音符がおどる雪やなぎ

イチローもやはり人間だったんだ

八尾市 高杉 千歩

独り居も十年神様仏様

吸物に菜の花ひとりの春浮かす

靴下を繕う久しぶりの針

給付金詐欺を漫画で回覧板

百歳の叔母母に似て抱きしめる

大阪府 桑田 ゆきの

気分よくジレンマ飛ばす花の風

退院のうれしい心鐘が鳴る

イチローの一打うれしい世界一

待ち合せ言い訳許す花時計

全身で桜にオーラ貰ってる

大阪府 野田 栄呼

八十路後の生き方家族へは内緒

嬉しさに浮き立つ涙ピンク色

一男二女が強い良い時代

賞味期限まだ残ってる喜寿過ぎて

ダイエツト好物が出て日のべする

花野ビル川柳塔に花盛ん

花吹雪ひらひら浮世くぐり抜け

旅すれば顔もしぐさも旅の人

貯める気がついつい世間狭く生き

幸せのあくび二人でラリーする

大阪府 澤田 和重

肩書きが多い本業なに屋さん

おしゃべりがはずみ頂く昼ごはん

携帯は持たない主義で自由です

お話が途切れないよに穂先足す

変りないか其の一言に血が通う

神戸市 山口 光久

ゴールするまでの努力は語らない

レンタルの晴れ着ですます披露宴

クタクタでも約束だけは違えない

一日中マンガを読んで探すネタ

子の手前どんと来いよと張る虚勢

神戸市 両川 無限

ふきのとう食べて大人の仲間入り

離婚してきれいに棘が抜けました

神様の試練茨の道をゆく

新しい恋で未練を押し流す

反骨のペンがきらめき取り戻す

神戸市 山口 美穂

初夏の風背筋伸ばせと押ししてくる
一病とほどよく暮らす古希の坂
休みましょ老犬木陰知っている
裏のうらその裏がある国と国
ほとけ様わたしの好きなあんこ餅

神戸市 伊勢田 毅

古里の方言を聞く通り抜け
春うらら妻のルージュが濃くなる
今日からはみんなライバル入社式
握手した数ほど票は伸びてない
花の宴囀の二人そっと消え

神戸市 山田 婦美子

ユズリ葉のような世代の入れ替わり
来た孫に元気をもらうてんこもり
ほどほどに仮面を取ってしまいたい
決断をしないと古着捨てられぬ
思い出を詰めた筆笥がしまらない

神戸市 田中 章子

失敗が旅の思い出かくし味
給付金わたしウクレレ買うつもり
食べて寝てぐうたらの日よ鼻づまり
旅かばん開花予測に踊らされ
遠慮なくティッシュユイただく鼻づまり

芦屋市 黒田 能子

時々大きな声でアイウエオ
こわごわの背中押されて渡る橋
しゃべるだけしゃべって後は無言劇
なおざりの結果どなたも責められぬ
健康の支えよく食べよく眠る

尼崎市 春城 年代

寝息慕わし今はひとりのセミダブル
今の私に川柳ほどの深情け
背骨骨折踏みとまれるか平常心
脳外科へ娘に付き添われゆくことに
ベッドの傍に積んでいる小宇宙

尼崎市 長浜 美籠

ナツメロがしつとりと合う花の雨
原風景の隅に残しておく余白
性格が解り親近感が湧く
なるようになればなったでそれもよし
やんわりとこころ開かず津軽づけ

尼崎市 山田 耕治

鐘ふたつ迷ったような鳴らしよう
ご主人が若しものときと勧められ
二度の職終えてゴールへ倒れこみ
連絡を怠り全部冷蔵庫
甘い球見送り恋が逃げていく

尼崎市 軸丸勝巳

膨んで寒の戻りに惑う花
三分咲き混まぬうちにと車椅子
どんちやかも見えず不況の花の下
花吹雪舞う贅沢な散歩道
土日だけ景気回復高速路

尼崎市 加川靖鬼

海の底だと気付かない深海魚
ヤドカリは気軽に家を住み替える
夜が明けて蟻の時計も動き出す
水族館鯛がじつくり顔覗く
カマキリは生まれてまずは鎌を研ぐ

尼崎市 林昭三

冬の雨細くて寒く降り続く
ガムを噛む真似まで野球しなくても
タラの芽を一日置いた気休めに
新入社骨ありそうと社長の日
正直に自分の苦手認めてる

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭三たび咲かせてほめられる
となりからコブシものぞく春の顔
嬉しさと安心のせて娘の笑顔
童心へふるさと列車いとこ会
ミサイル発射 戦したがる北の国

川西市 西内朋月

居眠りをして悪口だけ聞え
水を飲み気合をかける二日酔い
気合いれ一歩踏みだす朝の靴
預貯金と寿命をくらべ飲んで
再会を約束してる縄のれん

川西市 米原雪子

春爛漫長寿出揃う花の宴
生き甲斐はおしゃれ個性を漂わせ
ほどほどの進歩ガンバレとは言わぬ
逆点勝ちしびれるような歓声よ
手招きでそつと耳打ちする機転

三田市 北野哲男

古稀越えて箒の魔女も蛇行する
古稀すぎて貴方から来た春嵐
不発弾抱えて上下のど仏
ドアの音今日の不機嫌並じやない
知らぬ振り傘傾けてすれ違う

三田市 堀正和

坪庭が持て余してる種袋
針千本飲んで大物らしくなる
懸命な児の嘘だから許しとこ
生きている証しに時々は怒る
便座では小便出ない男です

三田市 久保田 千代

窓少し開けて明日の風入れる
株分けて隣も同じ花が咲く
言い訳が蛇の長さで横たわる
こだわりを三日も残す深い悔い
恋かしら自分一瞬見失う

三田市 石原 歳子

目と鼻に春が花粉を連れてくる
不用品いのち吹き込み再利用
見下ろして桜を愛でる十五階
見る人の顔みなやさし野花展
補聴器を拒否してまでも若くみせ

三田市 臼井 二英

不景気が悲劇生んでるそこかしこ
墓石のようにも見えるビルの群
受験グズ揃えすぎると子は逃げる
落ち込んだ平安神宮参ろうか
談合で得した方は黙ってる

三田市 上垣 キヨミ

舞い落ちる桜吹雪の髪かざり
窓開けて仏にも春観てもらう
控え目な化粧で見舞い案じられ
死んでまで極楽行きを望む欲
いつまでの命据え膳食べている

西宮市 牧 潤 富喜子

うつろいの中で春には遠い冷え
踏み出せば青い空あり風清し
やっぱりさくら四月に咲いたほつとする
生かされて来たをつくづくさくら咲く
金婚を祝う皇居も桜満ち

西宮市 亀岡 哲子

おおさむつとおちよぼ口してさくら花
両隣工事終ってさくら咲く
転んだら起きる努力のいる達磨
聞いたげるただそれだけを喜ばれ
そろそろネじゃあネ別れはじゃあまたネ

西宮市 秋元 てる

当り前が感謝に変わる支援「1」
支援「1」戦死の夫に恥かしい
月の砂漠共に歌った国境
みか月にスカーフかけて空飾ろう
身銭切る覚悟ないのに口滑り

西宮市 緒方 美津子

余興の出具合に気を配る幹事
笛吹けば踊ると思ってる社長
寝返りを上手に打って出世する
うたたねをつついてくれた給付金
旅マップ蕎麦と地酒があればいい

西宮市 井上松煙

人目など構うておれぬ杖をつく
寒がりです暑がりですがよく食べる
幸運に生きのびてきて孤独なり
癌の友基に集中し憂さはらす
クラス会遺影となったハイチーズ

西宮市 片山忠

孫にキスされた余韻が残るほほ
バトカーを見ると反発したくなる
足踏みをしてからダッシュする黄色
老人に恋を教えた知能犯
友達を失くしつまらぬ顔になる

西宮市 藤本直

セーターが少し大きくなりました
明日もまた今日のままでと祈りつつ
水撒いて花の御礼を聞いている
五月晴れ遠慮勝ちなる雲ひとつ
花粉症檜の次はさあなんだ

西脇市 七反田順子

蓬摘み節句の餅に愛をこめ
福の神カーネル爺や日の目みる
大阪に活気のエキスを買いに行く
修復に急かされている姫路城
花よりも城が目あてのお客様

姫路市 古川奮水

炊立てに生玉子割り留守居番
鰯酒を吞んで足下掬われる
賞味期限知って牛乳菓子にした
豚足を齧り暫く歯の治療
親の脛当てに來た顔見えている

奈良市 天正千梢

居るはずだ明治の氣骨持った人
現われてほしい明治の氣骨人
自己利益に走る隠れみのさがし
このバスに折詰と酒積んである
しあわせな心を写す鏡なし

奈良市 米田恭昌

熱すぎる恋の火種にねつかれず
アフターファイブ何故か頭が冴えてくる
ばあちゃんの知恵を引き継ぐ三世代
夫婦喧嘩見る孫の目が動かない
ブランドを集めローンに溺れてる

生駒市 飛永ふりこ

超古い母の手編みが持つ温み
ピカピカの夢が満杯ランドセル
まぼろしのコロと小走り桜咲く
機内でのお酒がすぎてふらっふら
ちよい悪で恋人未満スリリング

檀原市 安土理恵

夜遊びの好きな桜に誘われる
満月に桜狂つてしまひそう
譲られた座席断らないように
さてもさても男の舌の軽いこと
みそを溶く昨日のことはさておいて

香芝市 大内朝子

わたしから川柳取ると空になる
ピカピカの自転車と化す給付金
身の程を知れば納得ばかりなり
母さんのようなかあさんやつてます
ひよつとして運命線にまだ期待

大和郡山市 坊農柳弘

風薫る花橋に師を偲ぶ
水草に約束がある田植え唄
喜びを分け合う門出のロゼワイン
シュッと切る傘のしずくにあるドラマ
慌てるのは止そう紫陽花まだ蕾

奈良県 渡辺富子

春なのに入院告げる寒い声
カラフルなパジャマちよっぴりはしやいでる
あいまいなままのふたりへ花吹雪
花吹雪人間賛歌今佳境
たつぷりと愛を語って散るさくら

和歌山市 福本英子

はらはらと散る花を見る阿弥陀さま
交差点昔の匂い嗅ぎつける
青春の歌なら唄えます軍歌
立ち話往きも帰りも同じ場所
覆面を取れば普通の顔でした

和歌山市 古久保和子

春の陽に唯我独尊避雷針
タケノコの形に包む新聞紙
はよ来いと切手斜めに春の文
解禁まで大きくなれと稚魚放つ
漢字変換へコンピュータの語学力

和歌山市 松原寿子

渴きゆく胸しめらせる月雫
鏡台に亡母呼び覚ます黄楊の櫛
こころない言葉が不意に吹き荒れる
擦れ違ふただそれだけの朝の駅
寝返りをうったら泣こう思い切り

和歌山市 田中みね

どこまでも運のいい娘と悪い娘と
甘言へすんなり嵌る欲の皮
自慢せぬ孫の代わりに触れ回る
食べることが生き甲斐イヌも私も
悩み事すこし有るのも生きる糧

和歌山市 武本 碧

いじめてる方も心が病んでいる
薬にもならぬ小言を言い続け
ご近所へ細く長くのお付き合
い負けそうな気配斜めに身構える
言い訳の口が少うし騒がしい

和歌山市 喜田 准一

捻子巻きに来ないで後期高齢者
歪んでる枝と根っこが強い松
ひと騒ぎあつて妥協の道が開き
無言劇いつまで男対女
何でこうなるのか分らない喧嘩

和歌山市 玉置 当代

腰や膝痛いが花見欠かせない
手弁当提げてやっぱり花の下
咲いて萎んで寒の戻りへ花は泣く
圧迫骨折なんてわたしの業かしら
帰国する娘夫婦を待つ不況

和歌山市 堀畑 靖子

名店の弁当持参して花見
花ふぶき贅沢なほど浴びている
花に恋してふんわりとした余生
老いて子にまだ従えぬ力こぶ
経あげて広い心になるつもり

和歌山市 上地 登美代

よく出来た野菜配るもひと仕事
いつだって火の粉被って生きている
めまいして斜めに歩くシルエット
万一もあるから今日も笑つとく
ズームイン犬の葬儀に泣き崩れ

和歌山市 松尾 和香

親に感謝健康という宝物
春風に心飛びかう熨斗袋
ひらひらと舞い散る花にありがとう
ふるさとの街角誘う恋明かり
頬ぬらす涙に被る亡夫の愛

海南市 堂上 泰女

花の洗礼受けて優しい孫育つ
補助席でひやひやしてる夫の酒
創造主を称えなくなる山桜
ええ加減辛抱尽きた夫の酒
紫木蓮へ母のにおいをかぎに行く

田辺市 岡本 昇

人前はあなたおまえのフルムーン
後添いをかあちゃんと呼ぶ愛もある
コーヒーの香りで動く鳩時計
エコエコと鳴らし米搗く水車小屋
ご破算で願いましたと店を閉め

鳥取市 土橋 はるお

人間は行儀が悪い花の下

一適も酒は飲まない新入りだ
分相應に生きてく事を考える
出来ちゃった結婚だつてめでたいよ

ブナ林の水の旨さは一番じゃ

鳥取市 土橋 睦子

苦も楽も共に支えた八十路坂

芸術の粹を集めた砂の城

夕焼け雲眺めて帰る牡丹島

一期一会自然の風に流されて

散る花に噂の種を眠らせる

鳥取市 岸本 宏章

出無精をみどりの風が誘い出す

考えたとおりに手足まだ動く

白いめし瑞穂の国があるかぎり

趣味の会課題はどこも若返り

貸し借りがなくて何でも物が言え

鳥取市 岸本 孝子

墓洗いながら聞かせる孫のこと

約束をきっちり守る友を持つ

雪月花あれど桜の酒がいい

人それぞれ物差し違う幸不幸

同居して悠々自適夢と消え

鳥取市 夏目 一粹

ひょうきんな風にときどきかまわれる

そのままの暮らし幸せだと思ふ

春の風どうやら恋を仕掛けだす

だんだんと小さな夢になる私

母さんの手紙は苦み効いている

鳥取市 奥谷 彩子

老母元氣ただそれだけで今至福

多勢に無勢雑魚の正論流される

男と女愛のくすぐりには弱い

娘と街へ明るい春の彩を着る

腹に一物こちらも仮面外せない

鳥取市 岩崎 みさ江

頑張りにすぐ付けがくる喜寿傘寿

邪念など遠心力で振り払う

まだ迷う昨日悟った筈なのに

夫婦とは不思議な縁DNA

口笛に応えてくれるホーホケキヨ

鳥取市 中村 金祥

永田町ピエロの舞いが止まらない

あるようで無いのがきつと民の声

お互いがいつもチェンジを狙ってる

花持ちがいいと桜も嫌われる

ありがとう素直に言える子が巣立ち

鳥取市 平尾菜美

改革の路線障子か戸か迷う

ゴマの手にかかる豆腐の大変身
案内状添える手引きに花がある
高からず低からずして山静か
芽吹く日を待つ切り株の一代記

鳥取市 有沢せつ子

春休み育ちざかりの炊事する
孫十五理屈が上手くなりました
十五歳もう言う事を聞きません
説得へ自分の恥をあえて言う
若草をじゅうたんにして昼にする

鳥取市 加藤茶人

妻の愚痴うるさいほどが丁度良い
軍事派が北に便乗はくそ笑む
日本にまだまだあった義の心
四十九に五十が君はまだ若い
努力より金がないない恨み節

鳥取市 山本益子

躓いてつくづく知った骨粗鬆症
八十路きて白珠肌の願いあり
寄り道に人間模様かいま見る
高齢化空白時間持て余す
お疲れさん靴にも一日の感謝

鳥取市 吉田弘子

下校時の見守り兼ねる万歩計
万歩計歩幅と姿勢意識して
咲く時季を花は自然に逆らわず
血圧はクスリを飲んで平常値
戒名へ格差はつきり寺の寄付

鳥取市 西川和子

ゼロの日が続く不況の小商い
イメージを変えるメークに念を入れ
イメージを変えて元氣を取り戻す
古希の宴若いイメージまだ残る
初帰省青年らしくなってきた

鳥取市 宮脇道子

花卉が髪に付いてき今晚は
年重ね痛みも共に連れてくる
花吹雪孫に連れられ露天商
老桜根本に二輪咲かせてる
花筏 亡夫の悪態許してね

鳥取市 太田幸枝

イメージはよいがジョークを言えぬ人
稼いでも貧乏神がつきまとう
悪いこと社会のせいにしてしまう
米寿過ぎなんだか気分るんると
良い友に囲まれ鬼の面はずす

鳥取市 横田 春名

にこにこ愚痴聞き地蔵ばあちゃんだ

陰口が弾みだしたよみな鬼だ

長電話心の皺も伸びている

カラオケはもう飽きたよと桜散る

プライドを捨てた素足はよく走る

鳥取市 春木 圭一郎

目標へ向かってできることをやる

続ければ確かにわずかでも進む

逆境が飛躍のチャンス連れてくる

人を大切にするため自分大切に

収入が半減しても生きる知恵

鳥取市 池原 天馬

満開の桜雨降り店ひまだ

若い日の名画老眼鏡かけて

傘寿の日も紙漉く友は黙々と

けいたいを邪魔にして子に叱られる

政治家の打出の小槌何でも出

鳥取市 田村 邦昭

喜びを素直に見せる顔が好き

年金日一皿添えた妻の愛

約束を果し少年いい笑顔

ひとり去り駅に温みは戻らない

父からの便りがいつも背を押す

鳥取市 永原 昌鼓

セクシーなモデルで見せるモーターショー

知らぬ顔いてややこしい通夜の席

セクシーな頃もあつたと足さする

ややこしいゴミ漂っている宇宙

草餅を作れとよもぎ顔を出す

鳥取市 中宇地 秀四

喧嘩相手が一人減り二人減り

良い事ばかりしていると誰もついて来ぬ

老いらくの恋子や孫に気をつかい

年金に俺の老後は支配され

浄財という名で賄路横行す

倉吉市 野口 節子

大学は出たが上野の森に住む

笛吹けど日本の景色空回り

負うた子がなみなみ注いだ花見酒

爛漫の春を歩いてたしかめる

騒ぐ血を押えきれない祭好き

倉吉市 松本 よしえ

ホーホケヨ今朝も来ているありがとう

花咲いた蕪大根を薙ぎ倒す

中一になって凜々しい隣の子

フルムーンまだあの頃は若かった

年齢は言わず大正生れです

倉吉市 最上和枝

四国路を観光がてら寺参り
オイと呼ぶ私も名前あるんです
ちゃんづけで呼び合った友あの世旅
彼岸後も春に逆らい雪が降る
面倒見よくて齢とる暇が無い

倉吉市 山中康子

娘に戻るレンゲ畠の温いこと
狙いうち今に今にとみなはずれ
ホーホケキョ静かな亡夫の友となり
ブライドの油切れたか立往生
報告は一方通行だけとする

倉吉市 猪川由美子

人間だホンネを聞いてホツとする
月のウサギにニッポン人が会いに発つ
地デジ広報ずつと続くのウンザリだ
ニューハーフ美貌ぶりには騙された
WBCイチロー打ってドラマ済む

倉吉市 山本玲子

給付金相好崩し戴いた
寄り添うて主人支える盲導犬
乗り降り手動ボタンの無人駅
日向ぼっこ日焼けが怖い頬被り
徒長枝は元氣よすぎて役立たず

米子市 白根ふみ

ハッピーな声して薬売りがくる
断崖のさくらは鳥の仕業かな
さくらちらちら あまりに涙こぼれそう
湖のまわりとてつもないさくら
気配りもこころ安らぐほどでよい

米子市 野坂なみ

小商い馴染みの客は話しずき
行商の声懐かしむ姥桜
仲好しの花から毒をもらつてる
薬草がコトコトこころ癒される
張りつめた古糸がこの頃弛みだす

米子市 青戸田鶴

ふるさとの山はいつでもそこにある
折々の花楽しんで八十路行く
ご馳走をたつぷり今夜は眠れない
あの世まで持つて行くのかこの薬
ブルートレイン消えてゆくのは淋しいな

米子市 門脇晶子

荷を開けてふるさとの品配る音
塩壺の母の手紙を配つてる
害のある薬をすこし飲んでる
タンポポの綿毛黄砂に乗って来る
やさしさがくすりになつてゐる介護

米子市 光井玲子

長生きをよろこんでいる子供たち
亡き父母に守られている手を合わす
振りむかず前へ前へとすすみます
迷信と分かっている日も選ぶ
欲なんかとつくに捨てて過してる

鳥取県 石谷美恵子

背伸びしたツケに囲まれ四苦八苦
軽い嘘罪の意識は持っていない
反省のポーズ何度も騙された
面倒な話が酒を提げてくる
ほかはみなキャンセルしたわ誘ってよ

鳥取県 竹信照彦

衛星を上げた北の自画自讃
誤報までして日本の格落とす
ミサイルが来ても隠れる場所が無い
交付金商品券にすぐ化ける
花見中ミサイルだって槍だって

鳥取県 盛田夢路

春本番命ごとと輝やいて
沈む陽に明日を託して遣り残し
不況風邪ひいたか首が回らない
禁断の木の実が誘う春うらら
居直った政治家に何任せるか

鳥取県 山下節子

好奇心火の輪くぐってみたくなる
誘ってよ姑さん今はケアハウス
ドーピングメダルを返す羽目になり
世渡りに馬鹿にもなれる度量もつ
母さんは見事家族のヤジロベ

鳥取県 山本正光

黄砂来て花曇りとはいい言葉
使わぬと損苦勞して得た金だ
水割りに遊び心が浮いている
自分史に愉快な嘘も混ぜておく
国民の信を問います流行語

鳥取県 松川行男

やっぱりね世論調査にそうだよ
毛針買い走った頃の店はなく
給付金パツと使って足が出た
につこりと笑えば鬼の面が落ち
ネエつけて罵声押さえた妻がいる

鳥取県 細田裕花

虫歯ゼロママに百点あげましょう
逆上がり子どもの頃の夢が見え
水一滴パツと明るい絵になった
東京の水は美味いと子のメール
メールから嬉しい春を一気呑み

鳥取県 深田 俱久

散るはずの桜は生きて傘寿越え

常備薬買い足しておく給付金

夜桜の育くむ恋に幸よあれ

ランドセル背中になじみ更衣

飛翔体桜だよりに水をさす

鳥取県 北村 稔

酒ついで腹をのぞきにくる男

納税と思や酒代苦にならぬ

考えておくと言うのはおことわり

あの娘につこりしたよ脈あるよ

不景気に花見する気になりません

鳥取県 佐伯 やえ

水仙乱舞ついはな唄がでてしまう

今いちばん気をつけている火の用心

百まで生きる約束の友またふえる

すぐる灯がありおだやかに生きのびる

人の手をかりず七坂こえていく

松江市 三島 淞丘

打たれても出る杭になる腹を決め

大トラもウワバミもみな飲み仲間

聞き飽きた話うなずくのもマナー

大人にもあった格差といういじめ

故郷の田畑を守る老いの意地

松江市 銭山 昌枝

すれすれで合格の孫五月病

給付金目を擦る間に消えていた

パソコンも携帯電話も持腐れ

好奇心喜寿の手習い増えてゆく

もう派手かいやまだいける衣替え

松江市 川本 畔

春風に吊し玉葱角を出す

モシモシ孫の電話のひょうきんな

病む友に会わせてくれぬ春の雨

来客の濡れたお膝を拭いてあげ

ゆるやかに刻まれていく春の陽よ

松江市 小川 注湖

盆栽を折った孫の手軽く打つ

トンチンカン刃匠の槌が間を測る

リズミカル妻ご機嫌のお味噌汁

舗装路の割れ目を草の芽が見付け

神棚に妻のへそくりいじらしい

松江市 安食 友子

さあ大変お八つの残りひ孫の眼

健気だね糞虫ちゃんも風任せ

境涯に達し解るよアドバイス

任せてて批難するのは止しなはれ

ラブシーン羨望してる風見鶏

松江市 松本知恵子

満開の桜さくらにふっ切れる
給付金せつかくだから温泉宿
だんだんが終わり宍道湖さみしそう
風邪癒えて歯医者通いの春のウツ
くつろいだ田舎料理の囲炉裏端

出雲市 石倉美佐子

金婚式に肖り作る訪問着
昔々の踊子さんに熱入れて
食べること住むこと一番先にして
葉桜も良いなと思う並木道
ハンチングかむり出掛ける投票所

出雲市 森茂美

土の香を鋏と嗅いでる雨上り
騙し討ちするよに寒さぶり返し
秘書さんが罪をかぶれば事が済み
列組んで押収書類運ぶ人
珍らしく田圃耕す人が居る

出雲市 伊藤玲子

父はもう遠雷のような光らない
仮面外しわたしひとりの湯に浸る
精いっぱい咲いて桜も散ってゆく
出づる陽を拝み入り陽に感謝する
あと少し神にもらったパスポート

出雲市 多久和敬子

孫の守り少しは役に立っている
足元の幸せ探す散歩道
良く動く口が噂を運んで来
なかなかに進まぬベンに気の焦り
いたわりの言葉に心軽くなる

出雲市 富田蘭水

花に酔う今の幸せ刻まねば
百選の桜の下の酒不足
言葉こそ魔物女がくすくすと
言う事と心は逆に進んでる
風流の心がいそぐ足を止め

出雲市 岸桂子

朝のパン父権は軽くなるばかり
思いまだ返せず道は遠くなる
自分のことも少し真面目に考える
ノリシロで終る一生かもしれぬ
時報とはじっくり行かぬ古時計

雲南市 毛利幸

神の里郷土の誇り胸を張る
躓いてやっと分かった過去の罪
人生の八合目までやっと着く
真面目さに惚れて結んだ赤い糸
昔日の母の一言離れない

島根県 伊藤寿美

消えてゆく湖岸電車を目に刻む
寺はすぐ医者は歩いて一時間
仙人も山から下りる給付金
いつも子機連れて独りの湯に入る
ひらがなに変換をして妥協する

島根県 持田多輝子

幼子の未来に何がおこるやら
人並にウツの日もある花の首
お猪口からこぼれるロマン受けて飲む
横文字のカルテに生命あずけてる
少子化が老いの福祉にはねかえる

倉敷市 喜子

売り言葉買い手がなくて宙に浮く
一騒動起こしに姑がやってくる
酔っぱらいの腕にあふれる子のみやげ
人間と聞けばごきぶりとんで逃げ
記念日の財布論吉は落ち着けぬ

真庭市 国米さくゑ

新名所テレビドラマが作り出し
里帰り何は無くとも温い宿
緑陰に乳房ふくます原風景
緑黄野菜今朝もたっぷりいただいた
濡れ落葉まだ反骨の血がうずく

真庭市 福岡智恵子

春日和田舎の名所旅します
古今難むさしの里の風に会う
古今難いにしえ語る春がすみ
図に乗って脇の甘さをつい忘れ
食膳に緑こんもり森となる

美作市 大石あすなろ

コーヒーは二杯目沈黙がつづく
泣き癖のついた尻尾を切り離す
続編は枯木にならぬうち繋ぐ
手鏡の奥へ女の炎を伏せる
ありがとう言うべき時にちゃんと言う

美作市 山本玉恵

美しい事ばかり追う春の耳
一と夜二た夜ねむれぬままのひとり住む
遅咲きの花にも夢はあるのです
シナリオをまたも乱して春の靴
足跡の無い影を追う風の道

美作市 福原悦子

喜びを桜茶今日を待っていた
踏まれても根性だけは生き残る
口癖は何気なく出る母のもの
セクシーに一度もなれず老いて来た
玉砂利を踏んで心が洗われる

竹原市 石原 淑子

笑顔満開引き立て合つて春の山

感謝の日国旗たてたい夫古希

モーツァルトゆるりと聴かす肚の虫

満月にあやしてもらう背中の孫

君想う紫陽花彩の走り梅雨

竹原市 時 広 一 路

機械では無い人間の物忘れ

雲の悪戯今日は日の出を見せないぞ

男一人家計簿なんか要りません

今年一杯未来が有るぞカレンダー

四と五の間で迷っている私

竹原市 岩 本 笑 子

妻植える春を先取りしたいから

銀行で会うてスーパードでも会うて

立ち姿桜は風を待っている

ツクシタラの芽さてさて春の天ぶらを

ハクシオン ハクシオン私を狙い撃ちにして

宇部市 平 田 実 男

一寸の虫にもノーと言う権利

超ミニが真向いにある目のやり場

貧乏人が麦を食べたのは・む・か・し

お金にはならぬ仕事が生きる糧

眼鏡買い替えたら皺が増えていた

美祿市 安平次 弘道

器用な手にしてはお金がたまらない

プラス思考やはり本当の恋でした

さくら貝海は今でもきれいです

シナリオはどうあれ罪は罪になり

あれこれと迷い結局騙される

松山市 高橋 宏 臣

ひとすじに進むと狂う古時計

大脳に絡みつくのは蜘蛛の糸

お茶漬けをかつ込み今日の毒を抜く

平均値以下でどっこい生きています

まだ生きるつもり竹光研いている

松山市 宮 尾 みのり

老人用というコンビニの広さかな

時効成立今真実を聞いたとて

想い出もゆつくり止まるオルゴール

お茶をして噂話の輪に入る

健診が済むまで我慢するケーキ

西予市 黒 田 茂 代

菜の花の径で明かるい詩拾う

満開がいいさくらも菜の花も

踊り手の容姿も才能の一つ

狂言とお能 川柳と俳句

装束に歳彩りの紅の色

東かがわ市 清川 玲子

図太さも出来て世の中渡り出す
許すこと教えてくれた太っ腹
初鯛が上がり港が活気づく
粗は粗でも一味違う鯛の粗
リストラの父を家族が包んでる

東かがわ市 川崎 ひかり

父の樹をゆすり答を聞いてみる
真実が見えぬ掴めぬだまし舟
DNA三代続くお人好し
一瞬で変るオセロの黒と白
私が動くと起るハプニング

東かがわ市 原 賢

真面目さを買われた父が無位無冠
坪庭の変化楽しむ花植える
酒ちびり時計気にせず友を待つ
神棚で当たり待ってる宝くじ
彼岸きて足の向くのは子のお墓

東かがわ市 伊勢 八重子

晴れて良し曇りまた良し花見酒
感情に走り判断見失う
いざという時こそ普段物を言う
胸の灯を燃やした夢もセピア色
タイミングのがして残る悔い一つ

高知県 小澤 幸泉

結局は気まぐれなのか父の靴
初恋は忘れましようと夜の床
こわされた眼鏡に過去をさがし当て
人生の赤字をつつむ妻でいる
和解など出来ない奴が笑ってる



(つつき)

松江市 山根 邦代

松江市 松浦 登志子

楽しくてひと日過ぎてる春休み
賑やかな夕餉一品添えている
着物への愛しさ鉢また仕舞う
片付かぬ心を鬼に思い切る
だらしなくかけた背広に妻安堵
加齢臭耳のうしろにかくれんば
拝まれて籍に入ってる苦勞
容赦ない転勤族の身重妻

川柳塔の

川柳讃歌

(54)

木津川 計

妹が泣くと兄ちゃん叱られる

坂 裕之

西尾葉さんの名句に「ようきいときやと妹
ついでに叱られる」がある。なんの落ち度も
ないのに妹はついでに(の「ついで」がいい)
叱られるのである。叱られるのが姉だったら、
面白味はなく、川柳にはならない。

さて右の句、兄ちゃんはまた妹を泣かせた
のだろう、と濡れ衣を着せられたのである。
それと言うのも、兄ちゃんはいつも妹を泣か
せてきたのだ。が、兄が泣くと妹が叱られる
構図は裕之さん、考えられませんか。

ドキドキワクワクな重の蓋を取る

播本 充子

充子さんほど動悸が早くはならないが、僕
も重の蓋を取るときはドキドキの不安と
ワクワクの期待がないまぜになる。大体実物
は棚の見本よりうなぎが小さいから、また騙
されるのかの不安が先立つが、蓋を取ってえ

えーっ! と驚く大きなうなぎに出会う店が
たまにある。だからワクワク感を充子さんは
持たれるのだ。大阪の堺筋から一つ東通り、
旧三越の少し南のうなぎ屋(店名を失念)を
訪ねられたい。ワクワク感が叶えられる。

生きた偽装の連鎖かもしれない

柿花 和夫

以前も述べた。ラテン語の「仮面」を意味
するペルソナ(Persona)が英語で言う「人
間」のego, その語源である。人はみな仮
面をつけて演技しているのだ。

右の句、その追認だが、「偽装の連鎖」と
いう当節のはやり言葉と重ねたから「生きる」
の説明が装われたのである。食品の産地偽装
や賞味期限の書き換えなどは許せないが、困
ったことに化粧も盛装もまた偽装なのであ
る。人はみな偽りの埒場の中で生きている。
淋しくてかまわれたくてするいけず

倉益 一瑠

「いけず」の語源は、と「大阪のことば事
典」が言う。「オールド・ミスなどの小姑娘
性のひねくれた氣質が人に嫌われて、あれで
は嫁に行けない、行けず者だ、行けずだとい
ったものではなからうか」と頼りない。ま、
その通りだとすると、この句の女人はいっそ
う嫌われ、いよいよお嫁に行けない。
が、実はこの句、かまわれたくて拗ねてい

るのだ。もし一瑠さんがご当人とするなら、
僕はそんな拗ねられ方をされてみたい。

かび生えた初心時々陽に当てる

渡辺 富子

「ばさはさに乾いてゆく心を／ひとのせい
に／するな／みずから水やりを怠つておいて」
「初心消えかかるのを／暮しのせいにはする
な／そもそもがひよわな志にすぎなかった」
詩人・茨木のり子さんの「自分の感受性ぐ
らい」の一節である。

初心が消えかけたり、かびに覆われたりす
ることがある。何度僕も挫折しそうになっ
たことか。そんなとき、僕も陽に当たった。
太陽はそのたび熱い氣力を注いでくれた。

拳は暴力か愛か線引けぬ

星野 育子

僕は平和主義者だから暴力を憎む。子供を
ぶん殴って教育するより褒めて教えた方が効
果がある。が、商船学校の実習ではぶん殴
ると教員に聞いた。無知や不注意が全員の死
につながることもある。痛目に合わせて何
が危険かを教える。命がけだ、と。

うーんと唸る。絶対平和主義、体罰反対が
ぐらつく。愛の鞭には疑問があるが、命の鞭
には抗弁し難い。が、軍隊は命の鞭を理不尽
にふるった。合理性と人間性こそ尺度だろう。

(「上方芸能」誌発行人)

自選集

宮口笛生

八十田洞庵

花どころ寒い四月の花だより
試歩の足妻のぬくい手をにぎる
満開の桜へ寒い花見する
酒が出て男の声がでなくなり
誰何と言わうが俺は酒が好き

宮西弥生

両川洋々

エコバッグ吊して風の通る家
花見頃女も見ごろロゼワイン
どこまでも突張る白で透きとおる
気持よく酔わせてくれる花弁当
花見ごろ散る見頃あり底力

森下愛論

阿萬萬的

手のひらに花びら受けて余生見る
あの星にいつか行けるか見つめてる
独り寝のしたたか軒響かせて
善人の尻尾掴んで従いて行く
危なさを避けて飲んでる屋台酒

あと味の悪さを貰う言葉尻
残照へ僕の青春忘れな
植木鉢気ままな枝は許さない
風紋のみだれにまがう政治の場
妻の留守このごろ気まますぎないか
自爆テロやれとアラアがのたまうか
人間にランクをつける勲章よ
ああ不倫見逃す神も同罪だ
裏切りのハート真昼の陽に晒す
天国へ直行できるナビを買う
また運を掴みそこねた喋り過ぎ
自問自答なかなか浮いて来ぬヒント
深呼吸して限界をさとの齡
ぺらぺらと喋り中身のない話
おもしろないテレビそれでもつけたまま

板尾 岳人

いつからか寂しくなつて来た小雨
小糠雨肩を濡らさぬ約束で

土砂降りへたつた一度の軽い罪

天国へ住所変更して逝かれ（露の五郎氏お別れ会）

パパ・ママと英語で言えるようになり（二歳六ヶ月の恋人）

奥田 みつ子

母の声聞いた気がする朝の夢

咲くよりも散るむずかしさ人もまた

思いやるゆとり嬉しい仲間の輪

延々と日の当る道ゆく怖さ

ためらわず選んだ道だひた走る

河井 庸佑

再建の核に拔擢された自負

世渡りの下手はどうやら親譲り

冷静に無謀と勇氣見極める

四季折々名目付けて飲み仲間

賽投げてじつと見詰めている波紋

川上 大輪

点ひとつこれから何に化けるのか

ケイタイを忘れる方が一大事

午前様疚しいことは何もない

リセットをしても消えないものがある

考えてみても所詮はケセラセラ

木村 あきら

早朝の空気はビールより美味い
雑草の意地踏まれても蹴られても

節水の宣伝カーのゆく暑さ

暑さにも笑顔崩さぬ六地藏

飼犬に急かれて弾む万歩計

小島 蘭幸

一億円寄付したおばあさん元氣

髪はよく抜けるズボンはずぐずれる

なんにもないことはいいことなのですね

大根を煮ている墨を磨っている

新球場で一度は風になつてみる

小西 雄々

水無月へ樟脳におう衣替え

ゴルフ歴三十年へ知恵と汗

散るさくら眺め戦陣訓おもう

牡丹園まで足をのばした納付金

梨の花こぼれ実をつけ立夏くる

斉藤 嘉

唇にドレミの音符乗せて春

負けながらこどもは強くなるんだよ

風の子に逢いたくなつて来た岬

育林の汗に大きな握り飯

土の道ゆるりゆるりと生きようか

春が来た妻の畑は花盛り
鶴彬映画が出来る百年目
日本の蘭の代表クンシラン
蚊一匹何処から飛んで来たのやら
本年も食べる胡瓜の苗を植え

塩満敏

新家完司

一年生みんな菜の花色の傘
一、三人旅立ち春の絵になった
お経までワルツのリズム春うらら
一日がふわり流れるいい天気
満開の桜よ僕もがんばるよ

恒松町紅

新聞をゆつくり読んで外は雨
一病をもつて幸せ空を見る
注目の祝辞うっかり読み違え
納得のゆかぬ話を聞かされる
戦争の話で湧いていた昭和

津守柳伸

仲間ともライバルとも言い息が合い
クラス会三羽がらすを真ん中に
貧乏なら得意味噌汁が旨い
乱戦になってニヤリと腰を据え
百四歳母の天寿を合点する

遠山可住

都倉求芽

輪の中で折れ合っている羊たち
妖精がダンスはじめた春の森
本当のわたしを持てあましてるわたし
満腹になってしぼんだ夢の花
石鹸もタオルもサラでいい湯だな

土橋螢

その男の噂信じてなるものか
春を行く尽くし足りないことばかり
感謝することを忘れた年の功
わたくしの月下美人が咲いている
責任を押しつけている頬かむり

西出楓楽

哲学の道徒然を振り返る
少子化へ胸高らかに鯉のぼり
生野菜バリバリ食べる小宇宙
平凡に生きて笑顔に囲まれる
アームが仕切り情緒を消す文化

思い出は黄ばんでからが美しい
なるようになって何とかなっている
ふらふらして困る私の肝っ玉
見渡せばそこに居る評論家
いただけるなら主演賞より助演賞

仁部四郎

古いけど重い学資という言葉
過疎の山学資の足しに及ばない
学資へのお札に貯めるアルバイト
定年へ学資保険がすべり込み
残業が切られ学資へ母パート

林瑞枝

紙とペンあれば光ってくる余生
お洒落なる水の帯するわが故郷
よみがえる生気崖から日本海
歌って踊って磨かれて行く右脳
笑顔こそ医師はひと言葉め上手

前 たもつ

父さんは今度黙ってダイエツト
たもつ式浅香流混ぜダイエツト
バンドの穴一つちよんぎり春うらら
ちよい太りも悪くはないとB M I
脱メタボできたら恋をするつもり

三宅保州

精一杯咲いて散りぬるなら悔いず
一輪でも百花繚乱でも散華
雨に果てるもよし風に散るもよし
輪廻転生やがて再び咲く日まで
心配の種を探していませんか

温故知新

丸尾潮花

家庭とはかく波風のたつものか
一行の詩もなく窓はたそがれる
帰還してこんどは妻の捕虜になり

盆永貞女

弁当箱凹み人生夢も無し
一瞬の視線に愛を信じ合い
ビジネスへ女らしさをすり減らし

真鍋一瓢

手土産は取つときながら貸し渋り
けなげなり猫猫なりの身だしなみ
馬車馬に似ていて戸籍筆頭者

松江梅里

かくし芸残念ながら鳩ぽっぽ
命まで賭けた女でこれかいな
税金は吞んだり喫うて納めてま

— 合同句集「私達」—

昭和三年発行 選者麻生路郎

水煙砂

小島蘭幸選

草加市 飯土井 健翁

足腰は萎え心だけ研く日々

ボンヤリとしてれば惚けが攻めて来る

黙々と実行重ねいる白寿

経営と経済読んでいる明治

現役の頃の書物を読む白寿

新聞とテレビ新語を追ひ疲れ

大阪府 神野 千恵子

少しずつ進む何かを捨てながら

朝昼晩あしたにもある二十四時

ときめきが大事アンテナ錆びぬよう

気合十分そんな顔してアマリリス

ベランダは進行形の花盛り

レコードの溝からセピア色の日々

大阪市 尾崎 ゆめ

もう一枚翼があれば翔べる筈

壊れちゃったのは欲張り過ぎたせい

一人ではバーは越えられないと知り

豆ごはん無事に炊けたら逢いに行く

簡単に答をくれるカッパ麺

女が本音喋ると横になる男

紀の川市 宇野 幹子

許さねば切った尻尾が疼き出す

空しさは鎖骨あたりにうずくまる

春の雲ふわりと乗ってみたくなる

この坂を越えれば風も変わるだろ

さわやかな変身錆を脱ぎ捨てて

期限切れの噂煽るとまだもえる

藤井寺市 増井 ヨシ枝

赤ちゃんに貰う欠伸よ日向ぼこ

お亡父さん庭のしだれも咲きました

プラス志向なんにも恐いものがない

お若いと言われ小ジワがこそばゆい

お彼岸の法話欠伸をかみ殺す

仏壇の花は自家製庭は春

北九州市 岡田幸生

カラオケは好きだが五線譜は読めぬ
隅っこから風向き読んで生きたる雑魚

背に家族男が喘ぐ棒グラフ

知りたくはないゼロになる日の余命表

相槌をみな同類とみた誤算

阿波市 三浦千津子

熱いもの抱いて無駄足厭わない

納得のゆく終止符が打ちにくい

後戻り出来ない歳を思い知る

鈍感が脚光浴びているテレビ

方便の嘘で解いたもつれ糸

香南市 桑名孝雄

印籠を出しても土下座してくれぬ

楢山へ支度おさおさ怠らぬ

空元氣だろうと生きてさえおれば

冬眠で風邪を防いだ老いの知恵

忍一字動けば弾が飛んでくる

高知市 松尾憲子

もや一つ晴れたと思う掃除して

節節に自分で決めて今の道

人の世はこんなものかと腕を組む

人の世もまんざらじゃない空を見る

キャンキャンと吠える犬から手なずける

松江市 相見柳歩

生きていだけで楽しいひとといふ
仏から見えない力与えられ

うれしいと感じる愛を与えている

公務員授業で眠る子がいても

たくさんさんの恋に真面目になっている

雲南市 武島ちよえ

一輪草になって四年走馬灯

繕った昔を思う使い捨て

味よりも気持頂くお裾分け

責任を果たし桜は地に還る

主婦業は今も現役独り住み

雲南市 菅田かつ子

犬の仔の進路決まってもほつとする

この頃は腹いっぱいになる早さ

振り向けばああ波の音風の音

友情の厚さへ妻は妬いており

友達を庇い小さい嘘もつき

安来市 原 煩惱児

啓蟄へ老いも炬燵を離れむか

老い独り届く菜の花桜便り

正座して孫が抹茶を点ててくれ

北朝鮮に脅かされている世界地図

温泉でしみじみ故郷だなどと思う

米子市 小 塩 智加恵

府中市 藤 岡 ヒデコ

父を真似母を見習う八十路です
糠付けて初筈が裏戸から
同窓会傘寿を祝う乾杯だ
同窓会白髪に舞う花吹雪
杖ついて桜トンネル同窓会

鳥取県 斉 尾 くにこ

美作市 小 林 妻 子

変えられぬ過去より変えられる未来
神さまとおしゃべりしてる散歩道
青春に前期後期のあるを知る
戦後に生まれダイヤの刻を生きている
触れぬままあなたの過程修了す

鳥取市 高 浜 勇

神戸市 早 川 孝 子

こんな値で和牛食べれるわけがない
くよくよするな水平線を見ろ
武骨だが自然石の墓がいい
借りのある人に苦情を言えもせず
粹がつてみても鼻毛も白くなり

鳥取県 橋 谷 静 江

加東市 黒 崎 美紗子

食文化自家菜園が元氣だす
百葉へ新鮮野菜芽をだした
年金のおかげで出来るボランテニア
縁側に立てば近所が寄ってくる
年寄りの悩み聞く耳持つてあげ

みまわり隊笑顔変わらぬ子を送る
ほろほろとこぼれる桜満身に
夜桜の凄さよあれは精だろ
まだ四月なのにギラギラ陽が昇る
春を観る感慨深くなつて来る
連休へ苗代手伝いすると言う
春酩田から畑から呼んでくれ
夏草とのいくさへ老いの身抱え
年金も心置きなく使い果て
桜の下みんな歩いてお帰りだ
迷うたびあなたの風を感じ取る
卒業の涙無限の夢を追う
思い出が涙に変わる子の巣立ち
寄せ植えの花は互いに響きあう
うちのママ魔法使いになれるんだ

雑草の私語と楽しく玉あそび
挿し芽した床にも雨の応援歌
新築を見学したよ老いの里
申請に役に立ったよ免許証
高速が千円になるとこへ行こ

尼崎市 小池 幸子

春の陽を浴びて楽しい庭いじり

期待したほどに成果のない目の手術

古雛に手作りちらし一人宴

道の駅並ぶ野菜に作者名

ウインドウ映す背中が過去背負う

大阪府 小栢 こずえ

手も足も元気に動く朝が来る

遠まわりしても安全地帯行く

消したか途中で悩むオンカオフ

畑被う草の花でもいとおしい

老いの知恵生きる作法と嫁を立て

大阪市 平井 露芳

子沢山知事も本懐給付金

長生きについて行けない脳が古い

粹筋が来ると分かる大相撲

滞納はしても欲しい給付金

賞味期限までに食べてや仏さん

豊中市 荒巻 夢

捨てられたままに芽を出す水仙花

旧悪がばれて弾んだクラス会

次の世は悪女になると心決め

生と死の間じたばた生きてゆく

優しくて真正直で姉病める

豊中市 谷川 勇治

娘が嫁ぐやつとやつとの今朝の蝶

春の歌聞こえてますか土筆坊

補聴器を無くした妻と日々平和

八十五草餅三つ平気です

梅雨近し寝莫座を妻が買うて来た

富田林市 古田 千華

敗北のその尊さを咲かせます

追伸に一本太い釘を打つ

傘の中昔話をして遊ぶ

呼鈴に居留守の神は慌てない

雲行きが悪く紫陽花悩んでる

羽曳野市 宇都宮 ちづる

晴れ女自負して梅雨に旅に出る

花の名がほとんど言える女です

明日香路は憂き世忘れる友と行く

あのゴン太背広が似合う紳士です

あんた大きくなったねと傘寿の師

八尾市 赤木 妙子

枯野にもさわさわさと芽吹く音

ほろ苦い旬の味覚に舌鼓

千鳥足野暮はいうまい花の下

半分このみかんでバードウオッチング

老いに追い越されぬように竹を踏む

奈良市 辻内 げんえい

初孫と夢の添い寝が叶う昼
ドリンクを飲んで夜泣きの孫の世話
癖のある上司ばかりに鍛えられ
ひたすらに舞い散るために桜咲く
開花予報信じて宿を予約する

奈良市 岩 本 浩 二

病室の空気を変える孫の声
ガングロもやがて美白で巣立ちする
オフィスビル不況で窓の灯も疎ら
満月を千切り露天の湯に浸る
メロドラマ観てから妻があだつばい

和歌山市 土 屋 起世子

日本を背負う若者ネットカフェ
大不況テレビの喜劇見て耐える
生きているだけで倅せ春霞み
大志抱け育てて寂し膳二人
笑い話しっかり急所突いてくる

和歌山県 森 下 よりこ

少しずつ微妙にいちがう会話
春はたけなわ華のある人まんに
ひとりぼっちの家で四つん這いになる
ゆつくりと咲く日選んでいるつばみ
たんぽぽが宇宙交信してる庭

和歌山市 福 井 菜 摘

温かいニュースがほしい虫眼鏡
思案したことなど忘れ大笑い
原点に戻り静かに燃えている
くずし文字愛のころを読みきれず
この城に生きた証しの石を積む

紀の川市 辻 内 次 根

パイパスが抜けて寂しい地蔵さま
菜の花の先に眩しい里の海
好かれない小さく小さくなりながら
透明なガラスで仕切る内と外
哀しみの深さが分かる花の色

田辺市 大 峠 可 動

四季のない野菜になった春キャベツ
宇宙まで翔んで化学の観覧車
美辞麗句軽い思想の中へ消え
大器晩成 四月の愛は真に受けず
カテーテル我が脳天の血を這わす

三木市 広 瀬 房 江

内視鏡検査待つ間のお友達
セールスをピシャリ断りやるせない
写真見て姿勢の悪さ背の丸さ
八十路より振り向く古希の若い坂
祝膳歩いて見せる初節句

横浜市 川島良子

大阪府 若月祐作

勢いに乗って動いた次の駒
静止してサクラは見てる世の動き
騙されるどこかに隙があるのだろう
新学期馴染んでるかな孫想う
無我夢中持病の腰痛さえ忘れ

横浜市 長島亜希子

ナポリ見たでもまだわたし死ねません
(南イタリアシチリア旅行 3句)

オフシーズンカプリは僕の別荘地

紺碧の海は女優にしてくれる

マスクゴーグル頭下げられどなたです

今更いいわ難はしばらく飾っとく

札幌市 三浦強一

歳時記が駆足で行く温暖化

振り込めの餌食とされている絆

帰郷して空の広さを思い知る

物産展北海道を買って来る

値札見てから鑑賞の巨匠の絵

シドニー 三谷たん吉

おめでとう何も落さず飛んでった

北だっかわい子供にネコもいる

制裁で苦しめられるのは国民

世襲など選ばず呑気に自由人

戦争は絶対しない日本国

しがらみも水に流して酒を酌む
背中よりでかい鞆が走ってる
故里はどじょうさわがに水ぬるむ
壺を抱きかかさず見てる鑑定団

大阪市 吉川弘泰

これなんぼこれにしときと割り込んで
どうしてもやりとげまつせ若い知事
五月晴こらでちよつと日向ほこ
肩寄せてほんなら聞こか屋台酒

大阪市 安藤なつこ

疑えば急に心が液状化

ウソツキが四月一日ホント言う

泣きなさい いつか腹から笑うため

ダイエツトする気になる本さがしてる

大阪市 山本加お里

気合だけかけて見守る親心

化粧して顔の色つや見ています

生きるため明日を夢見て種をまく

とりあえず明日着る服をかけておく

大阪市 吉田富美

泰山木咲いて静かな夜がほしい

どうでもいい何でもいと昼寝する

セピア色夢をえがいた母子手帳
折紙の飛行機とんだ梅雨晴間

私より強く生きてる姉病い

大阪市 浅田 操

亡き夫メモが出て来て字を辿る

新学期孫もあの時可愛くて

四月馬鹿この景気では笑いなく

大阪市 萩原 大朔

定年日いつものカバン重くなる

引き際のよさは男の瘦せ我慢

身の恥を明かして無二の友を得る

この恋は明かさず墓へ持っていく

大阪府 高木 道子

以下余白お骨仏に帰り着く(二心)

お喋りの小鳥が集う喜寿傘寿

全身に触觉配備して生きる

真ん中の高さが欲しいプチ整形

大阪市 西脇 義祐

何かあるやけに化粧が念入りだ

記憶力少し薄れて円くいく

核優先拉致置き去りの家族達

料理よりレジの笑顔が御馳走だ

大阪府 坂口 公子

要らぬ要らぬで一寸煙たいお婆さん

山積みの仕事を崩す魔法など

八十九歳惚けてなんぞは居れません

むくどりに呉れてやったり蜜柑の木

露天風呂虫も落葉も気にならず

大阪府 松田 聰

二大政党どっちもどっちどこへ行く

世界不況それでも夢は忘れずに

水槽のメダカが戻す少年期

大阪市 橋村 容子

夕焼けに食卓映えてデラックス

花吹雪浴びて親子がたわむれる

咲き誇るソメイ吉野は廃校知らず

温泉へスキンスリップの春休み

大阪府 西川 冷子

花見にもマスク放せずノーメイク

花筏ダム湖へ続く長い旅

安物もコーデイネットでよく見える

公園に花弁積る穏やかさ

大阪市 寺井 弘子

天国に届けて欲しい感謝状

目をつむり恋の高鳴り耳すます

親と子の使途分け合って給付金

今生きて心に響く愛がある

大阪市 太田 としお

日の丸がゆれる成婚五十年

日の丸を背負うとみんな金縛り

日の丸の国に生まれて感謝する

旗日にはみんな揚げよう日章旗

大阪市 笠嶋 惠美

相席の気さくに肩の凝らぬ旅

寺巡り命を洗う花法話

給付金先に使つて春食べる

足湯からハートのリズム軽くなる

大阪府 畑 中 節 子

母偲ぶさんしょの香り木の芽和え

旅の宿解放感に弾む春

諍つた後も笑顔の姉弟愛

カロリーを気にしながらもグルメ旅

茨木市 島 田 誠 一

昏迷の世も知らぬげに花の雲

喉元にテポドンあててださをこね

金まみれ除けば居なくなる議員

子の事は癪でも妻の意が通る

門真市 矢 阪 英 雄

オブラート口の平和を守りおり

オブラート介護をうける年を生き

オブラートのどこから残らず残りおり

オブラート今日もおかげで生きのびた

箕面市 寺 井 柳 童

どうしても母の句になる損な父

足跡を波つぎつぎと消していく

左遷ぐせ社費で全国見て歩く

宇宙にもやがて点滅信号機

藤井寺市 俣 野 登志子

車中から見落すまいぞ花見頃

埃などない事にする花見時

テレビ電話今こそ欲しい孫の顔

派手を着る席を譲られるのはイヤ

泉大津市 助 川 和 美

馴れてきた空気になった定年後

農家継ぐ朝シャンしてる三代目

母の日はちゃんと言えますありがとう

お豆さんなんと優しい大阪弁

泉佐野市 稲 葉 洋

若者の会話異国へ来たような

婿相手話も歪も進まない

愚痴聞きも介護の内と笑ろてみせ

瞑想の個の空間に風呂廁

池田市 上 山 堅 坊

時々チエックを入れる思い込み

はつきりとさせないほうがいい喧嘩

お星さま街の明かりが邪魔になる

全員が勝つと思つてするゲーム

高槻市 片 山 かずお

抜き矜のうなじが女主張する

君に会いふと踏み込んだ迷い道

言いきつた後で間違いだと気づく

言い過ぎて嘘っぽくなる誉め言葉

岸和田市 中岡香代

寝屋川市 岡本 勲

家計簿をひろげると夫居なくなり
まん丸い地球うつぶん溜めている

古傷が痛むシーズンのほり坂

夕焼けが激動の今日語り出す

豊中市 藤沢長一

双児です同じ服でも姉は姉

しだれ梅本物かなあさわり見る

給付金おれおれ詐欺が先にとる

頼まれて断り切れぬ人もある

豊中市 源田啓生

泥カーネルもはや他人と思えない

母御どのオレオレ詐欺じゃないんだよ

看護師と娘の見分けつかぬまま

咲くを待ち散るを楽しむ日本人

羽曳野市 森下一知

灰色をくまなく探る内視鏡

甘く見た風邪に手痛い処方箋

アナグロの脳が錆付く備忘録

カタカナを刻んで煮込む混ぜ御飯

羽曳野市 松本静子

髭あれば風格のある顔になる

車窓から大和三山見えるところ

明日香村棚田に春がやって来た

生まれし土地御嶽山の見えるところ

篤姫を呼んで国会まかせたい

国赤字そろそろ逝くと決めようか

スタートの父の一言背中押す

年金で綱渡りする妻の技

寝屋川市 小嶋 みさと

祝い日に貰いし指輪抱きしめて

惜別の想い溢れてバラ活ける

満開の桜も見ずに黄泉路へと

合格の知らせ得意の寿司を巻く

枚方市 河田 洋子

晴着きて他人の顔になっている

他人には見られたくない仕事部屋

他人には甘い言葉のうちの人

写真しか知らない父を思い出す

枚方市 小川 良吉

不景気で花見の宴も湿りがち

大不況そしらぬ顔の桜かな

満開の桜祭りですつも消え

大不況サクラが癒す通り抜け

枚方市 坂本 ミヨノ

おぼろ月桜ほろ酔い通り抜け

移動の季節巣立ち入学奮起する

交代で衣装替えして下り増え

聞き違い介護交代誤差のまま

枚方市 二宮 紫鳳

花冷えに叔母の化身か蝶が舞う
安らかに叔母は桜の精になる
咲き切った叔母に拍手の桜散る
孫二人両手に花で桜見る

堺市 大隅 克博

遠島を申し付けたい時もある
無いものは無いと言いつつ甘い母
聞き洩らすまいとパツチリ目も開く
真新し墓前の花を替え難く

堺市 羽田野 洋介

見栄と義理分かった顔で手を叩く
名作をコミック版で読み直す
道草を食う楽しさを知らぬ子等
永遠の夢追うよりも今日明日を

堺市 近藤 治子

愛情の海で溺れるひとりっ子
あいつから言われた言葉起爆剤
つまらないパッシング受け去るなんて
気がつく私のそばにいたあいつ

吹田市 二宮 栄子

幸せを話して帰る墓参り
手話の手が温い笑顔もあたたかい
留守電にかわりばんこの子等の声
リハビリの部屋中温い風が吹く

吹田市 早 泉 早 人

葬式は身内だけでと言うておく
スコアより回りきれればいいゴルフ
不況でも泳ぎ上手な風見鶏
痩せたくてカロリー表を腹に巻く

河内長野市 山 室 光 弘

一言が多くていつも修羅となり
手がかかる亭主いるのでほけられぬ
誉められて耳の後ろがこそばゆい
落ち込まずいつも自分を褒めている

河内長野市 山 本 莞 子

修行僧大蛇のごとく去って行く
似てますね導師頼もし親子です
身代りだ置いてけぼりの数珠の玉
敷き蓮華座る私は生き仏

河内長野市 木 太 久 正 一

校歌聞く球児の顔はやわらかい
ひっそりと逝った友あり春の風
確定申告今年の戻り少し減り
筑前煮味が濃いと妻が言う

河内長野市 内 海 綾 乃

句会行きたい雨何時やむか天あおぐ
梅よりも桜早目に散るのかな
新社員かたまり歩く黒スーツ
青空の下心はれやか久し振り

河内長野市 針生和代

八尾市 中島春江

下積みを生かし人生開花させ
登山道茶髪の掃除ゆき届き
介護職担い始めている茶髪
平凡を光と思う日を生きる

河内長野市 辻村洋子

少子化で腕白坊主見当らず
ふらふらと風に乗せられ花の旅
内緒です夫育てるムチと鮎
きつと居る悪魔と天使私にも

八尾市 松葉君江

公認をもらった日から修羅の道
晴れやかな笑顔が声を若くする
トンネルの桜に心洗われる
春夏秋冬辻褄合わず自然界

八尾市 前田紀雄

桜見て鐘の鳴る丘一つ撞く
夏野菜植え間隔で揉めている
爽やかに日本力を披露する
収穫が即食卓に乗る自家菜園

八尾市 田邊浩三

憎めない妻の可愛い地獄耳
舌戦の後は仲良く生ビール
予定表また書き直す桜狩り
終電車門灯までは鼻歌で

商店よりプレゼント来る誕生日
花吹雪読めぬ短冊ひらひらと
すぐにも行ける夜桜見ず仕舞
笑み給う野仏ほのと鬱も消え

藤井寺市 伊藤アヤ子

狭くても楽しく孫と春休み
花見頃日本列島通り抜け
花冷えにまだ衣替え出来てない
衣替えこの時期何を着てたかな

藤井寺市 吉田喜代子

それぞれに懐具合ある花見
將軍様宇宙より民米を待つ
何千万も貰った名前知らぬとは
新聞の契約いまだ生きる亡父

藤井寺市 津田シルク

胃の中へ春爛漫のちらし寿司
薫風に手招きされし背もおされ
わけあつてバッグに鮎を忍ばせる
供養塔没句を茶毘に南無阿弥陀

篠山市 永井かほる

さくら咲く最高天気人あふれ
探しものの時間の無駄だほつとこう
五日間当番すんでほつとする
ピザたこやき届き変った夕食に

篠山市 谷田多美子

三色の団子仏間に色を添え
雨の音生きた証しの暦くる
折角のお誘い亡夫に聞いてから
桜の空浮かれて居れぬミサイルに

宝塚市 丸山孔一

カード不可それが老舗と言いたい
肌目細か原田泰治の筆に酔う
パスポート期間十年念押され
故郷の家も寂しく貸家かな

生駒市 小西稔

共白髪内緒無くして笑い皺
茶の作法礼儀厳しく無駄除く
飼いだにかまれて気づく我が心
犬だけが飛び出し迎えしつば振る

奈良市 尾畑なを江

ご近所で子供の声がたまにする
毎日が休日となり忙しい
取り越しの苦勞私のロスタイム
好物を近くに置いて見てるだけ

奈良市 矢野良一

プロポーズブランコ漕いで言ったつけ

桜見て草餅食べてお茶をして
失言に歯切れも悪いべらんめえ
給付金あつと言う間に孫に消え

奈良市 阿部茶々

パスしたら勉強すると絵馬に書き
ワークシエア連れもて行こうこの不況
椿の花咲いたその日に啄ばまれ
桜さく日本元気になつて欲し

京都市 藤井文代

別腹が意図に反して箸を持つ
同窓会教えて貰う人模様
天然ほけ回りの人を癒してる
追い風に助け貰つて出す答

京都市 清水英旺

生姜湯の喉ごし熱く寒戻る
枯れた身よ否常緑の気概あり
潤一郎のめでた桜はかくあらん
花笠に群れる人みな桜色

(平安神宮神苑の桜を観て 2句)

尼崎市 河津正治

マンゴーが地域支えて過疎を脱け
泣きどころ押さえ苦手の肚を読む
水仙の香に早春の夜が白む
口下手が熱い血潮の手を添える

尼崎市 藤岡りこ

進ませた時計で寝坊する羽目に
進路変更ばかりで前に進まぬ息子
ミラクルをおこした顔が泣いている
宝物心の奥にしまつてる

明石市 梶谷 和郎

息抜きをしたいと噴火する地球

死んだ気でやってないから生き延びる

ゴージャスなリボンに箱が負けている

お互いの運も分らず旅をする

西宮市 吉井 菜々子

天王寺さんへ功德あろうがなからうが

なつかしい亡祖父の土産の栗おこし

日溜まりへ独りぼっちの缶コーヒー

心配ご無用お銚子ひとつあればいい

芦屋市 竹山 千賀子

手のひらに温もり残し友は逝く

スピーチのメモ手のひらに忍ばせる

誕生日生命線を確かめる

ケータイが魔法の箱に見えてくる

神戸市 山崎 武彦

握手した数だけ地球丸くなる

役人の渡り許さぬ橋がある

この橋を渡れば里の笛太鼓

海峡で揉まれてこいと稚魚放つ

兵庫県 日野岡 和之

芯のある頑固も好きで優しい手

似てるかな一輪で咲く寒椿

厳し世をしなやかに生きながらえる

品性を少し残して独り春

三木市 山口 久子

吉野山千本桜閑雅して

春物に着替えすまして寒もどり

老いてなお今が青春イベントに

ボケ防止声高らかに唱歌かな

加西市 金川 宣子

ペンフレンドイケメン一人潜り込む

腹鼓ボンといい音出している

表札にアルファベットが多くなり

健診後どんどん伸びる腹回り

加東市 岩本 美緒子

色茶けた個展新聞子がコピー

画展報道奢り晴ればれ自分史よ

さても画く絵に喜びの息吹かす

明日はどんな絵が画けるかな預けおく

加東市 安達 厚

八十を越した実感まだ湧かん

老いた日に笑える種を播いておく

一人なら中華そばと決めている

せめてもと散歩の道にごみ拾う

紀の川市 北山 絹子

タクシーに時の話題も乗せている

問診へどうも微熱が邪魔をする

少年の自立を風が押している

引退へ雲悠々と流れてる

紀の川市 吉村 幸

メンバーに若手が欲しいボランティア

メンバーが揃い元気を感謝する

メンバーの笑顔が僕の起爆剤

メンバーの輪を乱してる自己主張

岩出市 村中悦男

淋しさを増幅させて書く日記

出荷者名憶えておいていちご買う

目に見えぬ力で攻める世間体

一日を貴重と思う妻という

海南市 小谷小雪

久々に会えば敬語で話す子に

わたくしも小動物も小走りだ

静寂に春猫の声手に負えぬ

花終わりとんと澄ましたしだれ梅

和歌山市 坂部かずみ

公園に春の子供が広がった

薬袋並べて鬱の花粉症

五分咲きの花見弁当震えだす

片思いシニア教室だけのひと

和歌山市 磯部義雄

気休めに買った一枚万馬券

お隣も辞退はすまい給付金

選挙前打出の小槌振り過ぎる

酒の味知ったかぶりをする二十歳

和歌山市 根田 よしこ

桜まつり散りざわさえも美を競う

年寄りに内緒話は出来ません

青天が好きお花畑は雨も好き

百均を考え出した人偉い

和歌山市 堀 富美子

バイトした孫の汗もらうバースデー

癌告知こんな悟りの顔をする

春爛漫遺影しのばせ花の宴

今日だけは桃源郷の花の下

野田市 高橋 保雄

居酒屋のもう一本が仇となり

子供らの数より多い護り隊

鷺も方言ありと気付く朝

あれこれと飲んだ薬のどれが効く

橋本市 石田 隆彦

ダメもとでバーゲン品の値を叩く

酩酊もわが家で寝てるミステリー

懸命に働く蟻を誘う穴

宇宙へのかけ橋つなぐ若田さん

三田市 福田 好文

書き直しすれど自画像また美人

神仏を忘れて生きる仕合せ度

場の空気読めぬ男の凡フライ

大小の壁に当って取れる角

三田市 辻 開子

横浜市 巖 田 かず枝

疲れても介護があるとそばで寝る
ちどり足家まで送るお月様
満開のしだれ桜もピンク顔
介護するされる人より長く生き

豊橋市 藤 田 千 休

姉妹でも格差感じる顔氣立て
志あつて不屈の目が燃える
めかしてもいつもの顔がある鏡
樓閣を砂上に建てる産油国

北名古屋 市 片 岡 文 男

日が陰り柳誌と湯呑みまた移動
白刃の氣迫がみえぬ政
統計の得意な国が策打てず
入り口に早咲きを植え客を呼ぶ

岐阜市 平 野 あずま

亡き父の民謡聞きつ花見酒
休刊日二度寝の夢へすべりこむ
マイカーが必要悪となる過疎地
もみじマークへ関所新たに認知症

静岡市 渡 辺 芳 子

傘寿でも夢の中では女学生
曾孫四人取った事あきらめる
干渉もされなしいしい暮し
給付金ニコニコ顔で待っている

母が漕ぐ三人乗りで颯爽と
根性は女の方がありますよ
ワクチンも特効薬もない株価
五十年手を携えて象徴に

藤沢市 加 藤 スズコ

琴の音も冴えて楽しい春の唄
夕やけこやけ曲の流れる街に住む
ダイケアで年を忘れた笑顔たち
桜トネル歓声つづく介護バス

昭島市 野 口 忠

お受験の日までとことん子を支え
手のモデル顔を撮られたことがない
帰国して眼が新聞を離さない
夜桜の明るさほどに明日が見え

東京都 高 岡 弥 生

得したよ桜吹雪の下歩き
新年度新たな出会いが増えました
夜深しホッと一息ハーブテイー
金かける五輪開催どこになる

東京都 井 上 つよし

天国の道かとまがう花吹雪
片ちびの靴が咎める左寄り
内孫三人小粒といえど男子なり
音も無く野仏濡らす春の雨

栃本市 岡野 すみれ

竹原市 國實 力

血の涙ふる日は天も神もない
武さし野を行ったり来たりはぐれ鳥
心変りあるかもしれぬ日記買う
似顔絵はいつもノートにお母さん

佐渡市 高野 不二

合格祝渡す幸せかみしめる
旅先は他人のようにいる夫婦
だまされた記事にも一寸腹が立つ
東大を出てお笑いで売っている

札幌市 小沢 淳

非常口忘れ深追いしてしまう
失言と少し本音が漏れただけ
臆病になろう無い知恵湧いてくる
評をする人が評価をされている

府中市 馬場 利子

孫入学へ部屋はみな桜色
妥協した風が時々触れに来る
振り向いた景色へわたし春を溶く
草餅の香りに華やぐ従姉妹会

府中市 岩本 雅代

花見宴我が家の庭も花盛り
無人駅今日にはぎやか花見客
ミサイルの恐さ忘れて宴を盛る
廃校の桜も悲しく散るだろう

何が不足歳とり過ぎたのが不足
長老の意見しつかりラッピンング
落書きに頭を下げたことがある
ありがたい話食欲わいてくる

竹原市 六田 半徳

春風が山から里に吹いて来た
庭に来てヒヨドリ夫婦賑やかす
凜と咲き見事に散った桜花
三月経ち絵具発する春の色

宇部市 高山 清子

新聞を着て縁側で夢枕
老友が惚け心が寒くなる八十路
何買おか定額給付八十独り
懐メロが棄てた昔を呼びもどす

出雲市 川島 和歌子

お喋りも介護のひとつ気をほぐす
家計簿にのせぬ秘密のネックレス
男なら続いて来いと縄梯子
威勢よく産声あげる二つの命

今治市 渡邊 伊津志

羽搏いただけでは消えぬ悔いがある
残された寂しさがある渡り鳥
脆い日の形が淡く響く音
葉の裏が靡き光っている命

大洲市 花岡 順子

唐津市 吉富 節子

茶柱の余得か心温かい

勝ち組の幸せを知る薬指

花が咲くまでに答えを見つけよう

定年がどっと若さを連れていく

山鹿市 阿部 ミツ子

米寿来て今なら書ける遺言書

定められし道ぞ笑顔でゆつくりと

夢の中ふんわり浮ぶ君恋し

大だつて右左見て渡りよる

香南市 近森 功

耳掃除まだあったかい妻の膝

ミサイルの高度気にする奴風

目覚ましを止めて安堵の朝の雨

ねておきて曾孫相手で今日も暮れ

唐津市 岩崎 實

限界と今年限りの初種を蒔く

見上げてる千年桜皆老いて

老妻をほめて食べてるのこさずに

漱石の坐像文机旧居跡

唐津市 北村 松風

老介護まず辿り着き椅子にかけ

指示通り一合までの酒を飲む

春八十路ひと花咲かせ芽を出すか

友名付く哲学の道語り行く

便利すぎ情緒なくした駅になり

無意識に置いて捜すの繰り返し

孫巢立ち夫婦はんやり隙間風

身の程を知っているから無理はむり

鳥取県 西谷 悦子

どんぐりの背くらべ刺激また楽し

満たされる指の先まで血が通う

控え目な小言に酒量減るきざし

晩酌は景気動向ないらしい

鳥取市 山口 千代子

憂さ忘れびわ湖の宿の露天風呂

世の中の乱れも知らず花は咲き

ほどほどの苦勞もボケの特効薬

転ばぬように念仏となえ散歩する

鳥取県 田口 清帆

朝祈り夕に感謝の夜はのどか

千秋楽異国の力士揃い踏み

朝日受け新しい今日を始むる

誠実に老いて悲しき認知症

鳥取県 下田 茂登子

咲くことも散ることもない姥桜

始まりは畔一本で仲違い

詫び入れて来ても許せぬ境界だ

過疎だつてフイリピンの嫁が来た

鳥取県 大塚 美代子

学び舎を巣立つ少女のまぶしい瞳
卒業の子等に未来をかけて居る
油売りながら掴んだ福ノ神
停まる度土産を探すバス旅行

鳥取県 岩崎 和子

彫刻の仏像みごと手を合わす
シール貼り心のすべて封をする
川柳のグループ年を忘れてる
グループのみんなに至福風が吹く

鳥取県 飯野 菖子

気にしない何時も陽気な私です
馬鹿になる事の重さに息をのむ
平均に世の中渡るこれも年
過疎の村水と緑が自慢です

鳥取市 大前 安子

給付金手続を待つ大欠伸
山萌えに鼓動わくわく足トントン
セールの語調ゆっくり風車
不況風黄砂花粉と攻めまくる

鳥取市 近藤 秋星

花見酒我がホームには縁がない
大空に鳶もご機嫌春唄う
杖ついて幼な馴染みも老人に
転勤に君よ輝く星になれ

鳥取市 津村 律子

につこりとされて介護の疲れ飛ぶ
千手観音縋りたいけど折れそうで
お人好し亡父の天性読めて来た
春爛漫サッカーゴルフ野球拳

鳥取県 加賀田 志延

じわじわと腰が時間を告げている
夕飯の一品求め山を這う
朝ご飯朝の時間に間に合った
埋み火にしていた趣味を掘り起こす

鳥取県 岡本 幸枝

それぞれの特技を活かす再出発
席題に取りくむ柳友の息づかい
毒舌家も居て愉快なグループです
良識をもってグループの仲に棲む

鳥取市 坂本 なつみ

足跡を深く残して砂の音
人生を楽しく生きる友がいて
丘に咲くすみれもけなげ香る風
赤ちゃんの顔万華鏡輝く目

鳥取県 鳥越 鬼一

大不況でも桜の花は咲く
ここ掘れとボチが畑で鳴かないか
ミサイルより怖いものありマイワイフ
普通ならとつくに辞めていた二人

鳥取県 岡村孝明

税申告済ませ安堵の酒を酌む
花びらを盃に受け吉さげお
災は足音させずじわじわと
株主も耐えて社員を生かさせる

倉吉市 藤井美津恵

川土手に林のごとくつくし出る
春の山白くこんもりこぶし咲く
気まぐれの暑さ寒さの春陽気
散歩道散った桜をさけて行く

倉吉市 前田喜美子

転ばずに百まで乗ろう自転車に
猫柳護岸工事につぶされた
給付金みんな誘って食事会
赤い服チャレンジすれば腰伸びる

倉吉市 酒井美美子

人並みながことが出来なくなつて老い
うろうろとしてたらボケと間違われ
マネキンの服と体形見比べる
娘の電話涙声聞き胸さわぐ

米子市 吉田陽子

わらび取り生きる希望を輝かせ
身に付いたラジオ体操感謝する
検査値はよし身辺整理また延ばす
花見ごぞ老若男女犬も来て

米子市 見山温子

命名と新米パパが墨で書く
わくわくとする一こまがほしい老い
只一言チンの料理はもう飽きた
雪が消え播いてもいない芽がのびる

米子市 猪森スミエ

門前町が語る由来の武家屋敷
春炬燵猫が占領高いびき
毒舌の裏に優しく見え隠れ
蹴った石謀反起してはね返る

境港市 中井虎尾

恋猫もライバルありてけんか猫
落ちたつて咲いた姿である椿
水たまりうつした色は空の青
バラにとげ美女がかくした長いつめ

雲南市 福岡博利

さくら舞ううぐいすの声ころがして
けんかして檣山行をのぼしてる
ハンドルに別れるなんて言わないで
空は晴れ飛行機雲のその先は

雲南市 渡部好榮

太陽に笑顔いっぱい薔薇は咲き
楚々と咲き散るも一人の山桜
私には正直すぎる影法師
人生は蛇行しながら丸くなる

(山根邦代・松浦登志子さんの句は43頁に掲載)

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

大 空

愛 慾

父親に詰手の本を頼まれる

畑の中父の姿のありがたし

けふの父は聞いてくれそうにも思へ

校長と意見の違ふ父をもち

くびきりにまがうかたなき父の御名

国の父に似ていて車掌きりそこね

父の死に郊外の家見つけて来

妻や待たむ靴音を高めんか

SOLOが欲しいといふ妻のうらわかく

黒髪すき下す妻に蟠りもなし

子が出来て傘の迎へが来なくなり

靴下をなげ出しぬ今日の汗かな

六畳に一ン日父としての愛

洗濯に夫の匂ひなどもせん

家賃だけ稼いで女房気が強し

妬かれてたそのころはまだ金もあり

失礼をするに子持はなれている

氣違ひじみた夫をまもり老けている

蒼空よすすくすくのびる子が五人

笑はぬ父に恩給がつき

減俸のはらいせ女房なぐられる

かし家は聳ゆ子のある方はおことはり

ひとりひとり雑誌をあたへ冬を越そ

愛染帖

新家 完司 選

浜松市 岡田 史郎
コンビ二の前で花見の勢揃い

(評) 分かりやすい場所です。駐車場も広い。おにぎりもお茶もお酒も調達できるし、トイレも貸してもらえます。まさに便利なコンビ二。

京都府 高島 啓子
脈絡もなく建っていくのっぽビル

(評) それぞれのビルは明確な意図を持って建てられているが、ビルとビルには連携も調和もなく、互いに「関係ない」顔をしている。

唐津市 井上 勝規
視野狭く白でなければ黒である

(評) 中庸を凡庸として嫌い、明確な黒白を求めたがるのが、潔癖な日本人の悪いところ。灰色の存在を偏見なく認めるのが大人。

大阪市 谷口 義
弟も時々変なことを言う

(評) 「弟も」ということは「私も」ということ。二人とも変なことを言うDNAを持つて生まれたのか、それとも老人ボケの初期?

大阪市 尾崎 ゆめ
とりあえず眼鏡の曇り拭いておく

(評) 何事を行うにしても、雑念を取り除いた公平な目が不可欠。眼鏡の曇りを拭きながらこころの曇りも拭く。それが準備運動。

池田市 上山 堅坊
どうかせにやすぐに死人の出る火災

(評) 同感! 火事のために何人か死んでいる。死者が出たからニュースになるのだろうか、あまりにも多すぎるのではないかと。

東京都 清原 悦子
交換のキーを頼りに出た漢字

(評) まことに便利なパソコン。だが、たまには「あ・か・さ・た・な・は・ま」と辞書を引かないと、考える力が弱ってくる。

枚方市 寺川 弘一
二次会で批判している一次会

(評) 先ほどまで楽しくやっていた会のことを肴にして飲み直し。で、三次会では二次会で消えた人を肴に。懲りない飲兵衛たち。

鳥取市 中宇地秀四
給付金みんなさもしく手を出した

(評) 「さもしい」と言ったり、「私は貰う」と言ったり。一国の総理たるもの、確たる信念もなく思いつきで喋ってらうては困る。

和歌山市 木本 朱夏
デイケアの人ら黙ってぼける
除菌して味も素気もない人だ

豊橋市 藤田 千休
カタカナの題に句箋も横になり

極悪になれずちよい悪にもなれず
びつくり水差され夫婦の仲直り
八尾市 高杉 千歩

お彼岸に三日遅れて墓参り
ドライブで大阪中を見回す
松江市 津川 紫晃

春が来た冬に忘れた笑い連れ
時間より得たもの多い立ち話
奈良県 渡辺 富子

花吹雪ふる里の母もういない
逆転も晩成もなく缶チューハイ
大阪市 岩崎 公誠

グーグルに地獄の地図は出てこない
ダイエツトついでに脳も痩せてきた
東かがわ市 川崎ひかり

スキップするとまたまたけつまずく
図書館でゆっくり昼寝して帰る
今治市 渡邊伊津志

書に触れず墨の彩など褒めてくれ
真実がよく見えて来た大不況
高知市 松尾 憲子

逢いたいと思えば逢える距離にいる
恋かしら真夜中になふと思ひ出す
香南市 桑名 孝雄

給付金アレアレみんな素直な子
天からのお召し赤紙待つ如し

大阪府 高木 道子
ひらがなでお喋りしたいさくら咲く

鳥取市 岸本 孝子
出不精も桜だけには腰上げる

岸和田市 井伊 東吉
吊るされた句を肴にし花見酒

大阪市 津村志華子
幸せをつくづく思う花の下

交野市 山川日出子
ひらひらとゆめを見ながら散るさくら

大阪市 坂 裕之
人格を磨くチャンスにする不況
通学路眠い子たちの多いこと

八王子市 播本 充子
使わない物も買わせる新学期
好スコア鳥のさえずり風の音

弘前市 高瀬 霜石
首相にも求められてる心技体
美味ければいい本家でも元祖でも

橿原市 居谷真理子
煮え滾りやがてやさしい白湯になる
手を抜いた花も小さく咲いてくれ

枚方市 海老池 洋
動物はみんな手ぶらで歩いてる
幸せな暮らしの下に活断層

寝屋川市 籠島 恵子
食べず嫌いに添って頑固になりました
アホらしい喧嘩になってプチ家出

海南市 三宅 保州
何もかも生きていればの話です

西宮市 牧瀬富喜子
子の降りる駅それとなく見て通過

吹田市 穴吹 尚士
古稀からは僕の第三反抗期

鳥取県 石谷美恵子
何ひとつ変らず私だけ老いる

大阪府 初山 隆盛
いざという貯金にいざが多すぎる

大阪府 畑中 節子
蚕豆の花紫のひとりごと
花冷えの足湯に並ぶ膝頭

寝屋川市 森 茜
おっぱねさまにベットの猫がままならず
スロースローどっこいしよと自愛する

宇都市 平田 実男
納棺の日までが助走路かも知れぬ
ひれ伏したところは妻子へ見せられぬ

香芝市 大内 朝子
春風にふわり理性も油断する
ツンツンと持病顔出す木の芽どき

堺市 羽田野洋介
見られてる時はムリして空元氣
空気なら眼鏡なしでもまだ読める

尼崎市 春城 年代
長い橋渡って来ました花の下
欠伸して涙溢れただけのこと

大阪市 古今堂蕉子
割り勘が合わぬと幹事はやいてる
養殖の鯛を養殖海老で釣る

三田市 堀 正和
お守りも新車も褪せる十年目
大根に賞味期限は書いてない

米子市 政岡日枝子
哀しさよ孫の知識が上をいく
目立たぬようにボヤを消してる門の内

泉佐野市 稲葉 洋
給付金元々僕の年貢じゃよ
きみまるの椰揄を笑っている自虐

美作市 山本 玉恵
花は咲くたつたひとりの深呼吸
かたくなに守って来ても散る命

鳥取市 岸本 宏章
牛でさえ逃げたら負けと知っている
派遣工も宝とされたときがある

大阪市 大川 桃花
お笑いを目指すバイトの子にエール
花咲いた新酒が出たと老母の文

西宮市 藤本 直
この時が大事と思う五月晴れ
妻は留守特にすること見つからず

八尾市 村上ミツ子
花粉症マスク美人のお通りだ
ない時の始末は誰にでもできる

奈良市 矢野 良一

ウオーキング桜見がてら墓参り
給付金老後のために貯めておく

鳥取市 永原 昌鼓

ゴミ拾いルール違反の尻拭い
孫の言う事は素直に聴ける耳

鳥取市 中岡 香代

頭張らず過こす日もあり春つらら

岸和田市 谷川 勇治

金婚に夫婦善哉食べに行こ

豊中市 山本 半銭

神棚へ丁度納まるワンカップ

堺市 小林 わこ

つい行列に並びなくなる雀たち

枚方市 小谷 集一

シャッターを切った時から過去になる

大阪市 丹後屋 肇

肩を抱くスナップ写真セピア色

枚方市 玉置 当代

軽装になっても腰は重いまま

和歌山市 土橋 螢

損得は勘定しない米つくる

鳥取市 黒崎美紗子

嬉しくて人前なのにハグしちゃう

加東市 太田 昭

ハグのまま過ぎた女を考える

吹田市 小谷 小雪

はやはやの光を浴びてストレッツ

鳥取県 斉尾くにこ

朝の陽に洗浄されてウオーキング

唐津市 市丸 晴翠

割烹着の祖母の煮しめは五つ星

和歌山市 磯部 義雄

靴底が語るセールスマンの道

藤井寺市 高田美代子

気にせずにおこうもうすぐ日が暮れる

松江市 三島 淞丘

門限をたまに守れば妻は留守

和歌山市 上地登美代

働いてはたらいで今寝たつきり

鳥取県 細田 裕花

跳び跳ねて病の素を振り落とす

岩出市 村中 悦男

親戚に医者が必要だと臥す毎に

大阪府 米澤 俣子

何着てもライン太目の不恰好

米子市 小塩智加恵

お祝いの春だ筆持ち練習中

唐津市 岩崎 實

重ね着が重たくなって春彼岸

東京都 岸野あやめ

掛け損でよかった介護保険料

鳥取県 竹信 昭彦

オートマで退化していく左足

鳥取県 安藤寿美子

ミサイルもサギもカラスも飛翔体

藤井寺市 鈴木いさお

戒名の母仏壇に凜と在り

大阪市 柴本ばつは

急ぐことなんにもないわ卒寿です

富田林市 大橋 鐘造

どん底で手と手つないで来た絆

倉敷市 撰 喜子

草取りに老人力を見直され

鳥取県 加賀田志延

華やいだ風に寒さの混じる春

美作市 小林 妻子

連休へお米の欲しいのが帰る

寝屋川市 富山ルイ子

花吹雪友の面影遠くなる

吹田市 早泉 早人

春眠に僕の時計も遅れがち

シドニー 坂上のり子

土俵際の踏ん張り見てる足力む

堺市 加島 由一

娑婆つけのある坊さんで株もやる

加西市 金川 宣子

格安のブランいっぱい旅誘う

札幌市 三浦 強一

デバ地下の妻をケータイで探す

河内長野市 針生 和代

待合室自慢しあっている痛み

河内長野市 村上 直樹

試供品マニアの妻の太い腕

西宮市 片山 忠
必要な金を出さぬとケチである

和泉市 西岡 洛酔
雑踏にもまれて知った人の欲

芦屋市 黒田 能子
粗品欲しくてポイントをためてゐる

神戸市 山口 光久
わたくしの鮮度を保つ発泡酒

倉吉市 山中 康子
歳のせい病気のせいと逃げまわる

明石市 桃谷 和郎
葦だから要らぬことまで考える

堺市 近藤 治子
夫逝き寸前消えたフルムーン

高槻市 乙倉 武史
ソマリアまで今桃太郎鬼退治

神戸市 山田婦美子
窓越しに花見の出来るエコ暮らし

八尾市 吉村 一風
裏方が似合うと妻に言われてる

鳥取県 西谷 悦子
糸へ針通すこの歳なつて知る

大阪市 太田としお
坪庭に馬鈴薯植える寒い世に

池田市 栗田 久子
あわてない今のわたしは老いの匂

羽曳野市 森下 一知
脇道のノイズが誘う好奇心

倉吉市 松本よしえ
蒜山の宿で野蒜を思い出す

富田林市 中井 アキ
巣つくり木に木の戸袋が狙われる

三田市 福田 好文
羞恥心酒で薄めて持つマイク

寝屋川市 平松かずみ
金バッジ集めて白く洗いたい

姫路市 古川 奮水
日溜りで特売品の噂する

倉吉市 野口 節子
塩漬けの株が重たくのしかかる

大洲市 中居 善信
ライバルは寢業が得意酒が好き

紀の川市 宇野 幹子
ふつつつと燃えるものあり爪を塗る

大阪市 井丸 昌紀
建前を脱ぎ捨て向かう三次会

橿原市 安土 理恵
後悔をしない程度におつきあい

堺市 村上 玄也
流暢は冷たく訥弁は温し

鳥取県 山下 節子
やけくそを宥める薬酒らしい

和歌山市 喜田 准一
物忘れ責め合っている古稀半ば

藤井寺市 鴨谷瑞美子
ナビの言う道を走ると遠まわり

大阪市 奥村 五月
酒はしこ止めて今では医者梯子

神戸市 田中 章子
わたくしもたまにはノーと言いますよ

三田市 石原 歳子
草笛の達人囲むランドセル

紀の川市 辻内 次根
朝寝坊すると体重増えてくる

高知市 小川てるみ
外食を嫌う夫へワンパターン

羽曳野市 吉村久仁雄
還暦を独り祝つてはやす髭

高槻市 安田 忠子
薬止め自然治癒力ためしてる

鳥取市 富田 美義
痛い目も糧とし人の顔ができ

西川 和子
しゃんしゃんしゃん豊作を乞ふ鈴の音

弘前市 相馬 銀波
論点の整理議長の間に期待

阿波市 三浦千津子
横文字と新語の海を立ち泳ぎ

堺市 大隅 克博
お留守番おやつの下のメモを読む

和歌山県 森下よりこ
内視鏡検査に娘付いてくる

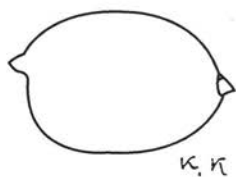
大阪府 澤田 和重
勧誘の電話子供になつて出る

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

投句数 698句



「ゼロ」 高瀬霜石選

ゼロ戦に乗った夢からまた覚めぬ
核ゼロを叫び続けているドーム
渡し賃払えばみんな0になる
好きな服ゼロを数えてあきらめる
税金がゼロになったと目が覚める
ゼロ行進女神も固唾呑んでいる
シードされゼロからよりも重くなり
質上げのゼロにだんまる労働歌
ゼロ歳がにつこり魔法かけてくる
戦争がゼロなんてこと夢ですか
ゼロ歳の頃人はみな天使です
億兆のゼロを数えてなんとする
原点にもどしてくれる桜花
結果ゼロでも得たものはちゃんとある
仲直りしたけどゼロに戻れない

鳥取市	土橋 螢	鳥取市	森下 一知	鳥取市	羽曳野市	西谷 悦子	鳥取市	藤井 正雄	茨木市	神戸市	鳥取市	宇部市	平田 実男	鳥取市	中宇地秀四	有沢せつ子	早川 孝子	西谷 悦子	森下 一知	平木 公子	堤 櫨代	根田よしこ	高杉 千歩	緒方美津子	原田すみ子	朝子
-----	------	-----	-------	-----	------	-------	-----	-------	-----	-----	-----	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	----

「ゼロ」 本 本 朱 夏 選

戦争がゼロなんてこと夢ですか
核ゼロの魔法の杖が見つからぬ
ゼロ戦のない世に生きてメタボです
質上げのゼロにだんまる労働歌
ゼロからの苦勞知ってる花の種
ゼロ六つ小さな保険満期くる
ゼロの数斜めに読んでいる暮し
意気込みが違うゼロから出発だ
マイナスの中で気を吐くゼロの価値
減点法もうゼロになるあわてます
生意気なゼロがでーんと真ん中
気を変えてゼロほど強いものはない
くれる子を正しいゼロに連れ戻す
チャンスゼロきれいなままのユニホーム
年金のくらし外食なしにする

岸和田市	堤 櫨代	岸和田市	羽曳野市	森下 一知	米子市	小塩智加恵	三田市	久保田千代	吉田 幸子	高橋 保雄	黒崎美紗子	岩崎 公誠	水谷 正子	大堀 大朗	萩原 時雄	奥 時雄	中上千代子
------	------	------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------

視界ゼロ勇者の勘が冴えてくる
年金のくらし外食なしにする

ゼロ歳児 背中にネジがあるらしい

ゼロ線のホームに隠れてる刺客

プロボーズ預金借金ないですか

核ゼロの魔法の杖が見つからぬ

ゼロ戦のない世に生きてメタボです

そうなんだある日わたしも風になる

ゴハサンデネガイイマシテハ新年度

000ずらり並べて光る石

こんなにも疲れていたか顔が無い

0金利これは確かにマンガだね

ゼロいくつ足せばセレブになれますか

温度差を無くして君に従いてゆく

四捨五入すると私はゼロになる

ゼロの恐怖まだ味わったことが無い

根気よくゼロを数えている静寂

シャワー全開0の気分にしてくれる

まっさらなゼロにわたしが試される

ゼロメートル地帯でコント繰り返す

万歩計ゼロにしてから床につく

偶数月ゼロの通帳息をする

八王子市 播本 充子

加東市 中上千代子

三田市 上垣キヨミ

鳥取県 大塚美代子

西脇市 七反田順子

大阪市 升成 好

三田市 臼井 一英

東京都 岸野あやめ

松江市 三島 淞丘

藤井寺市 吉田喜代子

大阪市 笠嶋 恵美

大洲市 中居 善信

河内長野市 針生 和代

富田林市 中井 アキ

吹田市 穴吹 尚士

吹田市 太田 昭

西宮市 吉井菜々子

寝屋川市 太田とし子

生駒市 飛永ふりこ

和歌山市 古久保和子

東京都 清原 悦子

鳥取市 岸本 孝子

西宮市 足立 茂

年金は私がゼロでない証

パソコンがなければ僕はゼロになる

事故はゼロ旗をかけた事故現場

釣果ゼロ帰りは魚屋に寄るか

答案のゼロ見せに来た蛙の子

零点なら僕もと龍馬手を上げる

零点を取って確信犯となる

いつだってゼロに戻る削除キー

そうなんだある日わたしも風になる

残高ゼロ破れかぶれの宝くじ

ゼロ一つ違う話で聞き流す

残高ゼロだがカード持っている

0金利これは確かにマンガだね

ゼロ金利金庫代わりに使ってる

ゼロ一つ足らずに君を諦めた

ぎりぎりの縄張りゼロの風紡ぐ

シャワー全開ゼロの気分にしてくれる

老いふたりどちら引いてもゼロになる

見返りはゼロでもわたくしの仕事

妻は翔び僕の範疇ゼロ三つ

在庫ゼロ夢の欠片を仕込み中

ゼロメートル地帯でコント繰り返す

桜の下プلاميゼロで終わりたい

大阪市 小谷 集一

池田市 上山 堅坊

京都市 榎本 宏子

札幌市 三浦 強一

唐津市 樋口 輝夫

香南市 桑名 孝雄

大阪市 森田 明子

大阪市 尾崎 ゆめ

東京都 岸野あやめ

橋本市 石田 隆彦

和歌山市 喜田 准一

堺市 村上 玄也

大洲市 中居 善信

河内長野市 黒岩 靖博

藤井寺市 太田扶美代

鳥取市 平尾 菜美

寝屋川市 太田とし子

羽曳野市 吉川 寿美

藤井寺市 高田美代子

西宮市 緒方美津子

和歌山市 亀岡 哲子

生駒市 古久保和子

飛永ふりこ

視界ゼロへ先ず給付金撒いてみる
 ゼロという数字あまりに重すぎる
 小さなちやぶ台でスタートした二人
 ゼロ六つ小さな保険満期くる
 見返りはゼロでもわたくしの仕事
 ガラクタの整理をするとももない
 人生の器がちがう煙草の輪
 出直してみます0番線ホーム
 校門をゼロの地点として歩む
 吸いだめをしとこ空気はまだ無料
 ゼロにしてやり直そうよわたくしと
 逢えた日はストレスいつも消えている
 恋文にゼロ回答の矢が刺さる
 丸裸でもわたしを抱いてくれますか
 零戦の前で動かぬ人がいる
 連らなつてゼロはずしんと重くなる
 ユーモアの分らぬ人と住んですす
 転がして見てもゼロには影が無い
 今死んでいった誰が困るだろう

秀句

鳥取市	岸本 宏章
鳥取市	田村 邦昭
高槻市	指宿千枝子
米子市	小塩智加恵
藤井寺市	高田美代子
三田市	堀 正和
大阪市	吉田 富美
海南市	三宅 保州
弘前市	斉藤 荔
堺市	志田 千代
橿原市	安土 理恵
吹田市	大谷 篤子
豊橋市	藤田 千休
鳥根県	伊藤 寿美
西宮市	牧渕富喜子
羽曳野市	徳山みつこ
三田市	北野 哲男
枚方市	寺川 弘一
池田市	上山 堅坊
橿原市	居谷真理子
松山市	高橋 宏臣
弘前市	櫻庭 順風

ゼロからの二人三脚ヨイドン
 出直してみます0番線ホーム
 へその緒が知つての僕のゼロ歳記
 育児検診ゼロ歳からのサバイバル
 ゼロ歳児背中にネジがあるらしい
 ゼロ行進女神も固唾呑んでいる
 視界ゼロ電車の中で打つメール
 人格がゼロで居座る高い椅子
 ゼロ番地ここにも居ったボヘミアン
 右脳が底ついたから酒を足す
 らりるれろゼロになるまで呑むつもり
 脳みそのメーターはゼロ眠ります
 眠つての間はゼロになりましょう
 ゼロひとつ加えてしこり深くなる
 焼け跡に育つてゼロは怖くない
 もうゼロに戻れはしないラムネ玉
 転がして見てもゼロには影が無い
 ゼロで生まれ加減乗除をくり返す
 ゼロで生まれてまた人間に化けるのか

秀句

枚方市	小林 わこ
海南市	三宅 保州
岐阜市	平野あずま
奈良市	米田 恭昌
三田市	上垣キヨミ
茨木市	藤井 正雄
大阪府	神野千恵子
黒石市	相馬 一花
美作市	小林 妻子
四條畷市	吉岡 修
雲南市	菅田かつ子
豊中市	安藤寿美子
橿原市	居谷真理子
青森県	松山 芳生
吹田市	穴吹 尚士
弘前市	斉藤 荔
枚方市	寺川 弘一
京都市	清水 英旺
米子市	政岡日枝子
松山市	高橋 宏臣
和歌山市	武本 碧
京都市	高島 啓子

父を語る

(順 不 同)

祇園夜話

都 倉 求 芽

祇園小唄で有名な長田幹彦の小説のなかに「祇園夜話」というのがある。京の五条烏丸に呉服卸問屋を営む五代目若旦那、戸田。父を早く亡くし若くして店を継いだ戸田は店を番頭たちに任せ、自分は毎夜祇園で豪遊する。そのうえ相場に手を出し、あつという間に家は崩壊する。昭和初期の大恐慌のころの事。その戸田のモデルが私の父である。私があるの心ついたぐらいの時らしい。母はその父を反面教師として耳にタコが出来るほど酒、女、相場は絶対手を出さな、とやかましく言った。店をたたんで小さな借家に移ってから父

は酒と相場がやめられなかった。少しのことでもキレる父は母に手や足をかけた。六歳上の姉は未だに「五条の家」を口にするが、四歳違ふ次の姉はひと言も口にしない。もち論私は小さかったので断片的に店構え、ガラン堂になった店の間や土蔵の前での水遊びぐらいがおぼろげに残っている程度。学校へ行ってもそんな父がイヤで、授業が終わってから暗くなるまで学校で遊んでいて帰らなかった。すると父はまたそれを母になじむのだった。そんな母を見てきた私は、絶対嫁さんは泣かさないとい心に決めていた。

呉服卸をたたんだ後、悉皆業をするようになった父は以前、大きな顔をして遊んだ町へ悉皆(着物などの染め直し、洗い張りなどの仲介)の仕事を探しに行った。立場が全く逆転した訳である。自分が蒔いた種とはいえ、その無念をぶちまけるのは家しかなかったの

だ……。大人になって少し父のことがわかる気がしてきた。

その「祇園夜話」の本だがケース入りの粹な装丁で、なぜかある日、目にとまる所に一冊置いてあった。小学校五、六年のころかと思う。なにこれ？と思いがら一気に読んでしまった。あまりに家と一致したので、母に聞くとやはり家のこと、と言う。そして不思議なことに翌日はもうどこにもなかった。

父、寡黙な明治人

水 野 黒 兔

父の祖父、名前は丈衛門、生没年不詳、職業不詳。父の父、名前は徳藏、生没年不詳、豊職人。父明男、明治四十年十月生まれ、陶磁器卸商であった。つまり私の曾祖父や祖父についてはこれだけしかわからない。父が元氣であった頃にもっといろいろ我が家のルーツについて聞いておけばよかったのにと悔やまれるが、今の父は耳も遠く、言語もかなり不明瞭で、家系を改めて父から聞き取ることにはもはやできない。

岐阜県を南北に分けて美濃と飛騨、美濃を

東西に分けて東濃と西濃。東濃地方は織部焼、志野焼の昔から今に至るまで美濃焼と呼ばれる陶器、磁器の生産地であった。この東濃に生まれ育った父は尋常小学校を終えると陶器商に丁稚奉公し、やがて独立、主として長野県や新潟県の陶磁器小売店向けへの美濃焼を卸す仕事を生涯の生業とした。注文を受けた商品を新潟や長野へ発送するために稲葉を利用して梱包するのであるが、重くて割れやすい陶磁器を扱うだけに非常に力と技術を要する作業で、汗と埃にまみれながらもくもくと梱包をする父の姿が今も目に浮かぶ。

仕事一途の父ではあったが、弓道が趣味のひとつで、五段の免状を取得した。他に愛知県や岐阜県などの東海地方で狂俳と称するもの（これは関西で冠句と称する文芸とほとんど同じである）を少しばかりやった。

しかしなんといつても父の生涯の楽しみは日本酒であった。大酒のみではないがとにかく酒好きなのである。昨年暮れに肺炎で入院し生死の境をさまよったが、退院したらまた酒が飲めるよとの周囲の声に励まされたのが効いたのか、三週間ほどの点滴を含めた一ヶ月半余りの入院の後やっと退院した。現在百一歳と五カ月、父よ、残る日々を存分に飲んで暮らすがいい。

優しい娘になれなくて

森 田 明 子

結婚後、初めて実家へ帰った日。「お父さんがあんなのこと書いて入選しはったんですよ」、母が嬉しそうに新聞を持ってきた。

——嫁ぐ娘の購入くれしネクタイを派手と思えど口には出さず——

地方紙の歌壇の一席に、「父の心情があらわれている」というような評が載っていた。

しかし、私には最近、父にネクタイを贈った記憶はなかった。「嘘ばかり」と抗議する私に父は、「昔、くれたことあるやんか。まあ、ちよつと脚色したんや」と、照れくさそうに笑った。

父は、定年まで勤め上げた公務員で、末娘の私がもの心ついた頃は、多忙なため、顔を合わすことも少なかった。そのせいか、いつもどこか父を他人行儀に批判的に見ていたように思う。たまに目にする父の詩歌も、何故か好きになれなかった。偽善的、感傷的、自己満足、そんな思いが渦巻いた。しかし、今思えば、九人の大家族を養った

めに父はどれほど、自分の欲望を抑えねばならなかったことだろう。沢山の葛藤があったに違いない。十四年前に八十七歳で床に伏すこともなく逝ったが、今なら、もっと優しい娘になれるのにと、悔やまれる。

私は三年余り前から、どういう訳か急に川柳に親しむようになったが、もし、父が知れば「まさか、おまえが？」と、きつと驚くことだろう。入選句を見れば、どんな批評が返ってきたらうか。どんな会話ができたろうか。そう思うと、微かな痛みと共に懐かしさがこみ上げる。

父の胸の内

江 見 清

昭和十七年七月、父が旅順工科大学の教官として旅順（現中国東北部）に赴任することになった。当時我が家は母と女学校の姉二人、国民学校三年の私、未就学の弟妹の七人家族だった。

ある夕食時、減多に子供達に喋ったりしい父の「旅順に行くことになったが自分独りで行く」との突然の話に、姉一人私の三人が

「どうしても一緒に行きたい」と父に一齐に訴えた。何よりも父と離れるのは大変だと思つたし、旅順は乃木大将の話で子供心には憧れの場所だったから。しかし父の返事は「この戦争は必ず負ける。満洲に連れて行つたら皆がばらばらになるか、子供等の何人かは死なせてしまうことになる。あんな大国相手に勝てるはずがない。だから独りで行く」。これを聞いて姉二人と私が「そんなことを言うお父さんは非国民や。日本は絶対に負けることはない」と父を一齐に非難したが、父はそれ以上の説明もせず黙って部屋に戻ってしまった。母は事前に父の意見に納得していたのか何も言わなかった。

間もなく父は旅順に単身で赴任した。敗戦直前には父からの送金も途絶え消息不明となつたが、昭和二十二年の二月に突然帰国した。父は昭和五十一年に亡くなるまで子供達が旅順の様子を聞いても殆ど語らなかつた。

成人になる頃まで私は、神州不滅の軍国主義思想一色の中で、父が子供達を旅順に連れて行かなかつた判断や、日本が米国等にとても勝利できないと予測して行動したのは凄かつたんだと思つてゐた。しかし戦後に発表された資料等を知ると、戦中でも常識を持つた人なら当然父のような判断をした人は非

常に多かつたはずだ、と思うようになった。言論思想弾圧下とはいえ、結局は原爆が落ち敗戦まで声を上げなかつた、特に「インテリ」の弱さを、父の中に見てしまうようになった。とはいえ、現在の私があるのも父のその時の判断のお陰とは、よく判つてゐるのだけれど……。

寡黙な父の一言

山口 光久

父を語るとき、必ず母も一緒に語らなければならぬ。両親は価値観が違ふものの一心同体のようで、夫婦喧嘩をしたことも言い争つたこともなく、周囲からは夫婦の鑑だと言われていた。ときたま母が愚痴をこぼしても、小言をならべても父はさりと受け流す。

私が三歳の頃、母が腸捻転を起こし、一刻を争う大病を患つた時の事である。父はリヤカーに母を寝かせ、久留米の病院まで十三キロほどの道程を一目散に走り通したという。手術は成功したが以前のような元気な体には戻らなかつた。こんな事があつてか、父と母は頗る仲がよく常に助け合つてゐた。

父は一徹な性格で寡黙であつた。口に出して注意をしたり怒鳴りつけたりする事はなかつた。その役は専ら母が受け持つてゐた。父の主義は口に出すのではなく「黙って俺の背中を見ておれ」、「俺の流す汗と涙をじっと見詰めてよ」の実践躬行である。

私の小学、中学時代は両親に「勉強しなさい」と言われた記憶がない。いつも両親、兄達と一家総出の野良仕事であつた。お八つは必ずあつたが、その用意は私の受け持ちである。この頃から料理に興味を持ち、手伝いをするようになった。高校時代も中間テスト、期末テストの日以外はもっぱら野良仕事、内職の手伝いの明け暮れであつた。

神戸で就職して家を出るとき、母は「体に気を付けて」と涙ぐんだが、父は「人様に後ろ指をさされる事のないように」の一言であつた。同じ職場から夜間大学に五人が行つたが、三人は県庁や市役所に転職してしまつた。私が検察官を目指したいと言つた時、母は「今の職場で頑張れ」、父は「何事も一度は挑戦してみたら」であつた。

神戸に来て二十年、やっとマイホームを手にした時、父がお祝いにやつて来た。三ヶ月ほど同居したが、相変わらず口数は少なく、帰り際にただ一言、「努力した汗は必ず実を結ぶ」と言い残して帰つた。

川柳と父

鴨谷 瑠美子

四月になると思ひ出す事がある。まだ幼いころ父とふたりで京都南座へ都おどりを見に行った。どうしてふたりだったか解らない。

家では無口だったし、大声で笑う事はなく物静かな父だった。鼻の下に細く横に長い髭をはやしていた。絶えず着物姿であつたのが印象に残っている。

川柳漬けの毎日で、赤えんぴつを持って机に向ひ考え込んでいる事が多かった。

雅号を大島無冠王、京都に住んでいたのだから北川絢一朗先生をはじめ何人かが家に来て下さつて、川柳の会をしていた。

青森の「ねぶた」、長野の「しなの」等、柳誌が来ていたので交流が深かつたようだ。

わたくしの大切にしている一冊の本がある。川柳句集『ねぶた囃子』（金枝万作編）昭和五十四年十月二十日発行である。

目次には有名な方々のお名前が並んでいる。川上三太郎、佐藤正敏、渡辺蓮夫、尾藤三柳、中村富一、橘高薫風、堀口塊人、大山

竹二、三條東洋樹、前田伍健、大島無冠王……父が立派な川柳作家の先生方と同時代に作家として活躍していたかと思うと感慨深い。

雅号の由来が書いてある。

「関西の岡島王魔辺、関東の島田雅楽王、北国に桑島虚王人、新興柳壇に活躍されていた裸馬で無冠の王者颯爽と入城 青児父」拙作が入選、早速大島無冠王と改名、剣花坊先生に「中々よい雅号に候」とお便りもあり、自来颯爽と東西の柳壇へ馬を乗り回していた」と記されている。

また時実新子先生とは、かなり親しくさせて頂いていたようで、父が亡くなった時、真つ白な大輪のお花を抱えてかけて下さり、お線香をあげていただいたことは、誠にうれしい事だった。父の人生は川柳で始まり、川柳で終わったのだと思つて居る。

父の旅

古今堂 蕉子

旅好きな父が突然長い長い旅に出てからもう十四年が経つ。

父、葉の事を知っていて下さる方も少なく

なつたが、私が川柳塔に入り思い出を聞かせて頂けるお陰で身近に父を感じられるのは本当に幸せな事である。

時代にもれず父も戦争に行き、満州で三年ある時日本に帰りたいものは一歩前へと言われ、帰りたいと言つた方が良いのか、それとも残りたいと言つた方が良いのか咄嗟の事で、大いに迷つたが、素直な心に従い一歩前に出た。それが幸運の始り、日本に帰ることができ終戦を迎えた。戦後、両親や家族のために必死に働いたのは勿論だが、総じて何事につけてよくよせず、明るい事、陽気な事、そして運の良い事。

父と母は見合いの後、二度目に会つたのが結婚の日だったという事だ。無責任な結婚で四人の子供が生まれたのだが、運の良い事に稀にみる相性の良さ。好色愛酒の父に、母もはやきつつ生涯仲の良い夫婦だった。

そしてなんとと言っても長生きして、大好きな路郎先生の川柳塔の主幹に任せられ柳友の皆様にあまれた事。この運の良さは最高だった。

三回忌の折に私が書いた小文には、父は酒好きだったに始まり、子供好き、旅行好き、歴史好き、帽子好き、食べる事が好きなどの最後に、しかし、何よりも川柳を愛し好きだった。

たて文を結んだ。

父の書架には川柳塔のバックナンバーが並び句集が並び、机の上にも、お手洗いの棚にも送られてくる柳誌があった。

飲むと言えは柳友、電話で話し、手紙を書き生涯よりも情熱をかけ愛したものが川柳であり柳友であった。

薫風先生が我家に時々お顔を出して下さった頃は中学生だった。

古い川柳塔を読む時、改めて柳友との交流の長さ深さがひしひし感ぜられ、それが父の宝だった事が分る。

平成七年五月十五日、どれほどの川柳や柳友の思い出を持って父は旅立った事だろう。

二人の父と私

酒 井 一 壺

父は和歌山県的那智の鉱山で事務をしていましたが、大正八年十二月四十三歳、胃潰瘍で突然死去しました。母と六歳の私は弟と妹の三人遺されました。父の両親は助けてくれません。母の兄の世話で三十三歳の母は三人をつれ、古里羽曳野へ帰り、学校の先生をし

て育ててくれました。

父はお酒が好きでしたので母は心配し、いつも私を用心に付いて行くよう仕向けたようでした。実父からは丈夫な体を与えられ、

「お酒」の飲み方を教えられ、「独立心」が芽生えました。伯父（育ての父）はきびしい人で、篤農家で人望もあり、広い田畑の持主でした。中学へ進んだ時、勉強は学校だけでいい、それより今は体を作る方が大切と煙の手伝いばかりで、体を徹底的に鍛えられ勉強はほとんど出来ませんでした。伯父からは「自立心」と「根性」を仕込まれ、「人間の生き方」を教えられました。

天王寺師範を卒業し多くの先輩に支えられ、教頭から指導主事を経て、大阪市小学校校長を最後に退職しました。「訪問指導員」「塾長」の後、七十三歳で一応仕事を終り孫の進学の指導もすみました。

さてこれから一人で出来ることは何か？と考え、川柳は季語もなく自分の思いを自由に表現出来自分の性に合っている。しかし我流ではだめと、すぐ毎日文化センターに入会し、薫風、鬼遊両大先生の指導を受け初めました。全く偶然の幸運でした。仲間にも恵まれ次第に調子に乗り楽しくなり、八十歳近くでとうとう川柳に嵌り込みました。

平成十二年予期もせぬ「勲五等瑞宝章」を戴きました。両先生から「いのちある句」を作れ、「川柳を楽しめ」と励まされ、今も続けています。

川柳を続けて来たお陰で元気に生活しており大変有難いことと心から感謝しております。常に感謝の心で初心忘れず、今後も「明るい夢のある句」を作る所存であります。

「いい街だ　花がたくさん咲いている」

父であり恩師

清 川 玲 子

昭和二十七年、父が教鞭をとって居る地元、三本松高校で私は青春を謳歌して居た。

二年から我が進学クラスの英語を父の指導を仰ぐことになった。気が滅入る事だし、かたがない。級友にはグチばかり言って居た。

授業第一日目、四十名の教室は表面静けさを装おっているが、父娘の様子を一分も見逃がすまいとの空気が可笑しいほど感じられた。

英文法の授業は平静そのもので流れていたが、父先生のまさかと思う英訳せよとの私への指名「ミス河野（私の旧姓）」がとんでき

た。すぐ起立し、正しい答弁に「やつぱり僕の娘や」と父。この一言に教室は一気に盛り上がった。

それからの授業は終業ベルをひたすら待つばかり。帰宅後、父を責めると「一生徒へ指名するのがどが悪いんや」。父娘のやりとりを母は父の着替えを手伝いながら笑ってはかり。期末の成績は私の実力相応の点だった。

思えば希望校進学も可能だったのに、中学生時代のあの勉学への意欲は消えていた。

教務主任である父は、さぞ肩身が狭かったであろう。六十九歳で旅立った父の通夜、大勢の先生方のなかで特に親交の篤かったE先生から、生前父がどれほど私を慈しんでいたか、私の初潮があったのを祝ってほしいとみんなで乾杯したことなど……。私のはじめて耳にすることはかり話して下さった。二児の母になっていた私の胸には応えることばかり……。

義兄の援助で大阪外大に学び、乗馬部でも活躍していたらしいが、人一倍の苦節の学生時代を過ごした父。酒をこよなく愛し、マージャンも、海釣りも、父自身でつけた渾名「いける」どおり、人生を楽しみ、人との交流を大切に生きた明治男の父。現在、心静かな老境を歩んでいる私達夫婦に、きつと父は安堵

してくれているだろう。不勉強だった学生時代も現在はなつかしい思い出になっている。春爛漫の四月、父の命日が巡ってくる。

父の思いやり

岡 本 久 峰

私の父は山紫水明の地、山城、大和、河内の三国峠の河内側に生まれている。明治二十一年に南家の二男として誕生した父はその後、岡本家の一人娘ナツと養子縁組みをしている。生来いかつい顔の父の笑顔は見たこともなかった。しかし気は優しく、当時忌み嫌われていた肺病患者が死亡すると進んで納棺を手伝い、村人に慕われていた。何分肺病患者が死亡すると、体内の結核菌がゾロゾロ這い出てくる、と身内でも近づかなかった。

さて今なお忘れることのできないのが真夏の深夜、私は「隣の京田辺の兄の許に風呂敷包みを届けてこい」と命令されて思わず身が凍んだ。何分高等科二年で十五歳である。しかしノーとは言えない、母が助け船を出してくれると思ったがニヤニヤしている。止むを得ない。

当時、田辺の峠には追い剥きが夜な夜な通行人を襲った、つい先日村のお坊さんが身ぐるみ剥がれている。夜は深深と更けて物音一つしない。恐ろしくて走れない。トボトボと峠を越えるが追い剥きや、大蛇が出そうで無気味極まりない。やつと兄宅に着くや兄嫁が「こ苦労さん」と障子を閉めてとりつく島もない。再び元来た道を草履ばきで歩く。途中に大きな溜池があつて夜目にも無気味である。往復八里の道程をようやく無事わが家に辿りつくと、母が「こ苦労さん」と労わってくれたものの、震えが止まらなかった。

獅子はわが子を千仞の谷に落とすと言う、せめてもの父の思いやりであつたらうか。

父のひとこと

富 田 蘭 水

私の父は、生涯農業を愛し頑健な体の持主で八十三歳でこの世を去った。私は兄姉と十歳以上も離れた末子で育ち、そのためか随分かわいがられ一人子の如く育てられて来た。その父は日露戦争で兄が戦死し、弟の父が家を継いだ事を、後年私が成人してから知った。

若い時は村会議員もし、生涯、中産階級の農村地主であった。子供の頃、毎年春、荷馬車に数台何十俵の米俵を町に売り出す姿を今でもはっきり覚えてゐる。戦後の農地改革令までは、隣村にも田を持っていたのは良く知っていたものである。

父の特色は農に生きた関係からか「牛」が大好きで馬喰でなく、趣味で県内で牛市がたつと一人で行って、仔牛を買って帰り育てた。牛を一時間位じっと黙って観察している様は、他から見ると異様な姿であった。

一方信仰心厚く、寺社参りは毎月欠かさず、長男の召集出征の第二次大戦中は、武運長久生存を願掛け、幼時の私もお供に随分つきあわされた事も懐かしい思い出である。

私が軍隊から復員、当時、島根青年師範(現島根大学)に合格、マ司令部の軍学徒一割制限でやっと入学が許可された時、「今度の学校は勉強が難しいか、難儀なら止めてもいいぞ」と一言簡単に言つた。この言葉が私の人生、生涯を変えて来た。「何くそ、どんな苦境も乗り切つてやる」との思いで青年師範はもとより東京の旧制大学をも卒業した。生涯この時の父の言葉が心の支えとなり、金言であつた。有難い心に一生涯刻んでいる。今は亡き父の昭和二十一年の混沌世相時の一幕である。

厳しさの中にも大らかさを持つ愛を私にくれた父、教員になつた私を大変喜んでくれた。せめてもの孝行であつた。

遺影をみると、大好きな地酒を嗜む父の姿が、「お前も一杯やれ」「しつかりやれよ」と私の心をたえず叱咤激励するのである。

牛のよだれ

富田 美 義

父は戦艦大和を造つた呉の軍港を守る砲台兵役であつた。任務の合間に小さな手帳に戦時を詠つた俳句か川柳の五七五を作つて居たらしい。

呉には戦時中に面会に行つた事もあるが、四・五歳の頃で壊れた塀の隙間から覗き憲兵に叱られたこと以外記憶に無い。父没後遺品をそれとなく整理したが見当らず。

実弟に聞いた敗戦の日に至て消却したと後日談。従つて中身は何であつたかいまだ謎であり、父の真の目的も分からないままである。この歳になつて当時父が何を考え、何を託そうとしていたのか大いに興味があるが。

話変わつて、弱輩者には分不相応なれど夫

婦句集を出し父「十三回忌の墓前に供えたい」と思つてゐる。

タイトルは『二人三脚』。脳トレ用に朝日新聞やNHKに夫婦で投句にした句が三百になつたのを機に、また古希の証の意味もある。父は無口であつたが幼少の頃、草花を育てるには三年、山木は三十年、人を育てるには百年。また明治人間は牛蒡、大正生まれは白菜、昭和生まれはバセリ人間と言つていたのを覚えている。

今この歳になつてその意味が分かつつある。在職中もコンピュータを分かり易く経営者層に説明するため、端的な川柳を用い定年後ゴルフからの転向川柳となつた。そして川柳を通じ不易流行を感じながら「川柳を愛し遊ばれ時刻む」に父をダブらせながら、日夜駄作に余生を燃やしてゐる。

散り際のレシビを見せた父の背な

父の教え

堂上泰女

六十八歳で逝つた父は、一言で言えば厳父でした。

明治生まれで、師範学校卒業、剣道有段者

と言えは厳格さも中途半端でない。いつも、教育勸語を聞かされ、「汝の欲するところを人に施せ」とか「左の頬を打たれたら右の頬を出せ」とか聞かされて、反発心を抱きながらも、御蔭でいつも誠実な良い友人に大切に接してもらって来ました。これは人生の宝物と思つています。

時々、抜き打ちの試験をしては怒られていましたが、これも子供への愛情故であつたのでしよう。子供に何も言わない主人を見ては、父の怒つてくれた熱意に感謝する今日この頃です。

最近思う事は、自分も大切にする事、であるがこれは父には教わらなかつたが、自分で学習してきました。他人を思いやる事を教えてくれた父に、私の学んだ、自分も大切にする事を二本柱に子供達に、接している毎日です。

最後に、表面は父の一途さに反発してきた私も、父の死は涙ながらに看取つた事、そして今、一番父らしくなっている自分に気付いて苦笑しています。ただただ、厳格でバランスを欠いた面もありましたが修正して生きていくのが、私の人生だと思ひ、父に感謝して供養のつもりで書きました。父は死後だんだんに私の中へ、よみがえつてきます。

父のステッキ

米澤 俣子

或る日、父は守口の駅で出遭つた親子四人を連れて帰つて来た。行き先のない家族だつた。一週間ほど家に置き小遣いまで持たせ、帰らせた。これは私が生まれて間もない頃のこと、後に母から聞かされた。そんなこんなで「人の好いのも程々や」と母はよくこぼしていた。

その頃は羽振りも良く、外では仏のような人と言われたらしいが、家の中ではとても厳しい存在だつた。靴の脱ぎ方一つでも悪いと縁の下へ放りこまれたこともあつて、きちんと揃えて脱がなかつたことに気付かされた。「お前の躰が悪い」と母に当たつていたのを目にしたこともある。

母は父に敬語で話したので、自然に私達子供も父には敬語で話しかけるのが当たり前と思つていた。父に頼むことがある時は、母を通じて言うていたように記憶している。今頃の父親のように一緒に遊んだ思い出は少ない。私が小学生の頃、毎年元旦にはモーニング

で檀原神宮に参拝していたのを、今思い出した。間違つたことは大嫌い、明治生まれの生一本の人だつた。この父も私が嫁ぐ前の日に挨拶（当日は泣けたら困る）をしたら「十分なことは出来なかつたがつかう時は帰つて来い」と父らしくもないことを言うてくれたのを憶えている。

晩年は病氣勝ちで七十四歳で腸閉塞の手術も受けながら八十四歳の天寿を全うした。厳しかった父に教えられたことは私の中に血となり肉となり、感謝している。父の愛用のステッキが遠い日を思い出させてくれる。父の日が来ると私はこのステッキを磨くことにしている。

ステッキに父の温もり今もなお

父の入院

飛 永 ぶりこ

動脈瘤、再生不良性貧血、心臓等、父は、その時五度目の入院をした。いつもは個室か二人部屋だが、全部塞がっている、六人部屋に入るのは始めてである。父は気難しいので、何も起こらなければと案じていた。

看護師さんに、六人部屋へ案内され「今日から入院しましたので、よろしく願います」と父と二人で挨拶をした。父のベッドは私が通るのがやつとで、これまでは広い部屋ばかりだったので、思わず「狭すぎて通るのもしんどいわ」と口から出てしまった。隣のベッドの人が後向きに座っていたが、急に私の方に向きを変えて「そろそろや、六人部屋やから狭いんや何言うとんや」と、ちょい悪どころか、入れ墨でも浮き上がりそうな若い男が、大声を上げた。

えらいこつちゃ。父が私を庇おうと、間髪を容れずに「なんやて若造のくせに、ついきつき、よろしく願いますと挨拶をした時に、知らん顔をしたわな、常識も弁えんと、その物の言い方は何や」と、大声で睨む。響き渡ったのだろうか、隣の部屋から兄貴分らしい男が、走って入ってくる。「なんやて、大きな声出して、爺い、今日入ってきたばかりやろ、つべこべ言うな、おまえなんか、いでもたるさかい」と、ベッドを力いっぱい揺らし始めた。父は平然として「やれるもんなら、やってみい」と一歩も引かない。看護師長さんが飛んで来る。「あんたら、ここをどこやと思ってるの、病院やで何考えてんの」と一喝されて、二人の男は急におとなしくなってしまうた。

明くる日、エレベーターで兄貴分と弟分の二人と出くわす。私はドキドキしながら、「昨日は、父が大声を出してしまつて、すいませんでした。兄貴分の人が「いや、お父さんはこの病院は、始めてじゃなかったんだすな、何回も入院してはるのに、全然知らなかったの、つい大声を出してしまつて、悪かったのは、こつちゃ」といやに低姿勢である。父のやんちゃで気難しいところが、病院中で響いていたのだろう。

遺影の父は入院中のことなぞ、忘れたかのように、笑みを湛えている。

弱いもの相手に

勝って楽しいか

播 本 充 子

私は父に叱られた記憶が全くない。然りとて特に褒められたり甘やかされたりした覚えもなし。痩身、面長で、そう、当時の人気アナウンサー、高橋圭三氏のイメーজ。三人の子供に野球や卓球、水泳を教え、グライダーや凧、はてはミニチュアの山車なども創る器用さをもった父は私を「みつちゃん」「みつちゃん」と呼んでいた。

時は流れて平成九年、かつしか吟社の句会

でこの「みつちゃん」を耳にした。声の主は伊藤正紀先生、魔法のカバンから次々貴重な資料を取り出して、中尾深介を、動詞の作句方法を京成電車の中で教えて頂いた。この頃だったか、「おい充子、弱い者相手に勝つてそんなにうれしか」突然の怒声？。竹本瓢太郎先生だった。当時私は、月に三カ所の先生の教室で勉強中。柳友にS吟社の課題吟ベスト10に入れたとうれしそうに（多分）話していた。えっなんで？必死に頑張った結果なのに・・・加えて、「こんな手抜きした句を出すな、今すぐ創り直せ」と雑詠を叩き返されてしまった。その日の多摩川柳教室は凍りついた。

平成十年、竹本瓢太郎先生の「ご意向を伺い、川柳塔社同人に」（推薦人、橋高薫風先生、菱田満秋氏）平成十六年二月二十八日、橋高薫風先生ご臨席の上、川柳塔のぞみ設立（世話人、一年後から代表に）橋高薫風先生の強力なパワーを戴き、平成二十一年四月二十八日、川柳塔のぞみ五周年記念「一見川柳社との親善句会開催の運びに。（於 日光東照宮見陽苑葵の間）。

最近、もしかして、私ってファザコンなのかと思う。竹本瓢太郎先生、伊藤正紀先生、橋高薫風先生・・・川柳で出会った先生方は皆さま痩身、面長でイメージはそのまま実父

に重なる。あらら、不二一の吉本瘦児氏、番傘の五十嵐修氏も瘦身、面長。ああ、潜在意識って怖いこと、恐いこと。

「君は……」

木 本 朱 夏

一合では多いと二合飲んで寝る

村田周魚の作品であるが、清廉高潔、人品骨柄卑しからざる殿方でも、こと酒に関してはみみっちくなる酒飲みの心理を見事についた川柳である。

父は亡くなる一週間前まで晩酌を欠かさなかった。お燗をつける私の手元をじっと見つめながら「文子、お前はケチやなあ」と嘆息したものである。私の量る二合が父には納得いかなかったであろう。

父は酔うと説教魔に変身した。「そこへ座れ」と正座をさせられる。「君はこのことをどう思うのか……」普段の父の言葉ではない。「君は……」が始まると私は覚悟を決めた。少なくとも二十分は聞いているふりをする。

「テレビを見ると馬鹿になる」「胸の開いた服を着てはいけない」「白いタイトスカートを穿いてはいけない」「歌謡曲は聴くな」

云々。たつた一人授かった男の子を亡くし生涯、娘しか持たなかった父には寂しい晩酌であつたろう。「お前が男だつたらなあ……」と飲みながら、呟いていたことを今も憶いだす。

父は義侠心の強い人であつたが、忘れられない強烈な思い出がある。戦後もない夏のある日、父は大阪から一人の浮浪者を連れて帰つて来た。少年だつたが青年だつたか、山下清に似た風貌だつた。ボロボロのメリヤスのシャツに体中、ダニがわいていたようだ。母が悲鳴をあげながら行水をつかわせた。

青年(?)はほとんど喋らずほんやりしていたが、一晩泊めて明くる日、父は切符代とながしのお金を持たせて送りだした。多分、福井から流れてきた浮浪者だつたようだ。今も天王寺から新世界にはホームレスが多いが、父が生きていたらどんなにか胸塞がり、政治に不信感を募らせたことだろう。

父は生き方は下手であつたが、手先がとても器用で、戦後の物のない時分に石鹸や下駄まで手作りしたという。

父は昭和三十年頃から大阪の住之江で工作所や、建設機械のリース業を生業としていた。工場には鹿兒島や福岡から金の卵と囃されたほんさんたちが大勢居た。

工作機械の設計図を引いている父の四角い背中を憶えているが、建設機械の部品の新案

特許など幾つかとっていた。しかし家族から見れば実用ではなく趣味としか思えなかつた。フロイトの言葉であつたか「人はみな父親に死に別れるまでは、大人になれぬものだ」という。

父の口癖「君は……」を今なら、余裕をもつて聞いてあげることができたらうに……。

父の享年(六十四)を超えて、ようやく私も一人前になつたということだろうか。

八月は父が生まれて逝つた月

夢に遇う父は機械油のにおいで父の息止めたあの日の蝉しぐれ靴を履き潰して父は風の中

親父の背中

加 川 靖 鬼

昔の父親は、どこの家庭でも威厳があり近寄りたがたい存在だつた。我が家でも悪さをしようものなら往復ビンタが飛んでくるし、時間を守らなかつたり嘘でも言おうものなら、表に放り出されたり食事抜きなどの罰もざらだつた。しかし歳を取つてからの印象はがらりと変わり、穏やかで包容力のある温かい父親の姿があつた。

ある時突然大判の『川柳雑誌』を見せて、川柳をしてみろと大判の雑誌を渡してくれた。振り返ってみると昭和三十年前後の話で、大阪で震災にあい焼け出されて山口県へ疎開し、相当復興もしてきたので、大阪へ家族で戻る頃の事である。

親父と『川柳雑誌』との出合いの話は、聞きそびれて亡くなったが、生前は路郎先生の「俺に似よ……や葎乃先生の飲んで欲しい……」の句をよく聞かされた。

川柳との出合いは、そのまま立ち切れた状態で時は流れ（その間は冬眠状態）一昨年のこと「尼崎文芸祭」で長浜美龍（常任理事）さんから『川柳塔』誌を頂いた時、大変懐かしく五十年間の空白が一瞬の内に埋まり、運命的なものを感じて感激した。

早速、親父の川柳ルーツを調べるため、奥田みつ子（相談役）さんに相談した所、大阪中央図書館に路郎先生が寄贈された『川柳雑誌』の中から、加川大然（父親）の句と同時に、なんと靖真（靖鬼）の句？のコピーも頂き、まさに青天の霹靂であった。

当時、親父が二人一緒に親子投句していたようで、小生は投句した記憶がなく掲載されている句もほとんど覚えていないが、「近作柳樽」選者として路郎・春果・栞・小松園・

好郎各先生方の選で、親父の句が掲載されているのを読んだときの感動は言い表すことが出来ない。

恐らく一誌友として投句していたと思うが、各地区の句会の出席名簿には今のところ見当らず、当分の間楽しい（大阪中央図書館）通いが続きそうである。（昭和三十年から十年間分の川柳雑誌の全句の中で、親父の句をこの目で確かめに、通っている）

大阪の島之内（船場の隣町）で生まれ、同

父の句（平成17〜18年同人吟より）

亡父が立っている傷だらけの柱
記念樹に父が残した道しるべ
残念なことは親父に似すぎて
反骨の父の肋が透けて見え
父は父反面教師だとしても
正直が歩いてるよな父が好き
ババのこと一番好きとなさぬ仲
中心で父の楔が利いている
写真から父の握手が伸びてくる
春になつたら亡父の時まで行こう
父の引いた朱線のあたり古書を読む
ただ酒は飲むが父の遺言状
何やかや言うても父はえらかつた
父の背中に銃を担いだ跡がある

蘭 幸 悦 子 善 信 高 明 霜 石 蓮 玲 子 み ね 盛 夫 紫 晃 伊 寿 美 昭 一 歩 半 銭 美 代 子

じ町内の中島小児科（生々庵先生宅）に連れていってもらった覚えがあるので、親父はそこで川柳を知ったのか。酒が好きだったので、阿倍野の大王（川柳）へ飲みに行っていたのか。それとも親しい柳友がいたのか分らないが、端唄・小唄、都々逸をこなし、飲んで歌って粹で何でも器用にこなす親父の震んでいた背中が、遥か彼方に見えて来たように感じている。

親の歳 越えても背中まだはるか 靖 鬼

まだ動く父の形見の古時計
暮参りやさしい父のことはかり
父と子の思惑ずれるのが普通
父さんが動くうしろに母の影
老いてなお父のパワーは現役だ
父の背が教えてくれた忍の意味
父親の記憶なく生き海が好き
父さんの負けた戦は痛だった
雲よ雲ようしろ姿が亡父に似る
人を恋う父のDNAだろう
天国の亡父へ梯子をかけている
一筆啓上亡父よ毎日呑んでます
あの時の父の涙が今わかる
今になり亡父の強さが身に染みる
父さんの一喝気付け薬です

朋 月 舞 夢 富 子 五 月 玲 子 黒 兎 富 美 子 笑 子 集 一 森 子 花 峯 春 恵 洛 水 和 重

誹風柳多留一篇研究 46

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清 博 美

342 不二山ハみじんつもらず一夜也

山口 「塵も積もれば山となる」という俚諺があるが、これと全く相反する伝説がある。近『職原抄』(二三四〇) 卷下に「考靈五年。近江ノ湖水始メテ湛へ、而シテ駿河ノ富士山始メテ湧出ス」とあり、『和漢三才図会』には「考靈五年六月二富士山始メテ見ユ。蓋シ江州ノ湖一夜ニ湧出シテ、ソノ土、富士山ト爲ル。故ニ今ニオイテ江州ノ人ハ七日精進シ、其ノ余ノ人ハ百日潔斎シテ山ニ登ル」とある。富士山は一夜にして出来、その跡が琵琶湖だといふのである。それが、考靈五年(二八六)のことだといふ。じつにスケールの大きい話であるが、句はこれをそのまま詠んだもの

のである。こつこつ努力するのが馬鹿らしくなるような話。

考靈五年あれを見ろく

傍三二

日本の夢は一夜に湧ひて出る

三七一

清 賛

343 むつ言の中へ油をつぎに出る

山口 吉原の句である。吉原では二階に上がった客の用事は若い者といわれる部屋係が勤めることになっている。廓の言葉で、「消し炭」とも呼ばれる。客の用を言いつかつたり、廻して帰って来ない花魁の言い訳をしたり、落語「五人廻し」などにはその多忙ぶりがよく出ている。なかでも不寝番の役は、部屋のお警戒と同時に行灯の油を注ぐ仕事をしたので

ある。客と遊女がよろしく語らつていこうへ行灯の油を注ぎにくるという事になる。

ふあんりよな物ハくるハの油さし 五七八

おやかして油をつぐを待て居る 末二二八

小栗 賛

腰をつかわずに油をつぐを待 宮四二五

清 賛

344 ばかな事生酔琴でおどる也

山口 文字通りの句である。酔っぱらつて三味線に合わせて踊るなら調子よく踊れるが、スローで優雅な琴の音に合わせてどう踊るのだらうか。人は酔っぱらうと馬鹿馬鹿しいことをやるものである。句としては人間観察の面白い句である。

姫の琴ちかしい客へちそうにし 明元礼一

生酔の帰つた跡トて琴を出し 安四天二

小栗 賛。琴は静かに聞くもので、踊るなど論外の無作法である。

清 賛

345 座敷らうたゝませて置くいやなきみ

山口 座敷牢は放蕩息子を謹慎させるために作るものだが、本句の場合は息子が改心した

ので、一応取り壊したのであろう。しかし、親から見ると、本心から改心したのかどうか疑わしいところがあるため、その材料だけは畳んで置いてあるということ。息子から見るとまことに嫌な気味である。

座敷牢すかたをかへるはずで出し

明五札1

能く出来たとも言にくい座敷ろう

幸々安元調1

清 賛。

346 下女を直すにつき縁者一人そり

山口 なおす【直す】は、愛人、妾、後妻などを、本妻・正妻にする。(日国)

よくある話であるが、妻を亡くした亭主が下女に手を付け、それが公然化して正妻にするということになった。その際、そのことに異論を持つ親戚が二人離反したというのである。先妻の縁者はもちろん異論がある。

女房に直すとは奥の手が見へて

武六19

小栗 「二人そり」がわからず

伊吹 礎賛。反るは、②(後ろへそる表情からか)驚いたり、あきれたりする。心が動揺する。(日本国語大辞典)で、結果的に先妻の縁者が二人ほど離反したのだと思う。

山田 同。当然の事ですね。
清 賛。

347 車にてしきみ淋しく引て行

山口 檜はモクレン科の常緑樹で墓地に植えたり仏前に供えたりする。葉や樹皮からは抹香や線香を作ったり、木からは数珠を作ったりと、なにかと仏事に縁のある木である。

花屋に持つて行くのか、線香の材料になるのか、あるいは葬式に使うのか、行き先は定かでないが、いずれにしても檜を積んだ車は、ものごもだけに淋しく引いて行くというのである。景気を付けるわけにいくまい。

いたましい売り子をしきみ問屋もち 一五14
能く売れば売はと淋しく切檜 武一八15

清 賛。

348 ふらないと首を取ルよと内儀出る

山口 背景のよく解らないところがある。内儀がどこかへ出かけようとしたのにたいして、家内の誰かが天気を見て「きつと雨が降るから雨具の用意をして行くように」あるいは「雨支度で行くように」と強固に勧めたのであろう。「首を賭けてもいい」とでもいっ

たのかもしれない。雨支度は降らないとあまり粹なものではないから、格好を気にする内儀が「降らないと首を取るよ」と言いながら出たのである。と解しておく。

俄雨帰ッて聞けば降りませぬ

一〇23

もし降らハ芝居にしなと重へ詰 二七6

小栗 礎説のようなことしか思いつかない。

清 同。

349 ものあきと見へて奉書のたはこ入

山口 ものあき【物飽】は、物事にすぐに飽きてしまうこと。また、その人。(角川古語)奉書は古代からの公式文書であるが、ここではそれに使う奉書紙のことで、こうぞを原料とする厚手純白の高級紙。(日国)

何をやってもすぐに飽きてしまう人だが、こういうのはだいたい大店の若旦那と相場が決まっている。この間までは金唐皮の煙草入れだなどと騒いでいたが、もう飽きてしまつて今度は奉書で作った煙草入れを使っている、というのである。あまり人は持たないだろう。道楽の果てであらう。

物あきをするでかんとうをハされず

安八札3

清 賛。

いつも

山本 玉恵選



胸の中いつも誰かを偲んでる
九十五いつもさよなら言うてます
プライドがいつも邪魔する天の邪鬼
同じこといつも話をする不快
いつも今プラス思考で生きている
も一人の私がいとも妥協せず
人生はいとも転んでばかりいる
覚悟して少し遅れて出す答
いつもの味が変り気がつく倦怠期
介護にはいつも笑顔の手を延べる
人も空もいつも晴れとはいかぬもの
一行詩いつも一字に迷ってる
不況でもいつもの通り夜が明ける
常連客いつもきまつた席と酒
ときめきを妻が目聡く察知する
花の道遠回りする散歩道
模様替えいつもの場所ですれ物
落ちつけといつも聞こえる母の鈴
当然のように思っていた平和
春の絵にいつも蠢く内緒ごと
いつもいつも笑ってはかりいられない
変りない事が平和の証です

美紗子 勇治 ゆきの 一粒 彩子 道子 孝一 銀波 遠野 孝明 菜摘 公誠 章司 倫子 好文 奮水 弘子 一風 美千代 ふみ 順子 子のり

同じ顔並べて食べているいつも
若いからいつもさらさら光ってる
瞳の隅でいつもあなたを追っている
用件がいつもばやける長電話
夜の灯りいつもの朝が来るように
何時だって満点ババの広い背な
退職の日まで欠かさずお茶を汲む
何時にない妻の目付きに声を呑む
好奇心いつも際どいルール無視
いつもの所ただそれだけで通じ合う
気がつけばいつも隣にいてる友
身の内の真珠育てるのは女
いつもならあの人と逢う曲り角
米びつをいつも満たして心飢え
正座した妻のいつもと違う声
住
筈の元気をいつも羨んで
一張羅いつもと違う事を言う
野に伏している風聞く花遍路
ライバルがいつも強くて手が出せぬ
刃こぼれをいつもの席へ研ぎにゆく
人
み仏といつも会話をして独り
うぬばれの翼でいつも翔んでいる
ふわふわ感がつきまとう宇宙基地
軸
再会でいつもの笑顔置き忘れ

像山 伊津志 アキ 典子 柳弘 茶子 末吉 一知 登美代 朝子 哲男 俊子 俊子 英子 扶美代 愛論 螢 幹子 妻子 くにこ 播本充子

レンズ

加藤 茶人選



美しい人ばかり見る凸レンズ
スキヤンダルばかり探しているレンズ
屈折も拡大もしてパラダイス
裏側を読みとるメガネ掛けて行く
喜怒哀楽レンズの曇る時もある
ラフレター眼鏡を拭いて読みかえす
メルヘンへわたしを誘う万華鏡
一ページ読んで疲れる虫眼鏡
鼻の差のゴーグルレンズは見届ける
心中を読めるレンズはないものか
焦点を絞れば父が浮いてでる
焦点の合わせぬレンズで見る世間
あつたあつた美談を捜す虫メガネ
広角で春の水平線を撮る
メガネかけ天眼鏡で辞書をくくる
伊達メガネレンズ二の次三の次
臆病で潜望鏡が手離せぬ
契約書天眼鏡で確かめる
アリバイを防犯カメラから貰う
老眼鏡変えて貯金の残を読む
明日を見るレンズが欲しいこの不況
幸せを集め焦がしているレンズ

日の出 泰子 幸子 裕之 裕花 奮水 茂代 慕情 庸佑 幹子 一子 朝子 照彦 照彦 千代 千代 千代 霜石 キヨミ 哲男 政勝 大子 彩子

金縁のレンズが視野を狭くする

なんとなくレンズは凹の方が好き

レンズ越し地球見事に青かった

特ダネへオーバーヒートするレンズ

感性を磨くころにレンズ置く

趣味に生きレンズを磨くのが日課

真実がレンズを通し見えてくる

磨かねば心のレンズすぐ曇る

美とはこれカメラが競うたき桜

異動欄悲喜こもこもへ虫メガネ

妻を撮るレンズは愛に満ちている

さまざまなレンズ通した声の欄

天眼鏡そつと教えて僕の果て

運勢が分かればほしい虫メガネ

思い出をみんな美化する万華鏡

佳

広角のレンズにこころ見透かされ

ツショット写すレンズの片思い

百倍にして花粉みているレンズ

まだ生きる欲ありレンズ磨いてる

言い訳は一切許さないレンズ

人

古いがとやか言うているレンズ

嫁を見るレンズは少し曇らせる

天

しあわせの黒子を探す凸レンズ

軸

レンズ越し見ざる言わざる聞きませず

(花)順子
弘一

毅

悦子

美龍

圭一郎

克博

すみれ

強一

章子

東吉

(編) 洋

好文

寿美

菜摘

かつ子

螢

ゆきの

充子

志華子

満子

天

しあわせの黒子を探す凸レンズ

軸

レンズ越し見ざる言わざる聞きませず

細い

玉置 当代選



ご近所の細く永くのおつき合い

使用後の写真が誘う痩せ葉

細い枝に見事に咲かすクレマチス

人間のエゴで小川が細くなり

七光り苦勞知らない細い指

七人の敵には見せぬ細い脛

やや細く見えるドレスを試着する

メール波の細い絆が乱れ飛ぶ

この顔には細い目がつり合っている

細ぼそと暮らしていても愛がある

細々とした暮らしにもある誇り

細々と繋がっている家族愛

細胞も血管だけは逞ましい

細胞に一家を背負う自負がある

細胞に芯の強さを秘めた寡婦

細胞のどこに潜んでいた勝気

細胞の妻に私が助けられ

細々と自給自足が過疎に生き

悲しい日の黒が細っそり美しい

兄に還る老母が白寿へ伸はす蔓

細い手が苦勞を語る二度童子

心細い話はしない老介護

(志) 千代

日の出

のり子

義雄

時雄

和郎

慕情

善信

圭一郎

淳

ばっは

蜂朗

浜丘

螢

ありがとうか細い声を聞く介護

派遣切り細い脛までかじられる

細々と生きる余命のある間

細長く生き生かされている平和

ひよろ長いわたしの影に首がない

生まれ変わったらマネキンの細い腰

細い手の運命線が揺れている

細くても筋金入りの戦中派

太る暇なかつた亡母の針仕事

鉛筆を失うす自我的負け惜しみ

嘘まぜて細い指先よくしゃべる

強力な味方は母の細い腕

ささやかな善意大きなありがとう

極楽の道がだんだん細くなる

細く永く命支える竹を踏む

佳

ほっそりと歳を重ねてきたうなじ

それにしても細いと影も案じ居り

追伸に無心を綴る細い文字

痩せてても火事場の力もっている

細々と暮らし結構たためてはる

人

正論を通せば道が細くなる

地

吉報が一気に路地を駆け抜ける

天

煩惱を脱いでスリムになってゆく

軸

リストラに大黒柱痩せ細る

朝子

満子

英子

武彦

霜石

典子

敏子

妻

雅明

孝一

愛論

菜摘

(安) 泰子

一風

ふみ

みね

あずま

登美代

恭昌

人

准一

地

富子

天

宇野幹子

螢

リストラに大黒柱痩せ細る

軸

煩惱を脱いでスリムになってゆく

天

吉報が一気に路地を駆け抜ける

地

正論を通せば道が細くなる

人

痩せてても火事場の力もっている

初歩教室

題一涙

鈴木公弘

選者が句のよしあしを判断する場合のポイントは、とどのつまり「着眼点」と「表現力」であろうかと思えます。このことを作る側から申せば、見聞きした（あるいは感じた）ことをどの角度から観察して、どのように表現するかが出来、不出来を決定づけることになります。このコーナーでは、入選する句の作り方を指南するのではなく、何をどう観てどう詠むかを勉強したいと思えます。なお、比べやすくするため、このたびから原句と添削句を並列させ、その後必要に応じてコメントを付けるようにします。ご理解ください。

【女性・母の涙】

原 熟女には泪が涸れぬ訳があり
添 熟女ほど涸れぬ涙の壺を持ち
原 羅針盤母を亡くしたあの涙
添 羅針盤の母を亡くした日の涙
原 弱くなる母すまないね涙する
添 すまないねえ母は介護に涙する

いさお

エミ

なつみ

原 悪童も母の涙に諭される

弘子

添 善悪を母の涙に教えられ

原 涙こらえ戦後の辛苦生きた母

文代

添 涙こらえて戦後を生きた母であり

【花粉症・風邪の涙】

原 春嫌いムズムズ涙ハックション

憲司

添 涙目がハックションする春嫌い

原 風邪咳とクシャミ涙手にタオル

ミヨノ

添 くしゃみ咳涙に飽きているタオル

クシャミはク・シャ・ミと数えますので三

音字です。したがって、原句は中六（字足ら

ず）になります。また、風邪・咳・クシャ

ミ・涙・手・タオルといった小道具が多いた

め、かえって状況説明になりました。お題以

外の小道具はできるだけ少なくして、主張を

際立たせるように組み立てましょう。

原 山笑うけれどくしゃみで泣いている

冷子

添 くしゃみして泣く私を山笑う

原 花粉症見られたくない涙顔

雅代

添 涙顔見られたくない花粉症

この比較は原句が悪いという意味ではあり

ません。上五と下五とは交換されうるとい

ことを知っていたたたかたためです。

【幼児から青少年期にかけての涙】

原 赤ちゃんが泣いて気持ちを訴える

房代

添 赤ちゃんは涙を心から流す

原 涙目で押し黙ってる三歳児

健柳

添 意地の目に涙を溜めた三歳児

原 初めての子を見て息子涙する

添 父になる胸熱くして涙する

自分以外のことを詠むとき、正直に描写し

ますと、他人事になってしまいます。自分の

ことのように、できるだけ引き寄せて描きま

しょう。

原 愛情を親の涙でたしかめる

勇

添 ちははの涙へ愛は限りなく

涙によって愛の深さを計るかのような誤解

を生む句になりました。推こうされるときに

は余韻にも留意しましょう。

原 学園の涙とびかう桜花

稔

添 学園の涙を吸って咲くサクラ

原 合格の孫の電話で涙する

タカ子

添 合格へ孫の電話に涙する

原 少年の恋やるせなく涙かな

俊子

添 少年の恋は涙とともに消え

原 球児たし勝敗ともに涙する

正二

添 勝ち負けへ球児の熱い涙みる

原 若者も涙腺涸れるこの不況

禮子

添 若者の涙涸らしてゆく不況

原 嫁さんにするなら涙もういひと

柳歩

添 可愛くて涙もろさを妻にする

原 誤算だった無造作な恋若かった

美紗子

添 若い日の涙に溶けた恋もある

誤算・無造作・若いといった動きのある用

語が生きていて悔いる気持ちはよく出ています、涙が流れてきません。観念の省略・凝縮は文芸にとって大事な部分です。

原 純情な涙を流す青春符

周子

添 純情な涙に濡れた若い日々

綾乃

原 出産立会う感動したよ涙出る

綾乃

添 出産に立ち会う涙あふれ出し

【もう少しの涙】

原 生ける物流す涙は同じ色

宏造

添 生けるもの涙は同じ色をして

宏造

原 辛すぎた涙見送る回る寿司

清

添 回転ずしに乘せて涙を見送ろう

清

原 涙なしホテルもさえた卒業式

久子

添 卒業式のホテル涙もなく消える

久子

原 本当に辛い時には涙なし

弥生

添 本当に辛い時には涙出す

弥生

原 亡き妻の涙で濡む文字の乱

志郎

添 亡き妻を偲ぶ涙に濡れる文字

志郎

原 テポドンで吹く飛はされて涙涸れ

紀雄

添 テポドンは貧しい涙載せて飛び

紀雄

原 ピンチには涙線弛むしたたかさ

道子

添 涙腺を緩めてピンチ追い払う

道子

原 諍いは涙を流し幕を引く

光弘

添 争いの涙流して幕を引く

光弘

原 過去の事聞くも語るも出る涙

開子

添 来た道を聞くも語るも出る涙

開子

原 涙目で頼まれ無理も呑んでみる
添 涙目に頼まれ無理を飲んでみる
原 もう泣くまい明日はきつと晴れるから
添 もう泣かぬあしたはきつと晴れるから

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

原 届く塩熱い心に浮く涙
添 届く熱い心に浮く涙

こずえ
イセ
律子
節子
弘泰
堅坊
恵美
隆彦
孝明
義雄
操
克博
かずお
秋星
ヒロ
ちづる
嘉彦
振作
みち代
安子
照美

たくさんの涙いだき天国へ
したたかね涙を武器にするなんて
生きるため涙は見せぬよいとまけ
血も涙もなくて詐欺師は舌を出す
うれし泣きおかしいほどに涙落ち
毒舌な男の涙もろいこと
合格へうれし涙の電話口
眠る子の涙の跡をそつと拭く
わさび効き五官のすべて涙ぐむ
涸れるほど泣いたようでも湧いてくる
わびるなら涙に勝る策はない
清貧の涙の海に生きた母
追伸に母の涙を見てしまふ
ひとりになって溜めた涙のありつたけ
語るも涙そんなシーンを見たショック

【今月の推せん句】

好き嫌い涙もろさも似た夫婦 小塩智加恵

あれだけ喧嘩しておられたのにねえ。 福田 好文

正論に涙を添えて攻めてくる 福田 好文

こういう方、おられます。逃げまじよう。 馬場 利子

拳より母の涙が痛かった 馬場 利子

やや観念論ですが、描けています。 馬場 利子

【私の句】

馬の目に涙みている負けいくさ 弘壇を見上げて父は泣いていた

(登載漏れの方は役員が添削して返送します)

すみれ
治子
幹子
りこ
長一
菜々子
房江
孔一
宣子
志延
大朔
ます
菜摘
くにこ
絹子

秀句鑑賞

同人吟 西 口 いわゑ

—5月号から

母さんは嫁とやり合つから元氣

加 島 由 一

嫁姑の問題は永遠テーマなどと言われますが、この句の中の嫁姑は理解しあつて、仲は

私が始めたころとは句姿も違い、時代と共に文芸の世界の移ろいも感じますが、当然のことです。国政も落ち着かない、どちらを向いて歩いていいのか迷っている昨今ですが、川柳は一筋です。楽しくやつて行きたいと思っています。

「5月号から」の秀句鑑賞にあたり、皆さまの句を隅から隅まで読ませて頂き、日頃悩む私にちよつと目を動かせばどこにでも素材は落ちていると言うことを、改めて学ばせて頂きました。

野の花のように自分を咲いて来た

木 村 富美子

「野の花のように」とは決して華やかではないが可憐で美しく、そして少々なことでは挫けない、その道程を作者は誇りに生きています。ふつと宮澤賢治の「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の一節が過りました。

嫁姑の問題は永遠テーマなどと言われますが、この句の中の嫁姑は理解しあつて、仲はいいものの料理、子育てとなつてお互いの意見の相違を戦わす。でもそれによつて脳の活性化に役立ち、ストレスも解消となれば一挙兩得です。円満でなければこんな句は生れません。その中心で作者の苦笑いの姿が浮かんできます。

磨りガラスの中なら本音言えそうだ

上 地 登美代

本音とは限なく曝け出して、相手に自分を理解してもらつて一つの手段ですが、人間はやはり、何かに包まれて居たい欲望があります。「磨りガラスの中なら」に惹かれました。

花柄で包む疲れたマイハート

森 田 明子

花柄の洋服に包まれ、洒落たコーヒー館にでも出かけてみて下さい。女としてハッピーな気分になれると思います。

記念日を共に忘れた振りをする

伊 達 郁 夫

共の記念日といえば結婚記念日でしようか、何年前か前までは共に洒落してレストランにでも出かけていたのに、最近はお互いに忘れた振りをする。ふふつと領いてしましました。

哀しみはほろほろ落丁のページ

山 本 希久子

最近、母上さまを見送られた作者「ほろほろ落丁のページ」と哀しみを美しく表現された句に心打れました。

帰りゆく母トポトボと点になる

夏 目 一 粋

久方ぶりに母上さまをお迎えして、お食事等を共にされた。母上さまは元氣な息子さんの家族へ、安心して帰って行かれた。それを見送る作者の「トポトボと点になる」心情があふれています。

正義漢ぶってテレビにだけ吠える

江 見 清

宰相をはじめ議員さんも国民の納得するような答は出してくれません。とても此方を見てくれているとは思えません。現在の自分の地位を守るのに一生懸命です。国民はせめてテレビにむかって吠え、鬱憤を晴らすより外ありません。

リフォームと野菜づくりで活見出す

吉田 幸子

不況で大変と言っているより、リフォームと野菜づくり、でも消費になれてしまっている現在、実行に移すのは困難と思われるのに、それを実行されている作者に拍手です。

孫襲来献立変える春休み

鶴田 遠野

孫襲来がこの句を物語っています。経験のある方は同感のおかしみを感じると思います。

君のノートに見つけた愛の真実

春城 年代

亡夫の、のこしたノートを繰っていると、すっかり愛の言葉が綴られていた。傍から見ても羨ましくも、微笑ましいお二人。作者は哀しみを噛み締めながらも、ふっと素晴らしい相聞歌が生まれました。

ハンサムを選んだ若き日の選挙

上垣 キヨミ

若き日でなくとも、迷ったときはやはり私もルックスのいい方を選ぶかも知れません。でもこんな不正な投票ならしないほうがいいですね。心したいと思います。

呆けでない忘れただけよ娘はやさし

山崎 君子

思いやりの有る一言に、ほろりとしみます。

裸木は枝のすべてを天に向け

居谷 真理子

冬の天、裸木がのびのびと枝を伸ばしているのを見ると、何となくスカッとした気分になります。そして緑の衣を着て人間を癒してくれます。木とは切っても切れない緑です。

もらいますか踏み絵のように給付金

木本 朱夏

二兆円の放出と言われている給付金、頂けるのは嬉しいことですが、その内容は作者の言われますように、正に国民は二兆円の踏み絵を踏まされたと穿つてもみたくありません。折角の給付金、大いに活性化に努めたいと思います。給付金の句はたくさん有りましたが「踏み絵」の発想には頷かれました。

花びらを浴びてる孫の髪を梳く

堂上 泰女

お孫さんが花吹雪の中を駆けてこられた。いそいそと美しい髪を梳いている作者、和やかな雰囲気想像させてくれます。

野仏の家臣のようにつくし伸び

福西 茶子

野仏の周りに可愛い頭を並べている。つくしを「家臣のよう」とは面白いと思います。散歩の風景を、上手く一句、ご自分のものにされました。

結局はあてにならない子沢山

加藤 茶人

子供さん達は立派に成人して、それぞれ遠くで生活をされている。また二人になってしまった。でもいざと言う時には駆けつけてくれます。親が子と思うように、子の方も結構思ってくれます。

三世代和んで暮らすのが誇り

最上 和枝

この頃はもう核家族は当たり前、と言う時代です。作者は三世代和んで暮らしておられます。でも和んで暮らすには、思いやりと努力が必要不可欠です。羨ましいです。

ママ嘆く産科少ない国事情

松本 知恵子

少子高齢化を何とかしなければ、という割には産科医師が少なく聞きます。国の存亡にも拘わる一大事です。

五六種の薬を飲んでガンは友

岩本 笑子

五六種のくすりとの葛藤、でも作者はガンは友達と開き直って、一句にされました。心強い句に出会い嬉しくなりました。

毒少し入れてあるから生きられる

安平次 弘道

毒少し、で佳句になったと思います。

—水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

白根ふみ

春の陽にひび割れた手よありがとろ

増井ヨシ枝

ようやく春の陽が輝く頃、ひび割れた手が
いとおしくなります。寒さに耐えた手は、ど
んなにか暖い春を待ったことでしょう。

道草にも発見があるランドセル

福井菜摘

下校時に、「今日は」と挨拶をしてくれる
小学生は何とも可愛い。屯している中を覗い
てみると、小さな虫と戯れていて、虫の生態
を自ずと会得していることでしょう。こんな
道草大好き！

春の音よう知っている猫柳

小林妻子

川の流れがきらきらする頃、銀毛の花穂が
優しく出揃い、子供の頃、川辺で遊ばれた妻
子さんの姿が懐しい風景の中で、浮かび上っ
てきます。

青虫が食べているから安全だ

山崎武彦

昨今の農業騒動で大変迷惑を被っています
が、青虫に試食してもらえば、一先ず安心で
しょう。

弱いとこ見せて肩凝り楽になり

高山清子

そうですね、ウィーク・ポイントを曝け出
すのは、なかなか勇気の要ることです。思い
切って出し、すっきりとした気分乾杯！

年金の通帳貯まることがない

前田喜美子

老いる日を年金に委ねようと思いつつ、年
金は最低生活なみで、贅沢もしないのに貯ま
らないものようです。でも恙無く暮らせて
いるなら、感謝もしたくなります。

幸せのレベル下けると愚痴も出す

山口千代子

幸せも本人の考え方で、随分変わるものと
思います。千代子さんの、柔軟な考えで、味
わい深い生き方となることでしょう。

おみくじがこんなに売れる弱き民

片岡文男

この不況風に、「薬をも掴む」の想いで、
救いを求め、足掻きながら占っているものだ
ろうと、わたくしもその一人です。

家事だけは定年無しと妻ぼやく

小西稔

ご主人の定年と同時に奥様も定年され、こ
の先は、フイフティーフイフティーで、お過
しになればとても幸せと思います。

抜け道を断つとマグマが溜ります

前田紀雄

苦勞しても癒しがあれば人は救われます。
ストレスを溜めないよう抜け道は大切です。
綿入れの半天たたむお水取り

西川冷子

昔から奈良のお水取りが終らないと、本当
の春にならないと、小さい時から言われたも
のです。綿入れの半纏がよく効いています。

頼りない親が育てたいい子達

伊藤アヤ子

子供さんが立派に成長され、お母様の謙虚
さがこの表現になったので、幸せです。

紋付を亡母の匂いのまましまし

遠藤那珂子

亡母の匂いはいつまでも忘れることができ
ません。いつまでも大切なお母さんです。

節分も鬼は外など聞えない

田村周子

最近では節目の行事、人情も稀薄になり、鬼
もチャンスを待っていたかも知れません。



追悼

山門タミさんを偲んで

市丸晴翠

タミ様の訃報に驚きました。直前に届いた川柳塔四月号で「お浄土も梅香るらん亡夫の忌よ」を拝見したばかりでしたから…。

タミ様とは川柳塔唐津支部の唯一、女同志のお付き合いでした。幸夫さんと手を取り合って睦しく出席しておられました。

陸軍軍人の幸夫さんとの結婚は、戦雲急を告げる昭和十九年十二月、どんなに張り詰めたお気持ちだったかと推察致します。終戦後、無事ご帰還、ご苦労を経て貿易会社を設立され、川柳会や旅行を楽しまれました。その後、幸夫様共々お嬢様の傍近く、豊中市に移って行かれました。

「草花と語り合いつつ画いている」と、四季折々の花を描いたお便りをたびたび頂きました。川柳塔誌を通じ、ご健在を確かめ合っておりましたが…。

山門家の菩提寺、唐津市新町の正園寺の掲示板には、山門さんが折にふれ送られる先師の句が、住職の達筆で貼り出され、道行く人の足を留めていました。

このたび、お位牌堂にお参りし住職の奥様に伺いましたところ、

まだ生きるつもり眼鏡を買い替える

終焉は夕陽の如く沈みたい

が、タミ様の最後の句であったとのこと。お浄土でお待ちの幸夫様と再会されたタミ様のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

合掌

タミさんの御息女池田純子様から川柳塔へのお便りの一部を紹介させていただきます。

亡父幸夫と共に長年お世話になりました母タミは、三月二十九日早朝、本当に桜の花びらの様に音もなく風に吹かれて舞い散る如く父のもとへ旅立ちました。不自由な体で最後まで明るく元気に生きてくれました。「私には川柳と絵があるから」と不自由で外出が難しかった母は退屈する事なく、ベッドの上でいつも鉛筆を握っておりました。父亡き後も川柳の皆様方と親しくお付き合いましたことには、母にとって

元気の元のようにございました。天笑先生はじめ川柳塔の皆様には可愛がっていただき楽しい晩年を過ごされたことに深く感謝致しまして御礼申し上げます。

法名 宝泉院釋信楽

遺句抄

人生の隠し味なり老いの皺

山頂の露天風呂から見る夕陽

蹴飛ばした穂は都会で跳ねている

踏まれても踏まれてもなお蟻の列

孫が来て梅雨にホットなティータム

梅雨の鬱リフレッシュする美容院

紫陽花は梅雨に恋して彩をかせ

散る紅葉残る紅葉の美しさ

舞いながら散る葉にもある余生

弥陀と行く浄土に幸せ待つている

三日月が諸刃の剣でさしてくる

永年の身体の上はぬぐえない

寝ころんで空の青さよ草いきれ

父さんの時計この手に生きている

亡き母もきつかったらう今我が身

パソコンもメールも出来ずうまが合い

今盛り亡夫と最後の葛蒲園

八十路駅オーバーランをした想い

経あけるしばしあの世と糸電話

生かされて生きる辛さや喜びや

オレンジの月がささやく嬉しい夜

本社 五月旬会

五月七日(木) 午後五時半
アウイーナ大坂

時々雨足が激しくなる一日であったが、本社5月旬会は97名の出席により開催された。

はじめに井伊東吉常任理事より、旬会開催時間のアンケート結果を分析、常任理事会で検討の末従来通りと報告された。

3月末亡くなられた同人山門タミさんへ黙祷を捧げた後旬会へと進行をした。

お話は、板尾岳人相談役。そして「と題して始められた。『本日』の兼題『昭和』にあるように、私も昭和の中を生きてきました。来年は、川柳塔誌十号記念ですが、昭和三十四年四百号記念旬会に参加したので覚えております。振り返りますと戦争中、十四歳で海軍少年兵に入れられました。十人の兄弟の中で育ち、戦中、戦後の惨めな生活を余儀なくされました。そんな苦境の中十人の子を育てた両親に尊敬せざるを得ません。昭和三十三年結核で入院。そして、川柳の諸先輩にお会いし、川柳と出会いました。そして、大恩人の西尾葉先生と巡り会いました。葉先生には、全国旅行に連れて頂きました。そして、病後のため新鮮な空気を求めて、金剛山登山を始め三十年になります。振り返ると、

節々の「そして」を繰り返しながら素晴らしい先輩達に囲まれて、川柳人生五十年を迎えました。」と心情溢れるお話を締めくくられました。(郁夫記)

月間賞は穴吹尚士氏(吹田市)に輝く。(司会・美籠・昭)(協取・扶美代・久千代)(受付・哲子・義(清記)・光久)

席題 「やさしい」 坊農 柳弘選

テストなどやさしやさしと隣の子
やさしい字だけにしましう総理殿
やさしいと請けた仕事で夜明け迄
やさしいとたかを括った大目玉
おくりびとみんなやさしい顔にする
ひとつ傘男の肩が濡れている
この人の傘になろうと決めている
ポチにだけやさしい妻に飼われている
やさしさも怒りも共にした夫婦
他人のめしたべてやさしく殻を脱ぐ
ひとすじのやさしい妻の糸に酔う
知らず知らず置こう心配性の母
嬰兒抱く母はマリアの顔になり
風向きが変わりやさしくなる笑顔
散らかった家がやさしい顔をする
崖つ縁支えてくれた無言の手
はらわたに滲みるやさし忘れ得ず
障害の人からやさしさを学ぶ
星が降るきつと優しい夜になる
やさしさへ傾いてゆく体こと

求芽 保州 律子 賢子 淳司 幸雀 公誠 美籠 弥生 一風 日の出 鐘造 壽子 義 幸雀 天笑 一步 美代子 扶美代

内弁慶人にやさしいのが不思議
京女やさしく見せて恋を持つ
鬼がわらつきぬやさしさ持つてはる
人目にはやさしくみえるらしい妻
エコバッグ吊してやさしなる家族
やさしさの裏に潜んでいる嫉妬

やさしさに開いた貝の固い口
イケメンで優しい彼を募集
やさしがすぎて肩凝りばかりする
厳しさに耐えやさしさに蹴つまずく
薬師如来のやさしいお顔に懺悔する
百戦錬磨それでやさしいから困る
佳
一合で止めさすこれも愛です
魔がさしてやさしい風に騙される
お人好しも優しい人も騙しよ
やさしさを如意棒にして母強し
崖つ縁やさしい君の助け舟
人
地球にも優しいからと布オムツ
地
やさしい顔しないでわたし罪深い
天
修羅の顔してても老父の背の温さ
軸
思い遣りのかたちでそっと蓮の花
兼題 「暇」 堀 正和選

哲男 楓楽 美智子 玄也 弥生 弘風 尚士 淑子 ダン吉 希久子 寿美 求芽 月子 能子 天笑 富美子 ふりこ 深雪 理恵 直樹 美義

急用は暇人には頼まない
連休に千円で来る孫家族

暇ですと言ってしまった電話口

暇つぶしに国会中継聞いてみる

暇だからしたカルチャーがふり回す

暇同士いつものとこに誰かいる

暇ひねり出してお手紙しています

暇つくり来たのに負けた甲子園

家事半分こ暇を出されることはない

手間暇を惜しまぬ母の隠し味

暇な日は動物園に行つてます

センターと呼ばれるところで暇つぶす

結局は暇もて余すずる休み

暇暇に大師と二人遍路道

暇そうに車庫でたむろの消防車

暇を下さい女の乱はひと日だけ

草花と話す暇なら人とある

人様の恋を聞いてる暇はない

世話役いつもの名前を挙げられる

萌える山をゆつくりひとり歩きます

暇な時メール携帯からからない

王子焼きに挑戦してる僕の暇

月曜から水曜までは暇だった

暇出来た頃に襲ってくる病魔

暇やのについせかせかと歩く癖

暇つぶしパチンコ勝った試しなし

貧乏が暇もてあます五連休

暇なポストへ高給取りが天下り

暇でんな曆にしるし何もない

庸 佑

正 子

恵 子

洋 子

義 子

いわゑ

天 笑

朋 月

たもつ

楓 楽

義 子

耕 治

時 雄

ルイ子

洋 子

寿 子

千枝子

蕉 子

善 純

美 花

ふりこ

千枝子

義 子

楓 楽

尚 士

桂 作

和 夫

玄 也

公 誠

十五分まどろむ暇はちゃんとある
飲む会へみんな何とかつくる暇

佳 子

ふつつかですが手間暇かけた娘です

金と暇無いから悪い事出来ぬ

手間暇は言わぬお肌の曲り角

税務署に同情されるほどの暇

玉手箱あけてそれから暇になる

人 人

名刀はいつでも鞘に眠つてゐる

地 子

暇という字がおふくろの辞書にない

天 子

聖書にも経にも馴染む暇がない

軸 子

大臣を辞めれば舐添さんもヒマ

兼題 「迷う」

迷う娘へ祖父はひとこと産めばいい

迷つては間に消えた儲け口

財布とは相談したはまだ迷う

迷うのはもうやめたがまだ腕の中

八起き目の笑顔迷いが消えている

迷いつつわたしの旅はまだ続く

美人にしようか心をとろか嫁候補

迷う目が見落していたゼロの数

迷わずに着いたか誰も戻らない

迷いながら延命治療拒否と書く

整理とは捨てることだと解つてゐる

美智子

哲 男

いさお

紀 雄

寿 美

保 州

無 限

真理子

保 州

一 歩

保 州

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

一 歩

サブリメントくさん飲んで血が迷う
迷うことあつて頭も活性化

迷い著書告だつたかも知れぬ

矢印も目印さえもない迷路

後期高齢一本道を迷わない

迷路にも出口はきつとある筈だ

何迷つていたのかさえも忘れてゐる

迷つて妻に相談できぬこと

迷わずに決めたあなたに今迷う

退院の妻迷わずに台所

行こか戻るか迷うわたしが大嫌い

消しゴムがあだごうだと申します

迷わずに国債どんと刷るつもり

平成の迷路にしゃがみ込む派遣

迷つた日あつたを詫びる呱呱の声

徘徊の母に詫びつつ迷子札

迷いなぞ女の勘で切りぬける

おんなです迷つたふりもして見せる

白状したら飲ましてやると言うてはる

飴ひとつ貰ひ返事に迷つてゐる

佳 子

美人なら迷わずハグのご挨拶

熟考と言ひ開きする迷い癖

退院のスリッパ迷いなく捨てる

真つぐな道で私がよく迷う

欲の数ほどの迷いと生きている

人 人

あちこちの桃に凹みをつけて去り

日の出

見 清

一 歩

扶美代

扶美代

ルイ子

いわゑ

蕉 子

修 子

光 久

日の出

久 千代

(志) 千代

見 清

深 雪

(矢) 五月

保 州

一 風

大 輪

昌 紀

郁 夫

直 樹

玄 也

瑠 美子

ダン 吉

美代子

時 雄

地

逢いたがる右脳へ別れると左脳

天

母の日は迷わず高い方にする

軸

圏外に着いたステキな迷い道

兼題 「ロマンズ」

三宅

保州選

ロマンズのつくり話に酔うてます

世紀の恋テニスコートに感謝状

ケータイの恋ひよいひよいと浮き沈み

ロマンズは実り指輪が重くなる

ロマンズをアピールしてるベアルック

妹のロマンズ姉が邪魔をする

ロマンズともう縁がないレジ袋

ロマンズスカイ妻が誰かと乗っている

シャルウイダンス妻にも言ったことがない

ロマンズの数では妻に負けている

落し蓋母のロマンズとしてある

寡黙だが母が残した艶話

ロマンズスカイ誘はなしで盛り上がる

ロマンズを追って長生きしています

ロマンズはプラトニックにとどめとく

遍歴の恋を法話に寂聴尼

美智子妃が涙くまれた感謝状

ロマンズは野菊の墓のかけにある

さくらよりはかなくロマンズは散った

ロマンズの王子大事に温める

自分史に無残やロマンズのページ

幸雀

宣子

准一

雅明

幸雀

千代

美花

岳人

美籠

光久

昭

光久

鐘造

郁夫

一步

舞夢

瑠美子

寿美

淳司

千里

森子

朝吉

ダン吉

ロマンズを話したんびに磨いてる
髷ならロマンズグレーだけにする

ロマンズを袈裟懸けにして生きている

ロマンズを花束にしてデスマスク

ロマンズを吞んでしまった影法師

傘たてにロマンズ一つ置き忘れ

一本の傘ロマンズを組み立てる

もう恋が芽生えた春の保育園

ロマンズは藁葺き小屋に置いてきた

とっておきのロマンズカビが生えてきた

シークレットラブ楽しんでるウフフ

佳

ロマンズは山ほどあったのに一人

本物の恋になったらつまらん

ロマンズを追ってシンデレラが消えた

ロマンズにドレッシングを振りかける

ロマンズは冷凍保存しています

人

ロマンズのせて紙ヒコーキが飛んでくる

CTスキャン恋に溺れた跡がある

天

悠久のロマンズ金と銀の鞍

軸

馴れ染めは振られた同士だったこと

兼題 「火元」

奥田みつ子選

痴話ゲンカ消えても火元残りそう

ニュース記事火事の火元は消防署

ダン吉

則彦

柳弘

ふりこ

章久

章久

大輪

直樹

天笑

理恵

美代子

森子

月子

無限

義

義

希久子

扶美代

鐘造

鐘造

義

義

義

義

義

義

義

義

お互いが主張を通したのが火元
山火事の火元は地球温暖化

火をつけて陰でいたにた天邪鬼

ごたごたの火元はいつも冷めた人

マスコミの騒ぎにほくそ笑む火元

ときめきの火元を煽る春の風

身内から火を噴いてくる社の不正

指差して火元確認して寝ます

胸もやす火元あなたと言われても

メキシコを火元に地球大騒ぎ

ネット社会種火いっきに野火になる

火元ではないが煽ったのはたしか

古すぎる噂と笑っている火元

完璧なアリバイ火元かも知れぬ

片恋の火種が今も温かい

グラスの底で火元がじっと耐えている

一言が火元で風が吹き抜ける

回り回って火元自分と気付かされ

消した筈の煙のりしとなつて燃え

揉めている火元はいつも孫のこと

原因は欲の固まり大不況

どちらかが火元ジョークで突いてみる

三猿になって火元を遠ざける

ようじる口が火元の罪重ね

立ち話火元にされぬよう逃げる

聞き上手噂の火元さぐられる

火元には孤独な女の影がある

軽はずみ火元となった離婚劇

冤罪の火元にされている噂

庸佑

いさお

光久

則彦

時彦

朝子

堅坊

柳昌

美智子

正和

富美子

見清

見清

幸雀

深雪

寿子

森子

ルイ子

靖鬼

岳人

紀雄

求芽

昭

寿美

義子

瑠美子

千代

友子

朋月

火元は彼女いつもここにこしてるけど

住

カルチャーで脳の火種を貰ってる

笑ってるが母は火元を知っている

火元から女の消えたサスペンス

幸せの火元はやはり父と母

人

一冊の本が私に火をつける

饒舌なバラが火元をはぐらかす

地

胸底のほてりの火元ですあなた

天

穏便な処理母だけが知る火元

軸

何時からか火元にされていた噂

兼題 「昭和」

河内 天笑選

頑張るねえあなたも昭和ひと桁かい

昭和ひと桁勿体ないを忘れない

昭和と一桁大きな渦を泳ぎきり

昭和と一桁教育勅語語らじる

拍子木へワクワク駆けた紙芝居

鍋釜が弾に变身した昭和

昭和には隣近所という情け

パンの耳かじって戦後のり越えた

裕次郎も美空ひばりもいた昭和

あの歌この歌昭和が生きている

反戦歌うたい続いている昭和

開戦も敗戦も知り喜寿となり

美 花

日の出

求 芽

朝 子

集 一

大 輪

美 龍

哲 男

(矢) 五 月

いさお

洋

堅 坊

楓 楽

賢 子

郁 夫

シマ子

日の出

義 子

い わ ぁ

恵 子

昭 和

人生のチェンジをされた美智子さま
新幹線走って昭和盛り上げる

アルバムに国民服の父がいる
軍服を脱いでジープに手を振った

昭和生きちとやそつとで音は上げぬ
極楽も地獄も知っている昭和

昭和史に敗戦という断面図
戦前が闇に消されている昭和

脳の数昭和の澱き込み
たくさんの死と九条の誕生と

昭和つ子ご飯粒にも恩がある
神風を信じて飛んだ知覧基地

ブランコを漕ぐと昭和の風に逢う
団子汁昭和を生きた自負がある

耐え難さを耐えた立派な高齢者
まだ昭和八十四年と言う父よ

引出しの中に昭和を眠らせる
二十年生まれでイキサ語れない

昭和生き後悔はない輩である
戦争と平和昭和の顔ふたつ

キッチンに昭和を生きた鍋がある
剥製のタロージローの昭和基地

昭和と一桁マクドよりうどん好き
住

日の丸に光と影のある昭和
しんどかったけど面白かった昭和

すさむ戦後へリンゴの歌は夢をくれ
耳朶に歓呼の声も玉音も

寿 子

一 風

哲 男

修 子

義 子

鐘 造

靖 鬼

正 誠

真理子

日の出

朋 月

求 芽

柳 弘

美代子

保 州

宣 也

正 和

玄 子

い わ ぁ

希久子

紀 乃

俣 子

俣 子

洋 子

義 子

一 風

時 雄

大家族昭和と共に過去形に

人

ミッチーがそつと昭和のドアを押す

地

年表の昭和にきのこ雲を描く

天

飽食を恥じて昭和を振り返る

軸

昭和ひと桁の根つ子を曳いて生き

川柳塔のぞみ6月例会

日時 6月23日(火) 13時

場所 銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)

宿題 「付和雷同」「なんば何でも」「戦い

済んで」各題2句・「自由吟」1句

欠席投句 6月20日必着 播本 充子宛

〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

第37回 あかつき川柳会

日時 7月10日(金) 14時

会場 住まい情報センター 地下鉄天六③出口

兼題

「ロボット」「星」

「地図」「時事吟」

投句先 〒536-0001大阪府城東区古市

1-8-14 江島谷 勝弘

律 子

美 龍

(矢) 五 月

穴 吹

尚 士

お世直し

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

ローズ川柳会兵庫

山崎

君子報

髭の似合う男が見当らぬ

ふところの深い男の無精髭

胸底でいつも聞いている母の鈴

少年を男に研ぎ決勝戦

聞く耳は一切持たぬ上り坂

帰命頂礼そこそこ私元氣です

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

亡母編んだ手袋今も温かい

知恵袋しつかり抱いて生きている

袋の中で眠るべつびんさんの桃

良心を袋に詰めてポランティア

君と逢うにおい袋をしのばせて

袋鬼穴からのぞく優しい目

幸せは手順通りに事が済み

さしすせそ先ず順番を子に教え

順風満帆そんな昔もありました

半徳

規代

蘭幸

力

淑子

千代美

房子

輝恵

貞子

それ成りに順調と言う古希となる
順調に勿体なくも傘寿越え

年の順いえ百歳まで生きたる

順風満帆春の鼓動を待つ産着

まだ石段登れましたね初詣で

しっかりと手組んで石垣揺るが無い

石仏の好きなお顔に巡り会う

グーチョキパー勝ちたい時は石が出る

境界の石に先祖に掌を合わす

あつからんと石ころ一つ

昭和史のしかと天指す忠魂碑

無上道楽と輝く落椿

ありがとう笑いの中でさくら餅

物忘れ仏のくれた處世術

父に似て少し頑固になりました

春爛漫バステルカラー着たくなる

和歌山三幸川柳会

武本

カブリッチオ風も私も気まぐれに

にんげんに掟があつて狂えない

ケーキ切る手元は都合よく狂う

思いきり狂つてみたい弥次郎兵衛

月の夜の微妙に狂う花時計

ガス抜きのために狂つた振りもする

狂うたら汗を掻くしかないカルテ

一匹の雑魚が筋書き狂わせる

弘子

静風

笑子

幸子

慶子

一路

汎美

民恵

栄恵

比呂子

敬子

厚子

栄香

太虚

千枝

史子

碧報

登美代

理恵

宏

菜摘

朱夏

和子

幸

准一

金儲けの花屋の花が狂い咲く

酒に狂い野に果てたのか山頭火

狂うたと気付かぬことが狂つて

はつとけぬ性で一緒に狂い出す

目分量母の秤は狂わない

情念の女に触れて狂い咲く

三日だけ泣いて狂つて恋冷める

花板へ夢は膨らむかつらむき

くるくと金は天下を回らない

くるくと表紙替えても出る素顔

くるくと手動で聴いたシューベルト

くるくとその日暮らしの二輪草

幾重にも巻いた帯から出る吐息

値札見て目を回すのは庶民です

棘抜いてやつと静かな指になる

辛うじてダルマに黒い目を入れる

欲捨ててやつと手を抜く掴み取り

人ひと許してやつとバラは咲く

縫い糸やつと解けて高枕

人間の形がやつと見えてくる

修業の包丁やつと大根から剥き

年金の二人暮らしもやつとこさ

メンバーは変らず進む高齢化

足枷のメンバーがいた四コマ目

メンバーが欠けて風船しぼんで

メンバーであつただらうに派遣切り

起世子

美雄

東吉

イセ

桂香

みね

柳昌

町子

美智代

純子

孝子

当代

絹子

昇

章子

武

かず子

賀代子

碧

次根

俣子

かずみ

嘉平

幹子

美花

保州

一つ釜のめし食いあつた肩を組む

愿

松露川柳会(鳥取)

小西 雄々報

遊びごと意気投合ですぐさまる

三千代

休日はずつくり遊び充電だ

美枝子

伯耆富士に見下ろされつつ野に遊ぶ

ちえ

追伸へ遊びの誘い大きな字

興

退職へ遊ぶブランはすぐ決まる

香音

自転車で風さり愉快どこまでも

千代美

ツーショット愉快な友と笑顔出る

公美枝

プロボーズ愉快に聞こえ目をほそめ

鈴枝

久々に愉快な話題気も晴れる

豊枝

赤ちゃんの百面相に時わすれ

和代

旅帰る愉快な話おおすぎる

智恵子

愉快なこと少なくなつて侘びしいな

久子

不景気も愉快にくらす知恵を出す

弘子

メールして愉快な仲間募つてる

静江

自分史に愉快な嘘も混ぜておく

正光

ライバルの愉快な顔へ塩を撒く

雄々

岸和田川柳会(大阪)

土橋 房枝報

コピー取り初めは素直よい返事

芳女

新人に酒もいい娘も持ち去られ

つかさ

新人が口を挟んで疎まれる

准一

おぎやおぎや僕も立派な新人だ

淳風

始めだけやはやされるニューフェイス

香代

新人の美人入社で落ち着かず

房枝

血縁に美人が一人居る不思議

血縁が喧嘩の種を蒔いている

兄弟がどんぐりなので仲が良い

信長の血が氷上で乱舞する

どこことなく仕草が似てる爺と孫

隠し子が父の葬儀に現われる

結局は許すほかない血の絆

大志抱く青年の目の美しさ

志す入試の孫に桜咲け

志す努力のノール賞

ふるさとの風が迎える立志伝

クラークをすぐ引き合いにする送辞

志でつかく核のない世界

最期まで主婦現役を志す

過疎の畑老農守りゆるがない

ささやかに紅さししばし年忘れ

仏滅のホテルでささやかな挙式

ささやかな贅沢に酔うみかん風呂

もててるとわずかなチョコで勘違い

滑り止め入学ささやかに祝う

夫婦して小さなチョコを贈り合い

WBC拍手ため息アナログで

漁村なら三度の飯にシーフード

居酒屋で季節味わう初鯉

シーフードエビが跳びはね面くらう

シーフード食べるとうまいものばかり

洋

絹子

はるえ

弘子

昭

泰弘

東吉

保州

若芽

幸子

浅子

仁緑

義泰

ダン吉

すみえ

蛙城

植代

扶美代

みね

和美

清

俊昭

ゆい

玄也

珠子

けい子

呂万

佳句地十選 (5月号から)

大川 桃花

節くれた指が一面に鶴を折る

恭昌

年金の暮らしゆさぶる税の音

雅女

引継ぎの明日へ机光らせる

てるみ

幸せの音ですパンがぶうと焼け

義子

それその時計で動く三世代

晴翠

ふんふんと傘寿の路に花よ舞え

富美

チャレンジが風の通りを変えていく

(早)孝子

華やかなチラシの裏の四苦八苦

像山

神の手の真中にいる嬉しい日

いわゑ

万札が見えて気になる貯金箱

克博

洋食の皿で鯛も五ツ星

力子

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

欠点も自覚してもまた転ぶ

シマ子

あの方もよく転んだが角がない

敏子

ころはぬ先私あなたの杖になる

和代

百点のテスト笑顔が駆けて来る

美子

勝訴でも笑えぬ辛い後遺症

太一

大声で笑う快気の旨い膳

穂夫

月一つ掬い取つたり露天風呂

八郎

温泉の濁り余生をふと思ひ

三重子

混浴の年齢層が高すぎる

風子

札幌のかけらでかんぼの宿を買う

和子

復元へ愛のかけらをよせ集め
来る来ない花弁と遊ぶ停留所
愛のかけら拾い集めてまだ夫婦
ポケットの夢のカケラにある未練
好きですと言われ財布の紐ゆるむ
愛犬の紐を信じた白い杖
紐切られ不況に惑う蟻の群れ
臍の緒を切ればひとり人間だ
もののふの道語り継ぐ真田紐
紐付きの融資が家を揺らして
宝箱開けてはならぬ飾り紐

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報

克己 かね子 賢子 朝子 あや子 雅文 美弥子 シマ子 湖風 秀夫 愛論

一筋に母は生涯を思う
真直な筋金入りの亡父の背
一筋の縄ではゆかぬ頑固者
老いてなお背筋伸ばして軽く生き
訪ずれしこの街筋に友は住む
一筋の道に迷いのない余生
年齢忘れ楽しい笑顔花見宴
ソロバンの音は昭和の匂いする
シナリオが大きく狂う一人の死

高知川柳社

小川てるみ報

三郎 典雄 松風

指定席浅い眠りの安堵感
この街にしつかり根付く国なまり
灯の消えた街に昭和が泣いている
大正昭和ロマンは消せぬ街並木
市街地にシャッター閉めた夢の跡
この街も戦場だった日の記憶
この街で鬼も仏も知りません
この街で再出発をするつもり
不況風じつと耐えてる街路灯
お城下の街もじんわり不況風
街の灯に溶けたか花子戻らない
高速が街変えて行く点と線
節は幾度も越えて度胸もつきました
隠し芸音のままの浪花節
節々の痛みやつぱり齢を知る

川柳塔みちのく青森 小寺 花菱報

憲一 幸子 三千世 哲史 正射 ふき 健 京子 和江 てるみ 千鳥 美々 房恵 進 みどり

お祭りが大好きだったのはの下駄
ほろ酔いの秘密もらして運ぶる
春光にざわめき出した種袋
噴火口見ると人間捨てたがる
鍵束につけない鍵が一つある
卒業の記念に並ぶ献血者
ライバルの背中に笑顔捨てておく
人間を卒業しますグッドバイ
放課後に仰げば尊し口ずさむ
百花繚乱儂いいのちだとしても
上手く言えぬが鼓動が乱降下

川柳塔唐津佐賀 仁部 四郎報

ふさゑ 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 勝視 四郎 蜂朗 高明 輝夫 晴翠 紀子 大鯨 清帆 富貴子 宏章

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

寝たきりになっても税がついてくる
岩屋から引き出すチャンス一度きり
新緑が汚染の空気と和らげる
税金を払う収入手にしたい
和解するチャンスへごめんねが言えぬ

新緑を浴びて疲れた目を洗う
税金を給付といつてかつこつけ
抹茶一ぶく五臓六腑まで緑
禁煙で居場所なくとも税払う

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 土橋 螢報

子育ての至福を想い出す乳房
プロポーズくすぐるような嘘を言う
ヤンサノエと皆な陽気に花の下 (節)
稼ぐ場所決まり明日へ背伸びする
イメージを大切にしておくりびと
低音になった鈴だが艶がある
給付金入学金に消えました
入学の費用気になる火の車
入学の靴も弾んで音高く
入学が同じ校だと自慢する
裏金で入学したと後で知り
入学の準備先生休みせゼロ
いの芽も出たよ入学式へ行く
花の下会話がはずむ池の鯉
精いっぱい今を咲かそう花の下
花の下マイクが天下取っている
花の下阿弥陀の顔に酔ってくる
婆ちゃんもときめいている花の下
のんびりと野点ではしゃぐ花の下
花に酔い花の下から寝てしまふ
花の下上見て左右見て笑う

せつ子
仁子
孝子
邦昭

螢報

彩子
幸枝

節子

くに子

小鹿

陸子

満

実満

久枝

八重

幸安

きみ子

孔美子

菊野

弘子

かつみ

重忠

和子

富久江
かおる
照彦

露天風呂美女にはらりと散る桜 (節)
花冷えに一枚羽織り花の下
人間の喜劇悲劇よ花の下
花筈ボケットにある給付金
分身のころ桜の木の下に
花びらが散って寄り添う肩で舞う
花見でも草見てもみな稼げそう
稼いだら介護ロボット買うつもり
出稼ぎを受入れてやる山がある

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

節子
永子
みさ子
和枝
諷人
幸子
汲香
はるお
螢

生半可横文字言うて舌を噛み
なめらかな舌で仲間ほめあげる
片言でだんだんばあちゃん目を細め
ちよつと出す可愛い舌にまた許す
老いてまだ舌の味覚を食卓へ
腕ぐみをして対策を練っている
酒室の湯気にまみれる杜氏さん
油断すな影がやっぱりついてくる
政治家によくある話一枚舌

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粋報

洋々
穀
美恵子
主一郎
一瑠

別れた人がなつかしくなる倦怠期
誘惑に乗った人にも罪がある
涅槃ではセクシーですな御釈迦様
罰金は嫌だ反則などしない
二十年こけた湯呑みで呑んでいる
そんなこと反則ですよ横恋慕
反則の切符が痛い空財布
次つぎにこけてさみしいクラス会
セクシーな形を作る桃の尻
誘つてよお金はたんと持っている
鑑定団こけた茶碗に高値つく
若田さん宇宙旅行へ誘つてよ
セクシーな白骨骨も踊り食い
セクシーなお猿の尻も春を待つ
お守りのように青色切符持つ
反則の人が私を抜いてゆき
セクシーに未練が残るまだ死なぬ
人間の持つセクシーがドラマ生む
セクシーと自分で一人思い込む
誘つてね甘い言葉に弱い
誘つてよあなたとならば何処へでも
反則をしてまで議員になりたいの
セクシーは一度もなく老いて来た
セクシーな電話の声に胸ドキン
年がいも無くセクシーな話すき
セクシーさ濃密すぎて品を下げ
ばけまいと言つてた友が先にこけ

美雪
清帆
無限
清信
善夫
秋月
雅女
妻
喜子
蟹郎
節子
昌鼓
義徳
重忠
金祥
一京
秀夫
信恵
千代
あし
孝男
稔
悦子
虎尾
はつ江
由美子
菊香

セクシーなおとこに惚れた傷の跡
反則金月賦で払う高齢者
誘つてよ好きです罫に落ちようと

むらくも川柳会島根 毛利

百選の桜が語る花見酒
さくら百選足の先まで花になる

夜桜が少し照れてる薄化粧
たっぷり話したいのに散る桜
満開の花見に勝てぬ不況風
今平和夫と花見し良き日なり
ばんぱりが花見を誘う恋模様
山桜俺の庭だと花見酒
給付金提げて花見へ二足跳び

緋はんぱり花見の客の足止める
後いくど花見出来るかこの場所
花の下やばなことは後回し
花見会メタボを忘れ飲むまき
花見には場所取り役は忙がしい
望郷のレンズに派手なさくら土手
長い髪肩にやさしくふんわりと
どしどしと成長する子たのもしく
カラオケに演歌いそいそ出かけ行く

城北川柳会前月分大阪 伊達 郁夫報

耕した後が私のアリバイだ
星空に母の風化か沈下花

茂登子
孝柳
一粹

幸報

蘭水
かずこ

秀夫
安次

彰

昌子
惠美子

信夫
定子

幸

愛子
美保

宣雄
保登美

瑞枝
英男

ます美
久子

郁夫報

妻子
喜美子

ボクのこと忘れた妻の立ち話
アリバイを言えない場所に居た二人
惚けたふり忘れたふりで丸く生き
アリバイは夢に出て来た彼に聞け
アリバイが崩れニヤニヤする女
メールより心情読める文が好き
雀の子メタボか丸く太つてる
湯あがりの素足に絡む宿浴衣
生かされた命なりせば大切に
ポケットにアリバイ崩す忘れ物
あざなえる禍福人生あきらめぬ
よめはんはテレビ見てるか食べている
自転車助けて借りて風になる
古希過ぎて帽子嫌いも歳に負け
充電を背中で受ける日向ぼこ
ファッションは構わぬ老いの防寒帽
そんな目で僕を見るから誤解する
脱皮の娘気付けばハツとする色気
過疎の寺水子地蔵の雪帽子
ソフト帽に父に出遭つた古本屋
おくりびと日本文化の証です
アリバイのためでも言えぬ君の名は
長い目で見ても蛙の子は蛙
ばあちゃんに色気をつける納棺師
サンルーム三毛と私と金魚鉢
笑うより涙の方が先に出る
敵を知り己を知つてからの鬱

じゅんこ
克己
かずお
美智子
萬枝
静枝
容子
一幸
桂作
麗
ルイ子
勝弘
明子
弘風
章久
東吉
修
賢子
倫子
たもつ
正
順三
とし子
野鶴
柳弘
典子
集一

目出し帽忘れ強盗延期する
認知症紅をつけたら笑みが出た
春よ春人生再生などしよう
アリバイを何処で消すのか飛行雲
古井戸に沈めた恋の疼く春
帽子掛け父の頑固がぶら下がる

城北川柳会大阪 伊達 郁夫報

千代紙の箱に乙女の日記憶
無いものは無いさのんきに自己破産
贈り物箱が活きてるラッピング
秘密にと箱をあちこち置き替える
妻がいる今日はだあれも来ないはず
番犬が糖尿で治療中
のんきさも加算されてる体脂肪
一坪の箱庭僕の癒す城
よく転びりハビリ通いで友が出来
中庭に雀も蝶も恋をする
番犬が女の膝に憧れる
ハテナマークつてのんびりバズル解く
大型大寝でるだけで役果す
人生はわんどの風で果てしなく
幸せをめざして急坂を登る
給付金買って買うものが無い卒寿
坊さん法話に世間話まぜ
かくれんぼ母のうしろに隠れてた
跳び箱の時間になると腹痛む

賢子
喜美子
容子
美代子
令子
静枝
あさ子
満作
昭子
とし子
じゅんこ
野鶴
勝弘
弘泰
ルイ子
萬枝
求芽
弘風
東吉

鬼共に地獄で遊び仕込んだら

消費税いややいやと二〇年

やり過ぎて枯れる木もある人もある

赤い羽根皆の善意が溜る箱

春雨と遊んでいます赤い傘

おはじきを入れた小箱が騒しい

酒屋には吠えないように吠てる

番犬はあるじそっくりのブルドッグ

癖のない人で心が読みにくい

孫膝に童話の森に遊ばせる

わたくしをすこし翻弄するさくら

その事にふれずに妻と和解する

夢いっぱい宇宙で遊ぶクレヨン画

家族だと言う番犬の孤独感

眠り猫何百年も寝たまんま

白地図をどう辿るのか子の門出

長柳 会大阪

村上

直樹報

おさげ髪跳ねて颯爽風光る

おしゃべりにまぶしく光る桜山

人生は光があれば影もある

いつの間に先の光が見えぬ世に

どんどんと妻若返り老ける僕

決心が付いて丸めた茶髪の子

まだいける臭いでわかるお母さん

人混みでどちら向いてもみな茶髪

納棺夫光り輝く賞を受け

順三

正

一步

章久

志華子

千里

修

倫子

集一

郁夫

恵子

たもつ

朝子

麗

典子

昭

直樹

直樹

ふみよ

もこ

幸子

裕興

マサ

正博

靖子

輝子

七光りない人生が面白い

どんどんと髪減り増える顔のしわ

親ゆずり僕も頭が光ってる

桜咲く酒瓶枕夢枕

出汁きかせ母の煮物は胃にやさし

揚げ雲雀光る青空飛行雲

光ったあの子も並の二十歳

入学の兎に陽光が降りそそぐ

若向きの和服茶髪をターゲット

脚光を浴びてはにかむ十七歳

鼻唄が出る時妻はややこしい

アメリカの光が消えて世界闇

イチローは光り一郎翳り見せ

病む前の艶ある父に戻したい

ライバルに当たるライトが癢の種

漁火よ実らぬ恋が揺れている

星光る明日は良い事ある予感

志抱いて鱗を光らせる

そのうちに光ると信じ磨く石

老いぬよう共白髪より共茶髪

平凡を光と思う日を生きる

川柳若葉の会大阪

宮崎シマ子報

平和です変ったことが何もない

花の下みな和やかになごやかに

ほろようてほんに和やか春の宵

見当らぬ確かに此所へ置いたのに

敬二

光弘

たけし

エミ

ふみ

明子

けい子

正子

三和子

英美

たかし

正一

幸雄

孝代

淳司

和子

武男

富美子

芳野

正美

和代

能子

シマ子

弘直

喜美子

火の元を確かめ一台乗りおくれ

和を以て貴し現在もかわらない

確かこの辺だったはず街変わる

老々介護愛確実な冷め出した

わたしの背な確かに丸くなっている

南大阪川柳会

吉川 寿美報

石部金吉誓詞守って半世紀

迎撃の命中率は五割だと

法律を守らぬ奴が威張る国

生き甲斐は守ってあげる人がいる

親友で本音同士のおつきあい

本音秘め人の意見を聞くばかり

建前は捨てて本音で生きたる喜寿

母からの電話でついに本音言

おおきにの語尾に本音が見えかくれ

さり気なく本音を混ぜて様子見る

好きだからわざと無視した振りをする

ありがとう言えずにくつと手を握る

本音聞く前に私が潰される

左遷地の本音自爆がしたくなる

本音出て縛れた糸が解きほぐれ

ストレスをいっぱい詰めて寄る屋台

行間を詰める言葉に辞書を繰る

夢いっぱいバグに詰めて始発駅

母の愛いっぱい詰まる塩むすび

勝つまでを信じて持った竹の槍

ますみ

香住

加津子

烈

慶子

勝弘

克己

昌紀

集一

なきさ

忠昭

和雄

弘泰

柳伸

東吉

寿美

栄子

ダン吉

憲太郎

一步

修

郁夫

あや子

千里

ばつは

つかれてや々と本音を喋り出す
鍋つつく酒が昔へ返す夜

下り坂背を押す風につつかれる
ほんの少しついただけで黒い金

人の穴つついて笑う雑魚の群れ
つかれてもやましいことはありません

札束でつつくと聞く裏の門
家計簿をじわりとつつく物価高

しぶしぶと妻とコンビを組む卓球
やすきよのコンビ昭和が遠くなる

二人三脚リズムに乗っている走り
今年またコンビで芽ぶくつたかずら

半世紀やはりタークの歌がよい
名優の太刀とコンビの斬られ役

連獅子の芸を光らす名コンビ
志華子

川柳ささやま(兵庫) 遠山 可住報

八十路へと続く私の一本道
いつまでもと念じて今日の筆洗う

DNA悪いとこだけなお続く
ひとり居の行く当てのない日が続く

福音に胸燃えて窓開け放つ
ウォーキング良い環境で続けられ

強引に落葉の道をめくる風
幸運も掴みそこねてこの齢に

掴みたい虹の向うの幸せを
この腕を掴んでくれて今がある

ルイ子

弘風

更紗

滋郎

タカ子

たもつ

楓楽

章久

弘子

柳弘

太郎

嘉住子

直樹

尚士

空いてます個性の強い人の横
燃えた日もあったふるさと祭り笛

川柳塔なら

信念と義理の狭間で揺れている
つばみだと信じていたい親心

ゴンドラは決して一人で乗るでない
国会の揺れにも馴れた高枕

揺れたとき一歩退いたの悔やまれる
老母はいま揺籃の刻生きている

盟友にするなら気品ある人を
欠点をかくしすぎます疲れてる

揺さぶられ泥にまみれてつく度胸
忠告は聞こえませんが耳が言う

俗物の気品は鞘を出たがらぬ
右左うしろに聞いているた噂

噂話とつても好きな壁の耳
一芸を磨いて出番待つ蕾

つばみのまま逝った娘の墓洗う
補聴器も狂う聞きたくない話

老いた樹をゆすりつづける孫九人
おとなりの気品に私包まれる

氏育ち問わず語らず出る気品
天秤に愛とパンとを乗せている

イヤリング静かに動く妥協点
物好きな耳は噂をよく食べる

耳貸せと内緒が膝を寄せてくる

哲男

可住

彰治

さざ恵

紀雄

とし子

博一

萌子

勝弘

千梢

ふりこ

弘風

章久

義久

天を指す被坊主にもある気品
守るものあつて心が揺れている

右左揺れて私の置きどころ
愚痴を言う度に気品が痩せていく

大胆に脱いで自立というつばみ
脇役は断固無縁よ百合の花

姉さんの落ちていくのをみたつばみ
姉さんは咲いた妹ふくらんだ

つばみから葉桜までの女の譜
吊り草が揺れる負け惜しみが揺れる

ふらふらと左の耳が帰らない
白梅の気品紅が嫉妬する

西宮北口川柳会兵庫 黒田 能子報

探し続けています心の本籍地
美しい地球いつまで続くのか

晴続く来年分も見えさくら
風貌は生きてきた道のぞかせる

頓堀川カネル爺や姿見せ
ニューモード台無しにした河内弁

嫁ぐ娘の姿が何故か他人めく
ランドセル大きくゆれる一年生

晴れ姿父は無言で手を握る
おばあちゃんこっそり鏡に艶姿

ウインドに丸い背をした我が姿
今まさに泳ぎ出しそう生け作り

オール電化美声はすれど姿なし

朝子

柳弘

美千子

良一

弥生

隆子

理恵

真理子

孝子

義

のりこ

順啓

わこ

千代

朝子

柳弘

美千子

良一

弥生

隆子

理恵

真理子

孝子

義

のりこ

順啓

わこ

千代

近頃は妻の直球躲せない

なげた愛ナイスキャッチをしてくれる

なげやりなお前が僕をしびれさす

鎮魂の花遭難の海に投げ

なげ返す勇気が欲しい給付金

さらめきは無いが確かな母の愛

玉の汗きらめいているボランテア

にじみ出るきらめくものを磨き度い

光るものに弱い我が家のDNA

利休梅無人の庭で春つげる

今在るはバトントッチをする役目

引き分けに終る夫婦の勘違い

寝たきりになつたら困るから揉む

消しゴムで消したい過去が二三つ

新学期子等の心もサクラ色

新芽ふく自然に心弾み出す

菜の花に春のリボンに蝶が舞う

表札がついてる猫の出入口

少し酔ったふりしてみせる花見酒

空白の日記に伏せた好きの文字

美容室痒いところは背中です

暴投もエラーもあつた五十年

川柳クラブわたの花太政 西川

酩酊しても足は家路を覚えてる

この頃は大臣の舌三枚に

花鉢雷一つに左右され

孝一

哲子

忠

折杭

鹿太

嘉代子

歳子

光子

緑

富喜子

見清

朋月

キヨミ

比ろ志

二英

奮水

耕治

宏一

早加永

弘子

哲男

義明報

宏

正春

欣子

また一つ星が落ちたという知らせ

人恋し饒舌になる日暮時

舌の体操きょうもしているひとり言

ゴミ一つ拾う勇気を子に教え

日の丸の旗が立つた建国日

廃屋に紅白の梅咲きはこる

荷を降ろしはつと息つく母の舟

生と死が深い絆におくりびと

荒家でも税金だけはちゃんとくる

政治屋をゴシゴシ洗ひ陽に晒そ

観客が国旗まつてWBC

麻酔覚め生きていたんだなと思う

先三寸でわたし騙した憎い舌

花冷えにしまったコートまた出番

人は皆重いリュックを背負つてる

公認をバネにパワーを蓄える

山菜の春の息吹がほろ苦い

ランドセル親の期待をふくらます

筋書に無いアドリブが笑い生む

衰えをしみじみ悟るふとん干し

同窓のあこがれの人今いずこ

あこがれの論吉様には首つたけ

笹舟や草笛知らず育つ子ら

酔い回り僕の時計が狂いだす

立ち話桜不景気嫁の愚痴

嫁の笑顔うまう二世帯和ませる

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじむ

たえ子

美代子

耀子

知佐子

民

君江

博子

愛子

宏至

幸枝

莊司

美はる

克美

義明

いつみ

一風

京都塔の会 都倉 求芽報

高速度でうどんを食べに讃岐まで

この歳の憂さを晴らすは散歩だけ

コピーにも恨みが滲む再生紙

公然と胡散なカネが茶飯事に

交叉点紆余曲折の先を読む

チョコとナッツははりばり脳を目覚めさす

そろそろとやがてぞろぞろ蟻の列

そろそろと春をうかがう池の亀

夫の小遣いそろそろ減らすしかない

そろそろ傘寿最後の恋をしてみたい

春浅く手のひらに乗る暖かさ

茫洋と中天に浮く昼の月

苦し紛れに打った一手で浮き上がる

場違いのおしゃれ私浮いている

ふわふわと恋のはじめは春の雲

本命に振られ二番手浮上する

浮くまでを何度の水を飲んだやら

名案が浮かぶと笑顔隠せない

まだあるよ浮いた話の二三つ

宇宙遊泳サバのみそ煮を食べながら

信じます私は私の五本指

幾つになつても嬉しい母の応援歌

生き下手な男応援したくなる

応援は草野球のほうがよい

一輪のバラが二人に励ましを

満子

文代

則彦

求芽

葉子

ふりこ

篤子

英旺

益子

克治

鹿太

肇

庸佑

典子

福子

綾子

としこ

昌乃

弘之

啓子

とし子

比ろ志

朝子

和友

孝一

対戦の相手の美技にエール起き
もう猫になるなと虎の応援団

黄色い声援ミスカートが気にかかる

応援の涙はことのほか強い

子の寝顔不況のババの応援歌

川柳花の輪大宛

妻谷 重風報

諭吉様なんば誘うても来ぬ我が家

アリバイに悪友誘ひ行くのれん

添い寝してわらべの夢に誘われる

身内中着直し自由親離れ

一族でギョツと固まるえのきだけ

年重ねしわも似てきた姉妹です

国祝う旗を挙げての文化の日

筆と墨と紙の文化の千年紀

梅香り笑みにじませて菩薩さま

ほたる川柳同好会大宛 水野 黒兎報

妻の模様朝から悪い焦げたパン

新人生酒量分らず一気飲み

ビボバ機器あなたが死ぬと使えない

ほどほどが好きで男で頼りない

ほどほどの幸福でいい孫を抱く

老眼を拭いて時代をなお読めぬ

宇宙ゴミあふれているという時代

スクラップ帳黄ばんでもまた捨てられず

ワンマンも嫁の顔色見て暮らす

輝美 かずお

萬的

美義

宏子

泰子

克衛

重風

ミヨノ

音成

やすの

栄紅

薫

善栄

勇治

祥風

見清

宇乃子

美智代

勝

契子

春代

いさむ

地図だけが頼りの初の一人旅
頼み事顔見て分る年の功

アラセブン時代遅れを気にしない

ほどほどに愚痴を交えてする自慢

想像を越えた時代を生きている

時代祭時計眼鏡のアルバイト

それとなく頼むでもなく期待する

嫁はんに半分ねだる給付金

翠洋会大宛

安土

女の城鍵まで祈禱してもらい

鍵にぎる人がかくれて闇の中

合鍵を渡した人がまだ来ない

身辺整理最後にのこる鍵一つ

胸の鍵しっかりかけています 恋

安売りの列続いている寒い朝

ゆつたりと浄土へ続く花いかに

続編を書かず余生を太く生き

うっかりが続いてついに惚けはじめ

泣き笑いにんげん続けている証し

昼と夜別の顔持つビル砂漠

都市砂漠夕陽にビルの長い影

ビルばかり空がどんどん遠くなる

マネービルしてたつものり騒気楼

屋上の庭園ビルのエコロジー

着信が計報でなくてホッとする

医者通い自己診断を叱られる

禮子

長一

黒兎

雪子

桂子

信男

久子

幹治

千梢

れんげ

弘子

理恵

みつ子

照子

富子

昭

尚士

楓楽

満作

集一

千歩

蕉子

志華子

げんえい

知之

亡父と来たこの山頂にケルン積む
花便り多忙出かける老い二人

ひそと咲く廓跡地の女郎花

番犬に貰った犬が僕に吠え

WBC美味しい酒に酔いました

ためらいは嘘だったのか笑い声

正ちゃん帽伸びよ日本の男の子

嬉しいと寝てる犬まで話しかけ

お隣をはめる話に妻無言

休耕田急に水張る自給率

この辺がもう夕時か辛夷咲く

抜け殻のような男が持つロマン

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

とりあえず先輩立ててから主張

先頭はアリの先輩行くらしい

老母という大先輩と暮らす幸

先輩の知恵を盗んで誉められる

先輩と言われ適度に利用され

先輩になつてふくらむ正義感

もうオイと呼べぬ後輩大臣に

心から心へ届け先輩に

街角のポストを癒すラブレター

街角の風向きを読む白い杖

街角でさつと肩貸す白い杖

刃がこぼれるように父逝き母も近く

大粒の汗がぼろぼろ名勝負

浩二

舞夢

恭昌

観子

茶々

日の出

久峰

すみ子

正義

桃花

捷也

徑子

小雪

よしこ

泰女

紀久子

真里子

英子

和香

寿子

保州

めぐみ

俣子

三男

鱗ばろばろ落ちてすつかり春です

神にもらった命ばつばつ剥がれそ

脳の錆ばろばろ今日も弾みの輪

目の鱗ばろばろ零す別世界

ご飯粒ポロポロ母を笑えない

初めての爺が作ったハンバーグ

ぼろぼろと泣かれウロウロする男

青天の霹靂あらぬ罪被る

子のために被る風なら立ち向かう

砂被り鬚の乱れが気にかかる

家という哀しいものを被っている

被っていた猫を脱いだら癒えた肩

鬼の面の被りを取ればなお恐い

布団被って明日が見えるまで泣こう

仕事柄ご免被ります笑顔

不況風火の粉を被る派遣族

末席で猫をかぶって風を待つ

火の粉を被る覚悟わたしの成長期

大波小波いつも被っている庶民

いずも川柳会(島根)

佐藤

治代報

始めから脇役で咲くかすみ草

力まずに流れていよう春の川

神さまの耳を通してからにする

動いたら見つかりそうなくれんば

耳も目も口も出しゃばりややこしい

神宿るときプロの瞳は光り出す

動かねば私の今が始まらぬ

よりこ

翠子

怜

和子

克子

東吉

准一

紀子

富美子

稚代

あきこ

登美代

謙

裕美

緑良

美子

利治

輝子

大輪

桂子

キミエ

美江子

治代

たえこ

久枝

多喜

正直な答に揺れる象の耳

片方の耳遊ばせて聞き上手

聞いたふり聞かないふりも耳の役

序章にない女世帯のいばら道

手も足も動く明日も踊らねば

玄関に神の力を置いて出る

土壇場でおおろしないのがプロだ

さすがプロ便利な補強工事する

水面下激しく動き出す気配

始めからあきらめていた天地人

ちぎれ雲風の力を待っている

プロの水そんなに甘くありません

まず動く春は素直な道となる

七福神みんな大きな福耳だ

一日が始まる子等の見守り隊

耳よりな話に散っていくさくら

耳遠くなつて疑い深くなる

裏話とつても好きな猫の耳

耳鳴りはネジの効かないオルゴール

こ一番老人力が動き出す

踏まれても切られても草生さるプロ

逃げ切れぬもの耳底で揺れつづく

耳掃除しても聞こえぬ事もある

風にのるボールが弾む始球式

耳鳴りが死ぬまで続くでしょう

プロちゅうのプロと私が自惚れる

本当の力を見せぬから凄

人間の動く方へと花が咲く

敬子

孝亮

すみこ

喜子

寿美

祐次

ちえ

房緒

佳子

放舟

玲子

圭詩朗

かずこ

煩悩児

房子

歌子

裕

浜丘

昌枝

幸

佐余

しげる

美佐子

きみえ

蘭水

茂美

ちかし

文子

富柳会大阪

古田 千華報

あきらめた頃にひよつこり男の子

母さんの涙一粒子を諭す

古疵が痛む寒い夜屋一つ

試供品ばかり集めている孤独

逢える日の靴は嬉しい音で鳴る

春風にヒゲを揺らして眠る猫

ぎつしりと詰まるブライド即前除

この思いその一言で思いきる

裏町の温もり探し春を待つ

手探りで見つけた釘で豆を煮る

追伸にあきらめ切れぬ愚痴を書く

胸元を手探りしたら裁かれる

一言で春一番の水点下

一本の藁に明日を託して

手探りで撫でた頭は鬼だった

いつわりのない白よりも白い顔

手探りで心の闇の戸を開ける

手さぐりの切符冷や汗拭いている

運命のままに歩んだ共白髪

思い出がぎつしり詰まるお針箱

唯一の味方と思う米の粒

玉の汗知らぬ息子の空返事

粒選りの種を育てたはずなのに

大粒の涙で危機を乗り越える

忘れ傘あきらめ切れず雨を待つ

粒ぞろいそれぞれ自負の顔を持ち

ひろし

鐘造

七朗

和子

アキ

壽峰

高鷲

紳雄

千恵

登子

晴美

深雪

寿之

紅紫朗

欣之

未知

佳子

より子

扶美代

澄子

彦次

恵

よしみ

加央里

信子

手探りの机に母の置き手紙
母は見たランドセルから生える足
風も火も少し小粒になつてきた
ぎつしりと明日を実らせてる大樹
探し求め漂う恋の冬銀河

米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

早春といえど結構よい椿
揭示板中待合でどきどきと
極楽にもお酒はあると聞いている
金持ちに占められてる一等地
病名が増えて身辺整理する
さくら開花早めの知らせ喜べず
深みどり紅の花抱く雪椿
目耳腰部品交換期限来た

倉吉川柳会鳥取 竹信 照彦報

錆ついたままでよろしい核ボタン
頭蓋骨錆びてきたのか蟬が鳴く
米余り錆びた農具の悲鳴聞く
前頭葉が錆びて時々気絶する
饒舌で身から出た錆ぬぐえない
五七五思考回路の錆び落とし
人住まぬ錆びた鉄門軋む音
遺跡掘りいまだ卑弥呼が見付からぬ
まいた種芽が出ぬ一寸掘つてみる
マイハート彼女愛すと膨つてある

鬼焼 武人 森子 奏子 千華
雪江 欣子 公一 日枝子 多美子 正二
完司 萩江 重忠 玲子 貞子 瑞子 恭子 よしえ 和枝 泰輔

親からの版屋で版を彫っている
地に落ちた道徳皆で掘り起す
ラッキョ掘り後の始末に一苦勞
人力で鉋石掘つた間歩潜る
主なき畑を掘れば目がかすむ
仏像を彫れば仏になれるかも
掘れました目尻三本笑い皺

お静かに今テポドンが翔び発つた
あまりにも静かな孫の部屋でぞく
息殺し静かに練つた手前味噌
酒飲まぬ時は静かない嫁だ
耳鳴りも静かになった眠ろうか
静かだと気になる夫の長い風呂
雀の子何処に行つたか風ばかり
物静かな男も飲むと芸達者

つれあいが静かな時は要注意
鶯の子は普通は鶯と考える
人間を信じ普通に生きている
普通のひとに就職が決まらない
普通車のスローな旅がたまらない
ありがたい普通の事がまだ出来る
敗戦時今の普通は高級だ
人並みのくらしでよいと成り下る
錆びるよりすり減る部品持て余す

川柳塔まつえ吟社(島根) 三島 沁丘報

ジョークとは知らず本気になっている

かつみ 喜美子 英子 京子 美津恵 醉芙蓉 祐子 石花菜 風露 いさお 次男 きみ子 龍枝 和子 睦子 鬼一 玲坊 賀寿恵 螢 けいこ 由紀子 日出子 康子 照彦 町紅

だんまりが素朴なジョーク投げかける
始まりはジョークで言つたプロポーズ
ジョークひとつとばし口笛吹いて去る
独り居に恋人募集ジョークなり
コーヒーが沸いてジョークが生まれだす
職安に人が溢れて国が病む
天職と雖いだ看板閉じる店
自分史に四十年を誇る職

職場での花も帰ればおさんどん
やつと得た職も綻びかけている
天国へ送つてあげるそんな職
うぬばれてるから一人浮いている
輪の中で浮いておられます強い灰汁
泳がないのでさざ波に浮いている
童謡を歌つて浮き浮きおもちゃ箱
泡一つ金魚の不満浮いている

浮いているカラスが旗を立てたがる
ずばずばと仕切る母さん頼もしい
ずばずばと好きに書いてる日記帳
ずばずばと言つてケロッとして帰る
ずばずばと熊が田圃を歩いている
ずばずばと言つて世間を騒がせる
ずばずばと言つた後から胃が痛む
山彦と海彦遊ぶ春風
無駄づかい遊び心が支配する
廃船を遊ばせていた島の手
これからは遊びごころで舞う余生
遊ぶこと芸の肥やしにしてみせる

禮子 薫 きみえ 英子 玲子 紫晃 注湖 ススコ 多喜 美智子 茂美 静恵 蘭 ちえこ 桂子 知恵子 和歌子 芳恵 昌枝 宏 房子 治代 たけし 幸子 日出子 寿代 柳歩

ロボットと遊ぶ子供の未来像

尼崎尾浜川柳会兵庫 田原 一兆報

ご機嫌がななめのような明日にしよ

掌でやさしく包む臘月

春の日は誘ってくれて絵画展

忙しい毎日がある有難さ

苦勞性心配の種聞き歩き

厳冬に耐えて木の芽に花衣

らんまんの桜世相を和らげる

見送りへ小舟かたむき肝冷す

五十年過ぎて上手に聞き流す

ばあちゃん元氣百まで生きそうや

天氣予報よく当ります冬の雨

心配の種を食べてる青い鳥

愛の色加えて夢を描いている

仲なおりしやすい妻とけんかする

さくらさくら幸せ色の散歩道

水仙は岬の斜面咲き上がる

校門を新芽が走るパピブペゴ

子供には心配な顔見せぬ母

パパ酔えば個人情報たれ流し

ひとつ傘雨がななめに降りかかり

一呼吸置いてことばをふくらます

絡まれてもそうやそうやと逆らわず

ボクのいえ活断層の上にある

ななめから見ればこの世も面白い

ケチでない証なみなみ注いでやる

浜丘

一兆報

菜々子

雪菜

江美

野薫

正治

亀与子

真陶

よし子

キヨミ

昭三

よしひさ

孝一

章子

政江

勝巳

哲男

五月

里江

耕治

紀乃

朋月

美義

鹿太

かずお

午前二時何処はつづいているのやら

そうやそうやあんなの顔みて思い出し

医者よりも妻の見立てがよく当る

木の芽立ち肌着一枚脱がされる

喜寿になり父の回向を思い出す

新聞を斜め読みする朝の靴

はびきの市民川柳会大阪 永田 章司報

吟行に彼岸桜がお出迎え

足弱もおかげ様で花見する

尼寺が教えてくれた女道

官公へ勝手な願い絵馬にのせ

赤ちゃんの額に大の文字があり

梅は散り桜が招く道真公

要求を拒んでからの向い風

この中のどの木がうめの実をつける

質草は当然流す貰いもの

金婚へ聞き流す技研えてくる

こだわりを流し今では無二の友

埋蔵金が流れている永田町の闇

聞き流すことにも慣れて丸く住む

無駄な汗流してないと言いつけ

病み上り背中を流す手が温い

最高のギフト天国への切符

ギフトから飛び出す友の思いやり

思惑がありあり見えているギフト

倍返しされ悩んでるギフト券

せつかちの桜の開花温暖化

美代子

求芽

靖鬼

イサミ

蓄水

美龍

章司報

真一

敏

悦子

いさお

静子

久仁子

猿杓

美代子

ちづる

みつこ

章司

元紀

泰子

ダン吉

アヤ子

一壺

一知

庸佑

恵子

正子

お水取り終わる日待つ春はそこ

淋しさをロングヘアで華やかに

黒スーツこころ引き締め春の園

六甲川柳会兵庫 伊勢田 毅報

たてまえを崩すと気合入らない

一歩下がって迷いを空へ解き放つ

這い這いの迷いはなくて母の膝

この部屋を終る住み家に決めかねる

迷いから醒めて昨日と違う空

迷う度聖書の言葉探して

迷つて何に使うか給付金

軽率で迷いの渦に巻き込まれ

道迷い聞いた美人が今の妻

暗闇を迷い迷って帰る道

迷つたら帰ってこいと送り出す

無になつて長い階段上り切る

おどろ場で前後の策を考える

階段を見上げ気持ちも前を向く

階段をトントン今日はいい調子

階段を使つてエコのダイエツト

人生に非常階段欲しいもの

踊り場のレデイの足が眩しすぎ

手すりもち階段あがる天寿まで

年重ぬ階段見上げ弱音はく

エリートは長い階段一段とび

はやはやで永久にありたい共白髪

はやはやの朝刊開く朝の悦

千鶴子

りつえ

美喜

楓楽

美穂

美恵子

忠貞

武彦

基輔

順子

悦子

弘子

繁義

毅

能子

千賀子

孝子

登美子

利子

義行

弘

寛子

孝子

茂

光久

春香

店長の肩書き付いた遅い昼

はやはやの二人時間が止まつてゐる

はやはやの一年生が大手振る

すばらしい最年少のマスターズ

私にも家事定年が欲しいです

春惜しみブルーシートに散るさくら

思い出はふつと心の扉あけ

人間の姿に戻る水を呑む

春うら黄色いえのぐ不足する

知恵くらべ泣く子に勝てぬおばあさん

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

瞑想するには丁度よい風だ

窓拭けばやさしい風に深呼吸

大自然砂丘の美術風まかせ

孫生まれ我が家に温い風が吹く

臆病風吹いて前には出られない

春風を柄杓に掬い飲んでみる

八十歳にゆつくり行くと風の彩

気温上昇桜にこころを呼ぶ

病む亡父がわたしを呼んで泣かした日

オイアナタ呼び合う人はもういない

おいと呼ばれたいと答えて五十年

オイあんな呼んで呼ばれて六十年

鶯が郭公が呼ぶ山が呼ぶ

地図広げ行ったつもりに見たつもり

赤瓦観光客が参観する

観光を視察旅行と言い換える

礼甫

和郎

洋一

幸代

政一

弘子

勤

無限

いわゑ

みつ子

きみ子

京子

孝恵

美恵子

節子

照彦

螢

和子

克枝

貴恵

紀美恵

禎元

美ツ千

道子

たかこ

公恵

観光は楽しい友とガイド付き

駅長の猫が来い来い観光客

我が町の観光目玉掘り当てた

遥かなる土蔵で人を倚せる町

日帰りのツアーで消える給付金

海の中山のままで観光地

旅人となつて近所のさくら道

星三ツあれば観光バスが来る

バス待ちの男女が集う役場前

雑音を丸く収める女房役

P.T.A.役に職業差別せず

役立たぬ一人息子を当てにする

物置に役目果せぬ扇風機

孫や子に打ち出の小槌ふる役目

役に立ついつも思つて生きている

五本指みんな立派な役がある

アカデミー賞に輝く汚れ役

防災の役目を森は知っている

豊中もくせい川柳会大敗 藤井 則彦報

散つてなお行方たずねる花筏

風呂上り女房さすがの二段腹

馴れ染めは傘差し掛けた俄か雨

花散つてこのけだるさを何とする

金婚に僕も齒の浮く感謝状

今が匂いいつもその気で飛び回る

さすがとは言われないままここに

止まらない四季折々の花粉症

義人

みち子

久芽代

龍枝

清

三津子

くにこ

芳光

和枝

美代子

小生

勝憲

玲子

重忠

滋

美智江

石花菜

富枝

郁子

啓生

庸佑

(久)玲子

則彦

巴子

堅坊

宇乃子

晩学の机上に新のまのの本

犬の散歩相手の毛並ちり見る

今の今もらした愚痴が命とり

自画自賛今一つだがまあいいか

喜劇なら演じなくても地で行ける

今一度チャンスが欲しいタッチの差

さくら桜いろはにはへどちりにけり

イチローはさすがと日本沸いている

寂しくて喜劇ばかりが見たくなる

今に生き今に感謝しボチと居る

逆転へ勝者の焦り伏せて置く

散らかした部屋で昼寝をする天下

今気づく亡母の気持も言い草も

身の危険さつとかわせる白い杖

散らないで待っていますと花便り

今に見ろ介護で抓つてやるつもり

今一度燃えたい心風が知る

ゆとりとはこんなものかな旨い酒

虚勢張り喜劇演じた日の疲れ

散りぎわに男の意地がほとばしる

今という点のつながり生きてゆく

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

花庭遠い走りのニューフェース

新人の背なは遠い日の俺だ

春ですよ新人の胸花が咲く

緊張感あふれる姿勢新人よ

それぞれの思いが残る魚拓帳

寅次郎

満寿巳

求芽

満的

美智代

幸雀

寿美子

勇治

(久)千代

美義

志津子

見清

宏子

早人

千枝子

尚士

十八娘

隆

満子

葉子

夢

蟹郎

孝男

清帆

幸枝

重忠

へその緒が切れてそれぞれ荷を担ぐ
棒切れを持った巡査が邪魔をする
腰曲げて歩きやたらに当る棒
死ぬまでの相棒と決めてある
棒グラフトップで靴もよれよれだ
棒読みのように生えれば味が無い
頑張った今日を知ってる棒グラフ
足腰が棒になつて春の野良
つつかい棒折れて迷路の旅づく
夢叶う日までせつせと汗流す
見てくれの良心詐欺師かも知れぬ
良心を持て余してる意地の張り
与野党に良心なんてあるのかな
猪の良心家の田んぼ避け
良心が責められてる嘘ひとつ
言い訳の小さな嘘に目を伏せる
一かけら良心みんな秘めて持つ
商いが良心的で人が寄る
逃げきつたところで良心疼きたす
それぞれの器へ神は運を盛る

川柳さんだ(兵庫)

北野

哲男報

菜の花も桜も咲くが無人駅
薄情な雨よ朝から花に降る
春ですねいつもと違う胸さわぎ
旅立ちの春を乗せてる花筏
春つらら痴呆の母も笑み浮かべ
夜明け前街角景気春近し

正和
耕治
ちあき
茂山
光久
雅司

一 瑠
螢
はるお
圭一郎
きみ子
茶子
公乃
菖子
雅女
一京
忠良
節子
稔
幸安
美雪
よしえ
和子
かつみ
たぬ
美恵子

金だけでつないだ紐はよく切れる
また来よう心をつなぐ国訛
神様のこ褒美あなとの出合い
顔つなぎ笑顔ひとつですまされる
行く末の我が子のために今は鬼
派遣切りハローワークは人の列
金貸さぬ力も貸さず尻叩く
ばあちゃんはおモチ買う役決めている
主婦業も定年制が欲しくなる
主役にはなれないままに幕がおり
顔よりも大きな口でねだる雛
我が家では結びの言葉いつも妻
ウィルスが医者のパソコン食い荒す
母は口父は背中の子を仕付け
借金で首がまわらぬ子の未来
新しい細胞つくる笑い顔

川柳ねやがわ(大阪)

龍島

恵子報

うっかりと迷うた道で遭った虹
締切も賞味期限も無い命
川柳の締切りだけがある老後
転び方心得ている歳の功
春の陽にうっかり寝込む昼の月
現役の頃は優しい妻でした
メールする群衆の中孤独感
締切りは一つの区切り次もある
ナツメロでうっかり歳がばれまし
懐に春が来たよと給付金

ただし
柳弘
弘一
寿子
祥昭
仁清
美智子
弘風
かすみ
加代子

忠
美籠
婦美子
順子
キヨミ
裕美
見
一子
歳子
朋月
祐康
聖也
一泉
好文
章子
哲男

イメージを妻に作られ慈なし
その節は頼んまつせとおくりびと
ケイタイを持たぬ男がもつ美学
うつかりを春の手帳に叱られる
ケイタイを不携帯だと叱られる
命ある限り家族を守り抜く
ラジオドラマ聴いてイメージくらます
イメージも夢もふくらむ新世帯
夢賭けた締切りポストまで走る
無駄口がうっかり飛び火してしま
うつかりと夜中に隣の戸を叩く
ケイタイを切つて自由を謳歌する
締切ったシャッター街が冷えている
前向きに明日のイメージ膨らます
別れてから足りないことは湧いてくる
半額をきつしり詰めてきたリュック
あの世行きのイメージかえたおくりびと
この辺で大差つきたい空気吸う
乗り越してしまつた春のモノレール

川柳茶ばしら(愛知)

板山まみ子報

ガス欠で何処まで走る自民党
花が咲きサクラに縋思い出す
モルモットですと宇宙士笑顔見せ
すぐ熱くなつて失敗繰り返す
すまないねいつも似たような献立で
胃カメラに写らぬところ俺の謎

廻行
文男
幸子
美千代
由美子
雅美

麗
壽男
郁夫
洋
銀杏
ルイ子
さち子
栄二
一風
とし子
三郎
庸佑
賢子
朝子
亜成
博泉
薫
典子
恵子

新学期悲喜こもごものクラス替え
昼からの会議あくびをかみころし

かつ子
まみ子

堺川柳会大坂

河内 月子報

四股踏んで今日いちにちの幕をあけ
花一ぱい四月は山が笑いつめ
三人目出来たと騙す四月馬鹿
古里の便りにいつも四季の花
空見ても咲く花見ても四月好き
口惜しいが恋に溺れたことがない
つまみ食いの罰でメタバと論される
俺よりもあいつ信用してる妻
四拍子春がのんびりやってくる
青アント株に溺れた過去があり
上役があいつに変わる縄のれん
四人目も生みやと言われ元氣出る
溺れないようにしつかり杭を打つ
あいつとなら泥の舟でも乗ってやる
溺れたらあなたの腕にしがみつく
四つ相撲妻に勝てない定年後
傷癒えぬ人もバンダも四川省
温暖化いずれ溺れていく地球
溺れてる金植忘れ飛び込んだ
人生の岐路にはいつも居たあいつ
初孫に溺れ家中赤ちゃん語
過疎化でもまだ頑張っているあいつ
杖ついて芭蕉を辿る寒い春
名を忘れあいつあいつと繰り返す

恵 勇
冬 虹
八千代
公 誠
半 銭
俣 子
五 月
かりん
さくら
時 雄
山 彦
舞 夢
好
りつえ
像 山
としお
朋 月
綾 乃
つづや
雅 明
唯 教
直 樹
玄 也

一番にあいつやつぱり来てくれた
幸せはあいつと呼べる友がいる
溺れてる私にすぎる人がいる
好きな子をあいつと呼んで通せんぼ
あのアホが何であんなにえらなつた
溺れてはない犬かきで行くこの世
アリバイもあいつの口で潰される
四角四面くずせぬ古希で嫌われる
孤立してネットの海に溺れる子
四苦八苦したのに漏れていた内緒
川柳塔すみよし大坂 岩崎 公誠報

篤 子
喜 子
千 代
日の出
健 吾
天 笑
清 晋
雅 子
月 子
篤 子
庸 佑
桃 花
日の出
芳 香
舞 夢
まつお
のん子
章 久
遠 野
りつえ
チエ子
幸 子
ばっは
太 郎
岳 人

水面下短い足が細長い
畔塗りも済んだ田植の水を張る
DNAを溶かした水にある記憶
水溜り二年前なら飛び越えた
水面を覗き見ながら策を練る
列島の水位は滾る不況風
脱水をすればストレスまで抜ける
水の面ワルツを踊るアメンボウ
散々に川を汚して水を買う
増やしてた株の儲けも水の泡
残したい消したい言葉水に書く
良い流れ途切らせぬよう水を撒く
明日がある無いかも知れぬ水の音
甘い水飲んで記憶にありません
水色で塗る凡人の水の色
生き生きとポニョが居そうな水の彩
オシッコを水に戻して飲む宇宙
水平になると錯覚下り坂
サークル檸檬大坂 吉田あずき報

定 子
裕 之
哲 矢
克 博
矢 末
五月
温 子
半 銭
柳 弘
賢 紀
昌 龍
美 朝
公 誠
房 子
蕉 子
扶美代
光 久
みつ子
遠 野
義 子
たもつ

不器用にゼッケンつける木綿針
 風格の割に小銭の音がする
 転ぶたび自信を持てと影がいう
 老眼鏡かけても糸が通らない
 老後には笑顔たっぷり溜めておく
 人間がとつても好きな木綿針

美 千代
 加お里
 昌 紀
 希久子
 楓 楽

朝顔川柳大会

日時 7月8日(水)11時開場 締切13時
 会場 東京都台東区生涯学習センター
 宿題と選者(3句) 会 費 1000円

「しょうがないなあ」伊藤正紀・「たんまり」米島暁子・「まちぐるみ」宇都幸子・「ちよいとそこまで」植竹団扇
 「ぶんどる」播本充子・「らくちん」田中八洲志・「りそうはそつだが」大川幸太郎

特別課題(二句)

「あれもこれも」山本 桂馬 謝選
 主催 台東川柳人連盟(台東区は川柳発祥地)

第2回 愛・やすらぎ川柳募集

兼 題「愛」審査委員 両川洋々(委員長)

藤原鬼松・鈴木公弘

ハガキに住所 氏名・年齢・電話、2句内
 応募先 〒689-0344 鳥取市青谷町山根313
 あおや和紙工房内 川柳係 宛
 締切 6月20日(土)必着 賞金3万円他

第40回奈良新聞川柳大会

日時 21年7月26日(午)午前10時開場
 会場 奈良県文化会館 小ホール
 TEL 07422318921

お 話「川柳として読む万葉集」上野 誠氏
 (バス「県庁前」下車北へ3分)

締切11時30分各題2句

席 題「」 吉川 卓 選
 「ダルマ」 坊農 柳弘 選

「自分」 牧田 俊彦 選
 「深夜」 松浦 完次 選

「返る」 鶴本 むねお 選
 「海」 阪本 高士 選

「銀」 西川 国治 選
 「挑む」 田中 新一 選

出席申し込み 7月17日まで下記へ

〒630-8886 奈良市法華寺町2番地4
 奈良新聞文化事業課川柳係

TEL 07422322115
 FAX 07422322774

会 費 3,000円(昼食、発表誌呈)
 欠席投句 500円同封 下記へ

〒630-8844 奈良市六条西3-13-37
 大楠 紀子 宛 7月10日消有効

主 催 奈良県教育委員会、奈良市教育委
 後 援 員会、奈良県川柳連盟

第25回国民文化祭

おかやま川柳プレ大会

応募受付期間 21年5月1日〜6月30日
 第一部(応募規定)事前投句 各題2句
 (ジュニアの部、小、中学生)

課 題「地図」大森 昭恵、「テレビ」河原
 千壽、「給食」高木 勇三
 (高校生、一般)

課 題「ふるさと」大家 風太、「舞台」岡田
 千茶、「枕」古今堂蕉子、「無 矢沢
 和女

応募先 第25回国民文化祭久米南町実行委員会
 〒709-3614 久米郡久米南町下弓削502-1

第二部 当日投句 21年10月25日(日)
 久米南町文化センター19時 開場

各題2句「輪」赤井 花城、「裁く」池 森子
 「ピンチ」本田 智彦

特別課題 1句のみ 当日発表 新家 完司
 応募料 事前投句 1,000円

大会当日 2,000円(記念品、昼食、大
 会誌呈)

問合せ 弓削川柳社0867-128-3540
 〒709-3612 久米郡久米南町下弓削1210

第12回 鳥取県川柳文芸大会

日時 7月12日(日) 午前10時開場

場所 新日本海新聞社5階ホール

(JR鳥取駅南口から徒歩3分)

兼題と選者 「禁」 鴨谷瑠美子 選
各題2句 「湧く」 本田 智彦 選
席題なし 「コンビ」 足立智恵子 選
「渚」 中村 金祥 選
「弾む」 春木圭一郎 選
「誤算」 岡村 孝明 選
「そして」 中田 房江 選
「我慢」 吉田 陽子 選

締切 午前11時半

会費 当日 2,000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1,000円(大会誌呈)

表彰 1句1点総合成績10位まで呈賞

欠席投句 締切 7月8日(当日消印有効)

用紙 自由(事務局により清記)

宛先 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110

夏目 一粋

主催 鳥取県川柳作家連盟

第10回 生駒市民川柳大会

日時 21年7月19日(日) 12時30分開場

会場 生駒市芸術会館「美楽来(みらく)」

TEL 0743-74-1101

〒630-0246 生駒市西松ヶ丘2-20

挨拶と祝辞 生駒市長 山下 真氏 他

講演 「天皇家以前のふるさと生駒」

青山 茂氏

事前投句 「変化」 宮田 宜子 選

宿題 締切 13時30分(2句単記)

「届く」 板野 美子 選

「目」 河内 天笑 選

「うねり」 田中 新一 選

「余韻」 玉利三重子 選

「歩く」 菱木 誠 選

会費 1500円 発表誌呈

事前投句 ハガキにて、締切6月19日(出席者のみ)

(生駒市芸術会館「美楽来」も可)

お問い合わせ 「美楽来」および 吉川 卓方

「生駒番傘川柳会事務局」

TEL 0743-70-0220

FAX 0743-70-0221

主催 生駒市・生駒市教育委員会

生駒番傘川柳会

後援 全日本川柳協会・奈良県川柳連盟

生駒市芸術協会連盟

創立35年 川柳展望全国大会

第7回現代川柳大賞発表

日時 7月26日(日) 午前10時30分開場

会場 ホテルアウィーナ大阪

電話 (06) 6772-1441

(近鉄上本町徒歩3分、地下鉄谷町9丁目徒歩8分)

参加費 2000円

お話し 「川柳の妻さ」 大野 風柳氏

締切 12時00分(各題2句)

席題 「」 扇 涼平 選

宿題 「好き」 共選 (吉崎 柳歩 選

「追う」 永井 玲子 選

「上」 安黒登貴枝 選

「日本」 中村 和 選

自由吟 金築 雨学 選

自由吟 久場 征子 選

自由吟 津田 暹 選

自由吟 新家 完司 選

自由吟 天根 夢草 選

自由吟は各選者に違う句を出してください

※各選者秀吟2句呈賞

質疑応答 進行/天根夢草

*大会終了後の懇親宴(6000円)、宿泊(6300~)は

7/15日迄事務局に申し込んで下さい

主催 川柳展望社

事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101

TEL.072-649-5226 FAX.072-649-2334

第17回 相生市もみじまつり川柳誌上大会

課題と選者

「花」 芦屋 北村 紅 絵 選

「朝」 吹田 山本 希久子 選

「手」 明石 黒嶋 海童 選

「葉」 吹田 穴吹 尚士 選

「道」 神戸 前川 千津子 選

「雲」 神戸 平山 繁夫 選

出題 6題 1題1句吐

投句料 1,000円(定額小為替) 発表誌呈

投句締切 21年8月31日(月) 消印有効

投句様式 所定の投句用紙又は便箋外

〒住所・姓雅号(ふりがな)・電話番号

投句先 〒678-0055 相生市那波本町3-21

安原 栄子 電話 0791(22)5349

賞 6題合点により30名に市長賞外呈

問合せ先 〒678-0005 相生市大石町4-1

真殿舎句里 電話 0791-22-1754

主催 相生市・相生市教育委員会 他

企画 相生市川柳協会

後援 兵庫県川柳協会・相生市観光協会

柳界展望

○4月12日(日)ふあうすと川柳社80周年記念大会は、兵庫県民会館に於て開催。出席者334名。同人の受賞。神戸教育委員会賞

○4月12日(日)、川柳塔みちのく波多野五楽庵傘寿記念句会は76名の参加により開催、同人の秀句

ときどきは触って欲しい
薔薇の棘 高瀬 霜石
エビローグまでは自分の色を溶く 高橋 岳水
ははに似た日傘を尾行し
てしまふ 高瀬 霜石

○第29回ときせん賞が発表され同人の次の句が準とき

せん賞となった。

一言で春 一言で氷点下

中崎 深雪

総合2位に中崎深雪さん、4位に堀正和さんが入賞。

○第14回五呂八川柳祭全国誌上大会(投句者452名)、特選。

おくりびとなんと綺麗な男の手 播本 充子

○4月28日(火)川柳塔のぞみ創立5周年記念・不見川柳社との親善句会は、日光晃陽苑にて、324名(投句者を含む)の参加により開催、同人の天位。

積み終えた石のすべてに有難う 八木 千代
目の鱗落ちて桜はさくらいろ 木本 朱夏
善人になるには金がありすぎる 木本 朱夏
手にとれば古いノートは目を覚ます 高島 啓子
まつさらのノートばかり花いっぱい咲いてわたし

も春になる 大内 朝子

門構え漢字博士の自負がある 根岸 方子

▽御芳志御礼△

○川柳塔のぞみより五周年記念大会の御礼として金一封拝受。

○山門タミさんの御遺族より金一封拝受。

▽同人動向△

○堺市は今年度、市制施行百二十周年並びに政令指定都市移行三周年を迎えるに当たり、堺市特別功績者表彰を行い、初回文化功績賞に河内天笑氏(主幹・堺市)が選ばれた。表彰式は5月3日、リーガロイヤルホテル堺にて行われた。

○高瀬霜石氏(理事・弘前市)はNHK総合テレビ(東北地方)の「情報パレット」(月・金11時5分、12時)に出演、8月4日、11月10日、22年3月2日の川柳コーナーを担当。句の応募を呼びかけている。応募先1980184335NHK仙台放送局「情報パレット」

新同人紹介

二宮紫鳳

―博泉・亜成・シマ子推薦―

ツト・川柳係 FAX 022212150111 兼 題問い合

平成柳多留賞は該当なしとする。

▽新誌友紹介△

米子市 高田 振作

紹介者 両川 洋々

大阪市 辻本 明雄

紹介者 川端 一步

大阪市 吉田 知之

紹介者 太田 昭

出雲市 米原 妙子

紹介者 竹治ちかし

常任理事会 5月7日(木)出席20名 ①川柳塔85周年記念大会について ②特別常任理事会内容の件 ③常任理事の各地句会担当について ④理事の任務 ⑤大阪川柳大会選者選定 ⑥川柳塔誌、檸檬抄選者交代の件 ⑦本社句会開始時間 ⑧その他 次回6月9日(火)

▽削除△

○五月号山頁上段4行目、

「二呼吸おいて言葉の棘を抜く、井元由喜子」を削除。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 さんだ	16日(火) 午後1時開場 謎・美人・ストレス・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	20日(土) 午後2時半締切 責任・黄・米	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
岸 和 田 川 柳 会	20日(土) 午後1時半締切 権威・こたえる・さっぱり シネマ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	21日(日) 午後1時半締切 頑固・底・露見	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 ねやがわ	21日(日) 午後1時半締切 ポスター・渡る・沸く・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	21日(日) 午後2時締切 謎・叩く	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
南 大 阪 川 柳 会	22日(月) 午後6時から やらせ・薄い・ひつつく 雑詠	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	22日(水) 午後8時締切 パン・弱い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	26日(金) 午前9時半から 好き・潮時・担保・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	27日(土) 午後7時締切 時間・ときめき・消える・芸	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和 歌 山 三 川 柳 幸 会	27日(土) 午後1時から 錯覚・降りる・汗	和歌山市商工会議所4F 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日) 午後1時より 目には目・パイプ・棺(ひつぎ)	鳥取駅2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日) 午後2時締切 べしゃんこ・きょう・削る ニュース	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	29日(月) 午後2時締切 はじく・踏む・静養	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	4 日(木) 午後 1 時開場 濡れる・菌・半端	奈良市立中部公民館 4 F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町 2-1-24-901 安土理恵
富 柳 会	6 日(土) 午後 1 時から 頑固・見直す・自由吟	富田林市中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0072 富田林市高辺台3-3-18-105 古田千華
倉 吉 市 川 柳 会	6 日(土) 午後 2 時締切 構える・頭・運氣	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城 北 区 川 柳 会	6 日(土) 午後 1 時開場 ひとつ・気転・シンボル 自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏義典子
西宮北口 川 柳 会	8 日(月) 午後 1 時開場 影・移る・ひたすら・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 会 同 好 会	9 日(火) 午後 1 時半締切 百・繕う・とことん	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼 崎 市 尾 浜 柳 会	9 日(火) 午後 2 時締切 最低・こだわる・文句・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町 2-45-8 山田耕治
堺 川 柳 会	13 日(土) 午後 1 時から 派手・玉・「かなめ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 大 阪	13 日(土) 午後 1 時から なるほど・汗・適当	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 みちのく	13 日(土) 午後 5 時締切 醒める・評判・ぐずぐず	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	13 日(土) 午後 2 時締切 渦・腕・売る・ねばねば	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 打 吹	13 日(土) 午後 1 時から 息・刺激・潰す	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	14 日(日) 午後 2 時締切 満足・開放・わいわい・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	14 日(日) 午後 1 時開場 濡れる・時間・スタッフ・ 日本の建築物	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
豊 中 市 も く せ い 川 柳 会	豊中もくせい川柳会25周年記念大会 16 日(火) 午後 12 時半締切 祝う・銀・いきいき・高い・出発・チェンジ	豊中市立市民会館 阪急曽根駅南東徒歩 5 分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清

編集後記

☆特集「父を語る」にはさまざまな父親像、重厚な父

のドラマの数々が描かれています。娘の父親に対する想いに共通点のあること、息子にとつての父親の存在感などが、よく表れていきます。6月21日は父の日、あらためて、父との絆を想う機会となることでしょう。

☆ あたたふと青葉若葉の

日の光 芭蕉

この句のように日光の観光にはベストシーズンの4月29日、陽光は眩しく東照宮の神域を隅々まで照らしていました。前日「のぞみ五周年」の大会をすませて、東照宮参拝、特別御祈禱を受け、神主さんに案内をしていただきました。

☆東照宮の数多の彫刻、12の門、建物には深い意味が

あるとの事です。

☆日光連山男体山の頂には雪が残っていました。街は初夏のような光が満ちていました。

☆「川柳塔」誌に付いている投句用紙について、切り取りにくいのでミシン目の切り込みを入れてほしいという要望が、あちこちから出ています。コストの関係上、検討中なので今しばらく辛抱下さい。(希)

★あじさい寺の冬を想像せぬことだ 智子

智子

★小出智子先生が亡くなられたのは平成九年六月二十二日。享年七十一。身弱な体で川柳塔社・理事長として尽力された。平成元年に出された句集『路の臺』の序文は当時の主幹・西尾菜★「智子さんは若い人からお姉さん又はお母さんと慕われ、作家としての指導力と尊敬する優美さとを兼ね

おめでとう五周年

ひとこと

四月二十七日、いよいよ川柳塔のぞみ五周年記念と不二見川柳社の親善句会へと二泊三日の旅に出た。会場は、日光東照宮見陽苑である。日光をまだ知らぬ私にとつては句会のお祝に行く目的は勿論の事ながら観光に胸を躍らせていた。前日の準備の時からお仲間に入れて頂き和氣藹藹と楽しい時を過した。

当日は受付と文台の係をさせて

頂いたが関西と少し雰囲気が違うので緊張をした。
いざ開会となり、吉本瘦児氏のお話があった。不二見川柳社とのぞみの日頃の交流の中で川柳は文芸であるという思いが響き合い、一緒に句会をしようと言う事になったようである。川柳は文芸である。心新たに俳句を楽しみたいと思った。憧れの日光を満喫し思い出話を一杯胸に抱いて帰路についた。有意義な機会を有難うございました。(大内 朝子)

備えた申し分のない立派な

おられる。

★智子先生は冬、ことに二月がお好きだった。『路の臺』には控え目な中にも筋の通った先生の姿勢がうかがえる。決してスタンダード

レーはなさらず、淡々とわが身のうちを刻まれた作品の数々が愛しい。(朱)

○路郎師は「川柳とは何か」の自序に次のように述べて

の人の姿であり、リズム

はその人の呼吸である。

○川柳とは何かを思うと人間へ締め木をあてて絞るとき、私はこの路郎師の言葉を反芻する。句を推敲するとき私自身は句の何処に居るのか、人間や社会の何を詠もうとしているのか自問する。

○人間不在の川柳を散見するだけに、今一度この言葉

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(8月号)

地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「保険」 (6月15日締切)

8月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府
姓雅号

地名

市都
県道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選
水煙抄 (8句) 小島蘭幸選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「保険」 (2句) 高瀬霜石共選
木本朱夏選
一路集 (3句) 「乾く」「貝」「ほがらか」
安藤壽美子選
富士慕情選
古久保和子選
初歩教室「激しい」 (3句) 鈴木公弘担当

9月号

檸檬抄「楽器」
一路集「予定」「新聞」「ぴったり」
初歩教室「グループ」

本社6月句会

とき 6月9日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締め切り時間に御注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06-6772-1441
おはなし「老いの覚悟」
兼題「横」
「育つ」「夕づ」「手づ」「紙屑」
井上桂作選
穴吹尚士選
小谷集一選
亀岡哲子選
高田美代子選
井伊東吉選
河内天笑選
会費 10000円
投句料 5000円 (切手可)
(各題2句以内)

路郎忌本社7月句会

7日(火) 午後5時半から
兼題「裸」「伝える」「まさか」「寝息」「斜め」

第28年度 夜市川柳募集

第1回「流れる」 山本希久子 選
ハガキに3句 6月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

〒543-0052

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇〇九年(平成二十一年)六月一日発行
発行人 河内権治
編集人 山本希久子
印刷所 美研アート
大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
TEL・FAX (〇六) 七九一三・四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌読込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50余年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861(代)**